吸血鬼にも愛は必要？(仮)

U16

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
吸血鬼にも愛は必要？（仮）

【Ｎコード】
Ｎ１２５９Ｙ

【作者名】
Ｕ１６

【あらすじ】
西暦２１００年。世界は緩やかな停滞期を迎えていたが、２０世紀から大きく変わった事は吸血鬼という存在が世界中で認められた事だった。そんな中、新たな吸血鬼が極東の島国である日本で生まれた……

第０１話　新世紀を迎えて……（前書き）

この小説は筆者の自己満足小説です。
予告なく文章が変更、改訂される恐れがあります。
ご注意下さい。

第０１話　新世紀を迎えて……

恐らく彼は、自分の３０年に満たない人生の中で、最も驚きに満ちた顔をしていたのではないだろうか。

美女。美人。綺麗。

学校に通っていた時も文系ではなかった彼の頭の中には語彙が少なく、その３つの単語しか出てこなかった。

彼は、こんなにも印象的な女性を見たのは、初めてだった。

西暦２１００年を迎えてからまだ2日目。

テレビをつければトップモデルや女優、ネット3DCGアイドル等これでもか、というくらいに整った顔立ちや扇情的なボディラインの女性を見る事ができる。そんな現代では、彼女程度の顔立ちの美人はいくらでもいるだろう。

はっきり言ってしまえば、ありふれている。少なくとも彼の偶像（アイ）愛好家（ドルオタク）な友人は、そう評価するだろう。

経済的富裕国（先進国）。そう呼ばれる国々の医学は革新的な発達こそしなかったが、個人登録（パーソナル登録）とＤＮＡレベルでの病気の予防を兼ねた健康診断。この二つを小学校に入学する前の子供が済ませるのが当たり前になり、成人するまでの病気での死亡率は、ほぼ『０』になった。

それと同時に流行したのがＤＮＡ形成型整形手術だった。個人登録（パーソナル登録）と同時にＤＮＡ形成型整形手術を受け、成人するあたりで美男美女になれるように、ＤＮＡをいじるのが当たり間の世の中である。

そんな早期美容整形が当たり前（流行）になったせいもあり、世の中はよ

り本質重視になった。
　第一線で活躍する人材は、顔は良くて当たり前。スポーツ選手であれば運動神経や力よりも技術、芸人なら面白さ、役者は演技力、歌手は歌唱力、モデルであれば完璧に維持されたスタイルを駆使した無言の表現力、そういったＤＮＡの書き換えでは得られないモノが重視された。主義主張のぶれるコメンテーターなど過去の遺物でしかなかったし、テレビからも見た目だけの中身のないものは排除された。
　人は日々の努力が無くては得られない部分が評価され、物であればその本質的な価値以外、全く評価されない時代が半世紀も前から続いている。

　そんな訳で彼からすれば、見慣れた程度である筈の女性から――西暦１９８０年代生まれの曾祖父の影響で『でも２０世紀あたりなら、間違いなくトップモデルだっただろうなぁ』等と頭の片隅では考えていたが――何故か目が離せなくなった。

　灰色っぽい髪。同色の瞳。
　もしかしたら昼間見れば銀色なのかもしれない髪と眼が、彼の心を鷲掴みにしているので彼は身動きが取れなかった。
　彼女は温暖化のせいで、冬なのに本気でコートを着込む人も少なくなってしまった日本には珍しい、厚手の純白のコートを肩に羽織っている。
　そのコートの合間から見えている服は紺一色のロングのワンピース。柄や模様が特に無く、体のラインが出る様にデザインされているせいで、スタイルが良いという事ははっきりとわかった。そして、そんな服は日本では一般的ではなく、超の付く高級品である事は彼の乏しい知識でも認識できていた。

服装もそうなのだが、日本人ではなかなか見かける事のない腰の高さが目を引く。不健康に見えない程度に透き通るような白い肌と相まって、外国人なのだろうと考えていた。

彼は、そんな彼女をじっと見つめて観察していた事に対し『失礼だよな』と思い至る。謝罪しよう――会話したかっただけかもしれない――として、外国人なら言葉が通じないかもしれないと気付く。急いで携帯を取り出そうとしたが――携帯電話の１０ヶ国語翻訳機能を使おうと思い付いたのだ――彼女から目が離せないまま、何処に入れたのか分からない携帯電話を探し、手探りで服のあちこちのポケットを漁る。

「……やっと外に出て来た……遅すぎです……」

焦らなくても良いですよ。逃げたりしませんし。」

「え？　あ、すまない。ジロジロ見て申し訳ない。日本語が通じて良かった」

――彼女もまた、俺を見つめたままでいてくれた――

……いや、違う。言葉が通じて良かった……

でも何故だろう。彼女の表情は、家で飼っていた猫がよくやっていた表情に似ている気がする。

拗ねた様な――喜びを隠しながらも、怒っていますという感情を出そうとして出し切れていない表情――『もう二度と目を離しませんよ』そういう眼差しで見ている。と、彼は何故かそう思った。

彼は寝正月を満喫する為、たまたま無くなりそうな煙草と酒を補給する目的で、嫌々ながら家から出てきて彼女に出会った。

大晦日の終わりまで続いた仕事からやっと解放され、家に辿り着いたと思った瞬間に曾祖父を含む、家族全員に強制的に近場の神社へと初詣に連行された。

近場の神社で――たしか学業と雷の神様を祭っていたはずで、『

学生でもない俺には意味が無いんじゃないか？』という彼の意見は、家族一同に却下された――年越しと初詣を済ませて家に戻ってからは、一歩も外に出ていなかった。

正月だし、商店街から少し離れたコンビニエンスストアぐらいしか開いていない。どうせ車も走っていないのだ。歩道橋を上がらず道路を渡ろうとして、歩道橋の下にいた彼女から目が離せなくなった。

目が合った瞬間から、本当に一度も目を逸らしていない。瞬きすらしていないんじゃないかと、彼自身がそう思うほど見つめていた。彼女の言動をもっと見たい。彼女について知りたい事が溢れてくる。それにも関わらず、彼の体は何も行動を起さなかった。じっと見つめ、彼女の出方を待つことしかできない自分はヘタレだと、彼は心の中で凹んでいた。

彼女の視線や表情は、先程からの彼の予想通りの意味を持っていた。が、それに加えて少しどころか１２０度位、方向性の外れた事を――具体的には、此処で会ったが百年目。如何にして今迄の鬱憤をぶつけて困らせてやろうか。という様な少々物騒な事を――彼女は考えていた。

もちろん。彼にはそれは解らなかったし、彼女は現段階の彼が解っていなくても困らなかったし、仕方のない事だと理解していた。

故に彼女は思惑通り、普段とは違う可愛らしい仕草で話しかけた。

「携帯電話は、もう出さなくていいの？」

「え。あ、いや。もし外国の人なら翻訳機がいるかな、と思っただけで……」

「連絡先を聞きたかった。とかではなく？」
「あ、いや。教えてくれるなら聞きたいけど……って、ちがう！　ナンパじゃないんだ！」
「あら、そうなの。ナンパなのかと少しは期待したんですけど……」
そう言って彼女はお上品に口元に手を当ててクスリ、と笑った。
その瞬間、彼は自身でもはっきり分かるぐらいに顔が熱くなった。
――あー、やべ。今マジで真っ赤になってるわ。マジかよ。今幾つだか言ってみろ俺！　２８歳、四捨五入すりゃ３０だぞ！？　色々経験も積んだだろうが！？――
彼は何故そうなるのか訳が分からなかったし、その思考を始めすべての事が彼にとって、もはや意味不明だった。からかうように話しかけてくる彼女の意図も、自分のヘタレっぷりも。
何故、彼女の態度から勝手に意思を読みとったつもりになったり、彼女の行動に好意を期待したりしているのか。
彼は少なくとも恋人どころか、妻すら居た事のある身である。妻とは一年前に離婚し、それ以降どんな女性にも普通の――友人曰く、醒めた――対応だけはできる様になったはずだった。なのに、何故こんなに焦っているのだろうか。彼の頭の中は整理するどころか、幼稚園児の書いた題名のない絵の様にぐちゃぐちゃで訳が解らなかった。
「今の今まで半信半疑……いえ、信じてはいたのだけれど、からかわれている可能性を捨て切れなかったのよね。でも、本当にあなたの反応は私にそっくりね。初めて私を見つけた時のアナタの気持ちが少しだけ分かったわ」
「え？　あれ？　初めまして、だよな？」

「えぇ。あなたとは初めまして、よね。それとも『どこかで私を見かけて、ずっと追いかけてました』なんてストーカーまがいの事でもしてくれたのかしら？」

「してねぇよ！　いや、そんな顔するな！　マジでしてねぇよ、そんな事！」

明らかに、からかっています。という様な言い方の彼女に聞くべき事は分かっているはずなのに、全く話が進められない彼は感情をぶちまけた。

「訳わっかんねぇよ！　あーくそ！　とにかく！　俺は『彼方（かなた）　壱朗（いちろう）』だ！　覚えておいてくれるとありがたい、つーか嬉しい！」

「あら。自己紹介をしてくれたのは嬉しいのだけど、私は今は名乗る訳にはいかないの。ごめんなさい。

――そうね。呼ぶなら、『レイ』と呼んでくれる？」

「あぁ。なんか訳ありなのか？」

「そうなの。でもあなたには、近々名乗る事になると思うわ。あなたの事を『壱朗』そう呼んでいいかしら？」

「あぁ。構わない」

壱朗は彼女の名前が、別に偽名でも何でも構わなかった。彼女との会話もおかしい部分がいくつがあったが気にならなかった。話せただけで舞い上がっていたし、彼女の言う『初めて私を見つけた時のアナタ』も壱朗の事ではなく『アナタという名の誰か』だと、すぐにそう認識した。

なぜなら、壱朗は変な名前については慣れていたからだ。壱朗の『彼方』という名字も曾祖父の代からの物で、アナグラム（文字列逆順）であり、元の名字は『田中』だった。曾祖父の両親が事故で亡くなり、天涯孤独となった後で『どうせ名乗るのは自分一人なのだから、カッコよくしよう！』と名字を変えたらしい。曾祖父本人曰く、『黒歴史』

だそうだ。

この壱朗の曾祖父の『黒歴史』が無ければ、壱朗の名前は『田中壱朗』などという、下手をすれば『記入方法の見本』の様な名前になるはずだった。（山田太郎や鈴木一郎）

そんな『黒歴史』のお陰で『記入方法の見本』となる事は避けられた壱朗だったが、同時に嬉しくない『黒歴史』をも刻んだ。

高校に入学し、2ヶ月ほど経った頃だった。一つ年上の先輩が『どうせならスズキやサトウなんて珍しくもない名前じゃ嫌よね。……という訳で彼方クン、私と付き合ってくれない？　結婚したら私は「佐藤」理沙から、「彼方」理沙になるのよね。可愛くない？』という訳のわからない理由の告白に、壱朗は『マジ可愛い。芸能人にいそうな名前だ』等と言って即ＯＫした。高校一年にして、初めて彼女ができた事に有頂天になった。

当時から偶像愛好家（アイドルオタク）な友人と共に居たせいもあり、中学ではモテる事のなかった壱朗は、邪魔しようと躍起になる友人達――自称オタクな親友――を排除し、高校一年の冬には初体験も済ませる事ができた。

そして、人生を謳歌していたはずの高校二年の秋に、リュウキ・リヴィングストンというハーフの転校生が突如現れ、――転校生が来るのが突如なのは当り前だったが――残念な事にその転校生に彼女を寝取られたせいで、彼女との交際は壱朗にとって思い出したくない『黒歴史』となった……

などと自身の過去を思い出し、顔が綻んだり凹んだりしている壱朗を見かねたのか『レイ』と名乗る女性が気を使って声をかけてくれる。（初体験の記憶／寝取られた記憶）

「あの、名前言えなくてごめんね？　そんなにショックだった？

もしかして姓名判断愛好家？」
「あーいや、そうじゃないんだ。『彼方』って苗字と姓名判断愛好家には良い思い出が無いというか。うん。それを思い出して凹んでただけだから」

レイの言う姓名判断愛好家とは、――19世紀に流行(はや)った姓名の字画から運気や将来性を判断する物などではなく――壱朗の初めての恋人の様な『どうせ世の中は美男美女ばかりなんだし、付き合うなら良い名前の恋人の方がいい』という考え方の人種の事だ。
実力主義の風潮が強い日本では、――壱朗も含まれてしまうのだが――成績的に底辺に近い高校や大学出身者には、こういう男女が多くいた。何しろ実力が底辺なのだ。親の資産か名前以外はみんな、似たり寄ったりだからである。
だからこそ、と良い名前の恋人を望む男女は姓名判断愛好家などと言われていた。実力主義の風潮が強い日本で親の資産などを気にしていると『金の亡者』などと言われイメージが悪すぎる為、自然と姓名判断愛好家が多くなってしまっているのが現状だ。

「そ、そう？　最後の方はかなりの哀愁を背負ってるように見えたんだけど……」
「大丈夫。大丈夫。……ちょっと振られた事思い出して凹んだだけだから……」
――――その瞬間。
壱朗はレイに両肩を鷲掴みにされ、歩道橋を支える柱に背中を押しつけられて睨まれていた。
「い、ま、な、ん、て、言、い、ま、し、た、か？」
「え？　え？　『思い出して凹んでただけだから』？」
「その前です！」

「ひっ。『大丈夫、大丈夫』」
『俺の状況は全く大丈夫じゃなくなったけど』とは、壱朗は口が裂けても言えそうにはなかったが。
「その後です！！」
「ちょっと振られた事を思い出して……『そこ！』……え？」
「誰に振られたんです？」
「え、いや……」

壱朗はあせりながらも頭を必死に働かせようとした――あれ、なんか彼女の口調変わってる？　これはあれだよな、ナンパまがいの事をしておきながら他の女の事を考えてたのを怒ってるって事だよな？　やばい、謝らないと。とにかく機嫌を直してもらわないと。でもさっきまでの反応と、これだけ怒るって事はそれなりに俺の事を気にかけてくれてるって事だよな？　上手くいけば一年ぶりに彼女ができるかもしれないかな？　――が、考えている事は現状の把握と無駄な妄想だけで、何一つ解決策が出てきていない事には気付いていない。
そこに追い打ちをかけるように、低く、唸る様に地獄の底から響いてきたかの様な声でレイが囁く。

「誰に～振られたのですか～？」
「い、いや、もう１０年以上前の事だしさ」
「そんな事は～、聞いておりません～」
「え、あ、はい。解りました。話します……」

――怖い。怖すぎる――そんな脳内警告を受け何故か丁寧に対応してしまう壱朗。
初詣帰りだろう、通り過ぎる家族連れや恋人（カップル）同士の通行人達の目にはヘタレな男の浮気が彼女にばれて、問い詰められているようにしか見えなかっただろう。

しかし、壱朗の側からするとそこまでされなければいけない理由は解らない。ナンパだと思っているなら、彼を置いてこの場から立ち去ればいいはずだ。無理に追いかける度胸など、ヘタレな壱朗は持ち合わせていない。

壱朗には全く解らないし、理不尽だと思うのだが――彼女の表情が『もちろん答えてくれますよね？　えぇ。拷問してでも聞き出しますよ？』と言っている――『自称、及び他称：ヘタレ壱朗』には何故か、逆らってはいけないという神の声が聞こえている様で、大人しく答える事にした様だ。

「えっと、高校一年の時の初めてできた彼女が……」

壱朗は答えながら、『そうだ。こんなに気になる彼女に出会えたのも、きっと昨日行った神社の神様のお陰だ。だからこの神様の声には従っておく方が良い……はずだ』と、自分を納得させていた。

……学業と雷の神様としてはかなり評判のいい神社が、縁結びにも御利益があるなどという話は地元の人間ですら聞いた事が無かったし、壱朗は近所の商店街でも有名になっているヘタレだという事実。この二点には精神衛生上の都合により、大いに目を瞑っておく事にしたらしい……

第０１話　新世紀を迎えて……（後書き）

感想やアドバイスを頂いてもお返事出来なかったり、文章に反映出来なかったりします。それでも私は感想を書いてやろうじゃないか！という方のみ感想をください。一年ほど色々な小説を読んだあげくとにかく妄想から生まれた文章です。設定や話の内容で類似のものが何処かにある場合はこっそりと教えて頂けるとありがたいです。
　盗作と呼ばれる様な類似性がある場合はこちらが削除、または改訂します。（内容はともかく時期的にこちらが先の場合は検討します…）

第０２話　吸血鬼が生まれた日（前書き）

プロローグの第０１話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第０２話　吸血鬼が生まれた日

レイの態度が豹変した後、二人は歩道橋の下に積み上げられた工事用の資材の上に座り、結構な時間話し込んでいた。いつの間にか手渡された缶コーヒーを片手に、過去に付き合った3人の女性と妻であった女性との成れ染めから顛末迄を、原稿用紙２０枚程度の文章で説明させられたあげく、その後数時間に渡ってどんなプレゼントを贈ったか等、詳細を暴露させられた。

家を出た時は暗くなり始めたばかりだった筈の景色も、今では既に真っ暗になった。生れてからずっとこの街に住んでいる壱朗は、全く人通りが無くなった事や周辺の雰囲気から、もうすぐ日付が変わるのだろう事を予測していた。

「大体の所は理解致しました。あまり時間もありませんので、このぐらいに致しましょう」

「ソウデスカ。御静聴アリガトウゴザイマシタ」

レイが白銀の煙管（キセル）を持った手を膝の上から持ち上げ、腕に着けた高級そうな時計を確認した後、煙管（キセル）に刻み煙草を詰める作業を始めたのを、俺はじっと見つめる。

話の合間に壱朗が煙草を吸い始めた時に、彼女も白銀の煙管（キセル）を――何処に持っていたのか――鞄から取り出し、足を組んで煙草を吸いだした。壱朗は女性が喫煙するのはあまり好まなかったが『アナタと一緒の時はたまに吸っていたんです』と過去形で言ったレイの表情のは、愁いを帯びたものに変化していた為、ヘタレな俺はそれ

以上は何も聞けなかったし、何も言えなかった。

――――別に足が綺麗過ぎて白銀の煙管（キセル）を見る振りをして、綺麗な足に見惚れていたから、何も言えなかった訳ではない。少なくとも今はそうじゃないぞ、と壱朗は心の中で、誰かに必死に言い訳をしていた。その時――――

「吸いますか？」

そう言って差し出された、年代を感じさせる白銀の煙管（キセル）からは俺好みのメンソール系の煙草の匂いがしていた。

差し出されたままの煙管（キセル）を見て、というよりも『吸いますか？』と問いかけたレイの言葉と態度が、とても妖艶な大人の女を感じさせるものになっていたせいで――『関節キスになるな』と青少年（ガキ）のような反応をしてしまい――『自分の煙草がある』と、煙草を出して断ろうと懐に手を入れたが、懐には煙草は無かった。

足元を見ると、無残に散らばった煙草の吸殻が十数本。話をしてるうちに、懐にあった煙草は吸いきってしまっていた様だ。

――俺は現状を理解し、覚悟を決めて吸わせてもらう事にした。

いや、覚悟が必要なのかと問わないで欲しい。目の前の女性（レイ）は最初話しかけてくれた時は、二十代前半らしい可愛い仕草だった筈なのだが、今では夜のお仕事のお姉さんよりも色気のある仕草で、こちらを誘惑しているのだ。

おかげでこっちは、今までの女性経験も全部吹っ飛んで青少年（ガキ）みたいな反応をしている有様だ。覚悟ぐらい必要だろう――

などと心の中で誰に話しかけ、言い訳しているのかは知らないが、壱朗の頭の中は混乱しているようだった。もちろん、レイが今の壱

朗の頭の中を覗けたなら、誘惑なんてしていないと否定するのは間違いないだろう。だが、少なくとも壱朗はそう感じていたのである

幸い、煙管（キセル）は曾爺さんの物を吸わせてもらった事があり、『下手な吸い方をして恥をかく事もないだろう』と、壱朗は手を伸ばした。

「悪いな、自分の煙草は吸いきっちまったみたいだ」

煙管（キセル）を受け取り吸ってみると、曾爺さんの物とは何かが違う。メンソールの刻み煙草も珍しいが、何故か終わりがない。普通は3回程しか吸えないモノだ。それに、今の自分の様に粋な吸い方に見せようとして、5回も吸っていれば灰が入って来てもおかしくないのだが、と覚悟が必要だった割には、余裕を持って平然と吸っていると……

「……関節キスですね……」

「ブホッ！！」

今、明らかに吸いこんだ瞬間を狙って言っただろうレイの声に、咳き込んでいるいる壱朗は目で苦情を訴える。そんな壱朗に、百人いれば百人が見惚れる様な微笑みを浮かべながら、レイが話しかける。残念ながら、レイの笑顔を堪能する余裕は今の壱朗にはなかったが。

「……煙管（キセル）は落とさないで下さいね。貴方から貰った大事な物ですし。私は初めて吸った時には煙管の吸い方なんて知らなくて、何度も吸ってむせてしまって。不思議でしょう？　これは特別な作りの煙管でして、１０回くらいは吸えるんです」

そう言いながら壱朗の手から白銀の煙管を取り上げたレイは、微

笑みながら躊躇いもせずに口に持っていき、残りの数回吸うと煙管を片付け始める。

「初めて、煙管の吸い方を教えてくれた時の貴方は数回しか吸えない事をわざと黙っていて、私は吃驚させられたんですよ？」

「俺は曾爺さんが煙管（キセル）派だから、吸い方くらい知ってたよ……」

咳き込んだせいか、目尻に涙を溜めながらも壱朗は言葉を返し、手に持った空き缶の中に足元に散らばる煙草の吸殻を詰めはじめる。元々、壱朗は吸殻を道端に捨てる様な人種ではない。レイとの会話に集中しすぎて、気が回らなかっただけだった。

「えぇ、だから詰まらないので、吃驚させたくって……これでお相子ですね」

「っていうか『アナタ』って人に騙されたからって、俺にこんな悪戯するなよ。俺を吃驚させてもお相子にはならないだろう。……それよりも、大事な物なら俺なんかに吸わせてよかったのか？」

「構いません。貴方も怒らないでしょうし」

不思議な部分の多々あるレイの言動だが、壱朗はそれに対して何故か嫌悪も疑問も感じなかった。レイがたまに見せる、どこか会話を懐かしんでいる様な表情は壱朗の頭の中をその度に真っ白にしたし、他の事がどうでもいいと思える程印象的だった。恐らく今、会話はできていても『明日には何を話したかなんて覚えて無いだろうな』と壱朗は思っていたし、何もなければ本当にそうなっていただろう。

「そう、か。……ならいいけどな」

「そろそろ時間の様です。きちんと説明しなければいけませんね」

名残惜しいが、煙管（キセル）を片付け始めたあたりで、時間がそう残っていない事は気付いていた。壱朗は認めたくはなかった様だが。

しかし、遅くまで話込んだせいで、家族に説明でも必要になるのだろうか。やはり育ちの良いお嬢様なのか？　もしかして、家族との約束を破らせたりしていなければいいが。などと壱朗は考え、謝ろうとした。

「あ、そか。帰るよな。ごめんな。変な場所に長居させて」
「いぇ。そうではありません」
「え？　それは……『ＰＵＬＬＬＬＬＬ』……ん、電話か」

着信を見ると、父親からだった。壱朗がレイを見ると、『どうぞ』と身振りで勧めてくれたので、片手で詫びて電話に出た。そして壱朗は、携帯電話を耳にあてたまま凍りついた。

「嘘だろ？　親父、曾爺さん今朝まで思いっきり走ってたじゃねぇかよ！」
『……』
「……吸血鬼……そうかあの化け物どもが……」
『……』
「ふざけやがって、曾爺さんが何したってんだ！」
『……』
「あぁ、とにかく今すぐ戻る。待っててくれ」
『……』

壱朗の父親からの電話の内容は、曾祖父の訃報だった。彼の曾祖父は１２０歳などという妖怪じみた年齢でありながら、化学の進歩と医療の発達のお陰で痴呆症を発症する事もなく、毎朝元気にジョ

ギングしていた。
流石に１２０歳という年齢は、現段階では人間の世界基準で見ても最も高齢な部類の人でもあったし、あと１０年生きるのは無理だと医者からも言われていた。
だがそれでも、今日いきなり死ぬはずもなかった。曾祖父は医療用マイクロマシンの投与も受け入れていたし、何より今晩は壱朗の友人の偶像（アイドル）オタクと、１９９０年代のグラビアアイドルについて語り明かす約束をしていた筈だ。
曾祖父は約束を破った事が無い事が自慢で町内では有名人だったし、壱朗はそんな曾祖父が好きで、その影響も多分に受けていた。

壱朗は携帯電話をポケットにしまい、何度も深呼吸をしてみる。落ち着こうととはしているが、上手くいかなかった。体がまるで壱朗のモノではない様に感じていた。壱朗の意思に反して小刻みに震え続ける体が、それを明確に物語っていた。

――吸血鬼。裏付けや確証のある記録に残っている分では、西暦２０００年あたりから世界中で認知されだした存在だと言われている。
その存在の情報が一般人にも公表されたのは、２０５０年頃の事だった。きっかけは、中南米のある大統領が退任演説中に自分が吸血鬼だと表明し、その場で自分の首を完全に切り離して見せた。もちろんそのままで生活できるはずもなく、すぐに元通りにしており、一時はＣＧや特撮（ヤラセ）ではないのかという議論が持ち上がったそうだ。
その後、世界中の先進国が自分の国にいる吸血鬼について一般人に公表した事もあり、認知された存在となった。
２０００年あたりから、大きく進歩することなく行き詰っていた医療技術は、吸血鬼等の存在の恩恵により緩やかにではあるが発達した――

その事件から５０年が経っている。
壱朗の生まれた時には既に当たり前の存在だったし、曾祖父がその恩恵である医学の進歩のお陰で、毎朝元気に走っている事もあり、比較的受け入れている側の人種だと壱朗自身は思っていた。が、やはり身内が被害にあうと『化け物』と言ってしまう事からも、心のどこかでは人間ではない人外の存在達を区別して見ていたのだろうと自覚した。

壱朗の心は落ち着き始めていた。しかし、体の震えが一向に収まる気配が無い。訳が分からなかった。『今すぐに帰って、詳しい事情を知りたい。友人にも知らせないといけない』と、思っているのに体が動かない。

――レイは気付いていた。
彼女は壱朗の身に何が起こっているのかを正確に知っていた――

「壱朗様、落ちいて下さい。私が、貴方様の傍にいますから」
「レイ？　何を言ってるんだ？　俺は落ち着いているだろう？」
「手を見て下さい。こんなに震えています。これでも落ち着いていると？」
「あれ？　何だ？　おかしいじゃないか、体が言う事をきかない」
「壱朗様。失礼致します」
レイは羽織っていたコートを傍に置き、正面から壱朗に抱き付いた。
そして、壱朗の耳に口を寄せ、促す様に囁く。
「私を乱暴にして頂いても構いません。強く、強く、自分が生きていると実感して下さい。壱朗様の心は生きる事を望んでいるはずです。体の変化を心で受け入れてあげて下さい……吸血鬼として生きる為に」

「うぅぅぅっっ……がぁぁぁぁぁっっ！」

壱朗の心にはレイの言葉は届いていなかったが、彼女は壱朗がどのようにしても許される存在だという事だけは本能で理解していた。

壱朗の腕は意思とは関係なく、レイの服を破ろうとする。しかし破けない。

普通に考えれば、ただの人間に服など簡単に破れる訳はない。

しかし、既に壱朗は人間ではなくなり初めている。

簡単に破ることのできる程の力がかかっていた。それ以上にレイを傷つけまいとする壱朗の意思の力か、壱朗がレイを引きはがそうとする力は、尋常なモノではなかった。

「壱朗様。お気使いは無用です。御自分の為だけに力をお振るい下さい。傷つけて頂いてもすぐに治ります」

その言葉が引き金になったのか、壱朗はそのままレイを抱き締めると、その体を細切れにしようとしているかの様に、引っ張り、掻き毟り、暴れた――

第０３話　過去への旅立ち（前書き）

プロローグの第０１話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第０３話　過去への旅立ち

壱朗が暴れ始めてから二時間が経過し、やっと壱朗の体は落ち着きを取り戻した。腕はレイの体を抱きしめたまま、全く離そうとしなかったが。

「壱朗様。もう落ち着かれましたでしょうか？」

「あぁ、大丈夫だ。ほんとうに、すまない」

壱朗は知ってしまっていたからこそ、無意識に『嘘』をついた。

壱朗は理解していた。

自分が一体何になったのかを。

そして同時に何故、自称『レイ』にそこまで心惹かれたのかも理解した。

目の前にいる自称『レイ』も同じ、いや、似た様な存在なのだと理解していた。

壱朗は頭の中を何とか整理しようとしていた。

――――曾祖父が殺された。家で壱朗の友人との約束があったはずの曽祖父が、外に出て吸血鬼に殺された。曾祖父にとってはいつも通りの行動だった。財布を忘れた時も届けてくれた事があった。走って追いかけ、忘れ物を届ける。そういう役目は曾祖父の役目だと家族みんなが思っていた。役目がある事は曾祖父が痴呆症を発症させない事にも繋がる。そんな風に話し合った事すらあった。しかしその役目のせいで曾祖父は死んだ。吸血鬼が許せなかった。それ以上に壱朗自身を許せなかった。曾祖父が外に出たのは壱朗を追いか

ける為だったと父親が言った。『どうせ隠してもすぐに気づくだろう』と教えてくれた――――

壱朗は今何をしていた？
壱朗は女性と話をしていた。
壱朗は曾祖父が襲われていた時に。
壱朗は女性と話す事に夢中になっていた。

やり直したい。
やり直したい。
やり直したい。

壱朗が吸血鬼になってしまったのは自分の罪の意識からだったのか？
壱朗のせいで曾祖父を死なせた罰だったのか？
壱朗が吸血鬼？　女性もそうなのか？

やり直したい。
やり直したい。

壱朗は人間も吸血鬼も許せない

やり直したい。

『「過去に戻ってやり直したい」』

――――そうして『真祖』『彼方　壱朗』は生まれた――――

落ち着いた。そう判断したのだろう。自称『レイ』はそのまま（抱き合ったまま）の体勢で話しかけた。

「話をしても、よろしいでしょうか？」

「いや、家に帰らないと。曾爺さんの事があるんだ」

自称『レイ』も同じような存在だと気付いて、少し嫌悪していた。嫌悪を感じ取ったのだろう。少し悲しそうな声色で話を続けようとする。

壱朗を抱きしめた手を、自称『レイ』は離す事なく続けた。

「その曾祖父様の事についてですが」

「……」

「曾祖父様を襲ったという吸血鬼（クズ）の、名前も、血族も、血統技能（アビリティ）も、居場所も、何もかも調べられますし、お教えできます」

「……」

「貴方様のお望み通りに致します。如何致しましょうか」

壱朗は十分程考えた後、はっきり言った。

「仇が取りたい。俺ができないのなら、できる誰かに依頼したい。そう言ったら可能かな？」

壱朗は答えは分かっていたのだが、一応聞いてみる形は取った。

「貴方様の手で果たせますし、果たすべきです。その為に最初の四千年を費やした。そう聞いております」

――俺は自分が何になったかを理解した筈だ。何を手に入れ、何を失ったのか。ガキの頃、ヒーローを夢見た事もある。だけど、俺には無理だと心のどっかで思ってた。でも今は違う、俺には力があり、何ができるかが分かってる――

『血』が教えてくれる。

壱朗の血統技能（アビリティ）は『時間跳躍』だと。

「やっぱりそうしたんだな。俺は」
「はい。ただ、初めて跳んだ時は血統技能（アビリティ）に気付いていたかどうかまでは覚えていないので、気付いた場合にだけ言って欲しいという伝言を預かっております。『聞くかどうかは俺（壱朗）に判断を委ねろ』と言われております」
　壱朗が人間だった先程までとは打って変って、自称『レイ』の対応は実に丁寧だった。丁寧だったが焦っているのか、無理をしているのが分かった。
「何か急いだ方が良い理由があるのか？」
「はい。今の貴方様は、生りたての力の安定しない真祖です。その状態の真祖は二世、三世の吸血鬼にとっては力を上げる、極上の餌となりますので」
「レイは一緒に行くのか？」
「いえ、貴方様お一人で行って頂く事になります」
　壱朗は今の状況とこれからの事を少し考えて、結論を出す。
「伝言、……聞いておくか。その様子じゃ、レイに会えるまでに結構な時間がかかりそうだ。声も覚えておきたいしな」
「――っっ！　……では。
――世界の修正力（タイム・パラドックス）との衝突を避ける為、あまり情報は持たずに行くのが望ましい。
　一つ目。調べるのは血の力と時間の関係。睡眠中もそれは起こるのか。
　二つ目。同じ存在を二人存在させると、何が起こるのか。
　三つ目。人として研鑽を積む事は出来るのか。
　我は曾祖父の仇を筆頭に、命（ヒト）を無意味に弄ぶ吸血鬼を排除する――
……以上です」
「……大それた事を言うもんだな」
「それが許される、世界でたった一人のお方です」

「そうか。それじゃあ、すぐにでも行くか。
それより、なんだか分からないが言いたい事は我慢せずに言っていいぞ？」
「はぃ……すみません。後の負担になるかもしれませんが、我が儘をお許し頂けますでしょうか」
恐らく、自称『レイ』は壱朗の眷族なのだろうと気がついていたが、どういう扱いをしてきたのかさっぱり分からない壱朗は『とりあえず自由な方が良いよな』と結論付けていた。
「……いいよ」
すると、自称『レイ』は素早く体を離し、壱朗の前に跪く。そして、壱朗の『左手』を取り、額に当てた後に薬指に歯を立て『血』を吸い出す。
「――痛ッ……」
吸い出した後、――動物が傷口を舐めるように――優しく舌が這わされた。結構な痛みを感じたのだが、すぐに治ったようで左手の薬指には傷すら残っていなかった。我が儘を許すと言った以上、何も言えず我慢していた壱朗に自称『レイ』が声をかけた。
「わ、わたくし、レティシア・フェルナリーゼは、この身が滅ぶ、その瞬間まで、貴方様にお仕え致します。……っっ！」
――――きっと、求婚（プロポーズ）に近い意味を持つ儀式なんだな。耳の先まで真っ赤だもんな。ずっとこんなら可愛いのになぁ。詰問されてる時はほんと怖かったし。いやでも、だからこそ傍に置いたんだろうな――――
などと自称『レイ』いや、ティアの額に触れた左手を動かして、壱朗は頭を撫でながら考える。
「あの……聞こえていると解っておられて、やっていますよね……」
「……うん。なんとなく。血が教えてくれた。レイに、いや。ティアには触れていれば、想うだけで通じるって」

人間だった壱朗はもういない。真祖としての壱朗はティアの知っている壱朗と同じように柔らかく微笑み、黙っている。

「……そういう意地悪な所は嫌いです。優しくして下さいとは言いませんので、お願いですから嘘はつかないで下さい。……それだけで、いいんです」

「嘘ついたの？　俺が？」

――――約束は守れと曾爺さんに躾けられた俺が、嘘なんて付くのかなぁ――――

「はい」

「なんて？」

「……えっと。その。私が……『生まれて初めて愛した女だ』と……」

……だから、あんなにも俺の過去（昔の女）の話に食いついてきたのか。しかし、あり得ないな。何百年も生きると俺は嘘つきになるのか？

いや、待てよ？　初めて会ったのが今日……いや、もう昨日かな。だとすると……

「ん～。ティアこそ、嘘ついてない？」

「ついた事などありません！」

「そうかな？　俺は『ティアに出会って初めて愛を知った』なんて風に言ったんじゃない？」

ティアの表情が驚きに染まる。『何でわかるんですか？』『過去の、いや未来の？　記憶まで引きずり出せるように能力が上がったんですか？』『こんなにも早く？』という様な意思が伝わってくると同時に、その表情がとても分かりやすい、拗ねた様な表情に変化する。

「……そんな感じだったかも知れません……」

「嘘じゃないよ。『人間だった彼方　壱朗』はひと目『レイ』を見た時に初めて愛を知った。他の嘘は分からないけど、それだけは嘘じゃないよ」

壱朗の今の言葉に嘘はない。ティアにもそれは伝わった。
きっと壱朗の過去（恋愛）は、本当に愛のある物では無かったのだろう。
御飯事（おままごと）の様な、憧れだけの付き合いや結婚だったのだ。別れて当然とも言えるだろう。そう理解したティアは、壱朗の前で嬉しさを抑えきれず、顔が堪え切れなくなる前に姿勢を正した。そして壱朗から少し離れ、空気を変えようと口を開く。

「……私も待っていますので、向こうに着いたらちゃんと解るように、言ってあげて下さい」
情報を持って行くなという伝言に従う為、ティアに財布や携帯電話などをまとめて預け――流石に服ぐらい良いよな。とも思いながら、言葉を返す。
「今のティアみたいに、泣いてないといいけど」
「泣いてなんていません！」

空気を変える事などできる筈もなく、言い負かされた悔しさよりも嬉しさから、目の端に涙を溜めているティアを後目に壱朗は考え、決意する。

――過去のティアに会いにいくか。曾爺さんの仇を取る力を得る為に――

覚悟を決めた瞬間。壱朗の周りの景色がぼやけ始め、陽炎のようにゆらゆらと漂い始める。

――あぁ、真祖ってこんなに簡単に力を行使できるのか。すごいな――

「ティア、帰ってきた俺をよろしくな」
「はい。御迷惑をおかけするとは思いますが、未熟な私をよろしく

お願いします」
「任せとけ」
ゆらゆらと陽炎の様に、かすれて見えなくなっていく壱朗に、ティアはこの数十年の間で考えた『会心の一声』をかける。
「愛していますっ！　御主人様っ！」

最後に、吃驚した表情をティアの心に残したまま、壱朗の姿は消え去った。

ティアも壱朗が眠りに就いてから知ったのだが、２１世紀初頭には爆発的な人気を誇った、形だけのメイドのいる喫茶店は壱朗が生まれた頃には、完全に衰退していた。そして今も生きているサブカルチャー愛好家達の間ですら、メイドに御主人様と呼ばせる行為は、過去のモノとして嘲笑の対象となっている。

逆にそれが可能な存在は、本当の意味での超上流階級層であり、名実ともに貴族、華族、名士等と呼ばれる事に恥じる事なき実績と血族を持つ者だけの特権になった。
つまり、先程まで此処にいた壱朗は庶民であり、御主人様等という呼び方をされる事は会社の宴会で酔っ払っても経験した事のない、赤面モノの罰ゲームか何かだと認識していたハズである。

事実、ティアは壱朗と共に三千年もの時間を過ごしたがその間ずっと『御主人様』と呼ぶことは禁じられていた。
『してやったり』とティアはその豊かな胸を張って、やりきったと思っていた。だがしかし、ティアのこの行動のせいで向こうに着いた直後の壱朗は、あまりの恥ずかしさに地面に転がって悶える事になる。
そして壱朗は『次にティアに会ったら絶対に苛めてやる！』『絶対に御主人様とは呼ばせない！』と決意するのだが、ティアがそん

な事には気が付く筈もなかったのである。

第０４話　記憶と帰還（前書き）

プロローグの第０１話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第０４話　記憶と帰還

『元人間（生りたての真祖）　壱朗』を送り出した現在（いま）、ティアはすぐに『真祖（成熟した）　壱朗（真祖）』を迎える為の準備を始めていた。

世界の修正力（タイムパラドックス）との衝突を避ける為、『真祖（成熟した真祖）　壱朗』は絶賛冬眠中なのだった。

壱朗の曾祖父が生まれる以前の、西暦１９００年から、曾祖父が殺されて壱朗が真祖となる２１００年迄の二百年間を衝突が起これば、壱朗の存在が消えかねない時期として認識し、その時代に活動する事を避けていた。世界大戦も起こる為に紛争（安全地帯）のない地域に、自分専用の地下四〇階ぐらいの墓所を掘るという徹底ぶりだ。墓所の場所は、戸籍が偽造しやすい人口過剰な（名前とは裏腹な国）お隣の大国を選んだ。

そして『真祖（成熟した真祖）　壱朗』を迎える為の『隧道（トンネル）』を開く準備を済ませ、起きてくるのを待ちながら、『元人間（生りたての真祖）　壱朗』の顔を思い出す。

――生りたての壱朗様、ちょっと目つきが優しかったなぁ……

日本で幼年期整形が流行り出して五十年。今では三十代までの男女の９０％が、普通以上の美形だ。残りの１０％のうち９％が超美形。１％が不細工でありたい変わり者か、幼年期に手術をしないまま忘れている者だ。

だが、吸血鬼は血に大きく左右される生き物だ。だからこそ幼年期のＤＮＡ形成型整形手術が効果を発揮しない。もし整形していたとしても吸血鬼のＤＮＡは医療用のＤＮＡなどよりもはるかに強く、本来あるべき顔に戻してしまう。

西暦２０００年あたりの、シリコン(異物)を入れるなどの整形手術をすれば、おそらく整形も不可能ではないだろう。

しかし、吸血鬼は赤外線や紫外線すら視認できてしまう存在だ。そんな吸血鬼からすれば、顔に異物を混入する整形など不細工にしていると言っている様(いと)にしか見えないのと同じ事である。

恐らく、向こうでは『元人間　壱朗』の顔も本来あるべき造りに戻っているだろう。ティアが知っている『真祖　壱朗』の顔との差は、ほぼ無かったが。

それは壱朗の祖父のせいでもある。彼が元々、日本人らしい強面の顔つきで、美形とは言わないまでも渋い男前であった為、特に整形は必要無いと家族に幼少の頃に判断されたのだ。

吸血鬼で顔を変えた者は血統技能(アビリティ)で変身や変装の能力を得た者か、長い時間をかけて少しずつ、顔の骨格の形を変えた者しかいない。

だが、吸血鬼の血統技能(アビリティ)は基本一人一つだ。

理論上、核爆発クラスの力でも血統技能(アビリティ)で身に着くかも知れない吸血鬼が、その血統技能(アビリティ)が変身や変装等の能力だった場合、その吸血鬼は余程の事が無い限り、吸血鬼社会では弱者になってしまうだろう。

吸血鬼の能力は大きく分けて二つある。

吸血鬼であれば誰でも持つ種族能力(スキル)。

吸血鬼の真祖から派生する血統技能(アビリティ)。

種族能力(スキル)は吸血鬼であれば誰でも使えるし、覚える事ができる事から『能力』と呼ばれる。血統技能(アビリティ)は血統の者しか使えない為、『血技』と呼ばれている。

種族能力(スキル)は『吸血』『不老』『再生』『怪力』『霧化』『獣化』『浮遊移動』などの、吸血鬼であれば誰でも得る事のできる全部で

１２種類の能力であり、訓練や血の力の強さでその効果は変動する。しかし限界もある。例えば、『霧化』したからといって霧の量が、吸血鬼の元々の体積を超える量にはならない。

血統技能（アビリティ）は種族能力（スキル）とは違い、その血統の真祖の『血技』に左右され、自分の系統の真祖の『血技』の派生版を得る。どの程度の違いが出るかは血の濃さによって変わる。『血技』は吸血鬼が経た年数や訓練により、強弱や能力そのものを変質させる事が可能だ。種族能力（スキル）とは違い、今のところ、その効果の限界は知られていない。

現在のアメリカ合衆国には2人の真祖がいるが、そのうちの一人の真祖の『血技』は『重力』である。彼は真祖に生りたての時は、その『血技』で１ｔ程度の物を持ちあげるのが精一杯だったが、移民である白人に迫害され、怒りにまかせて能力を振るうなどの過程を経て、約千二百歳の現在では、ニミッツ級航空母艦（約８０００ｔ）すら持ち上げる。

ティアは自身の『血技』を使用して習得した、結界術の一つである『隧道（トンネル）』を発動させている。これは指定した場所との空間（ワープ）歪曲移動を可能にするものである。

ティアは壱朗の曽祖父が『彼方』を名乗ってからずっと、『彼方壱朗』の生まれる環境を守る為、『彼方一族が不幸に襲われない結界』を張り続けてきた。２１００年元旦に壱朗が初詣に来るまでは、ほぼずっと神社の地下に籠りきりで結界を維持していた。

世界の修正力（タイムパラドックス）との衝突を避ける為、今日まで壱朗の姿を直接見れなかったのだ。今日からは壱朗の家に押しかけ、子供の頃の写真など色々見せてもらおうと心に決めていた。

もちろん、ティアは壱朗が反対した時に対しての『言い訳の口実』も考えていた。百年近くもの間、張り続けた『彼方一族が不幸に襲

われない結界』が消滅した事で、幸福量保存の法則に従って、その反動から彼方家には不幸が降りかかる筈だ。

だから家に住み込んで、家族の皆さんを守らなければいけない。という言い訳だ。

ちなみに幸福量保存の法則が否定されようとしても、壱朗の曾祖父が吸血鬼に襲われて死亡したのは、ティアが結界を維持できなくなったせいかもしれないと言うつもりだし、それを口に出す事を許す程『壱朗様』は酷い主では無いとティアは認識している。

そして、旅立った壱朗との『帰属儀式』の正式な完了により、彼方血族の眷族になったとティアは思っていた為、今まで彼方一族が避けてきた筈の不幸が、ティアにも降りかかる筈だとティアは考えていた。

その時、不意に不穏な気配を――それなりの吸血鬼の――感じ、ティアは肩に羽織ったコートをきちんと着込む。

――見知らぬ吸血鬼等（壱朗以外）に、壱朗様の為に整えた体つき（プロポーション）を、間近で見せてやる義理はないわ。先に『真祖（成熟した真祖）　壱朗』が起きて来ていれば、綺麗に着飾った自分を見せれた筈なのに……

そんな風にティアは考え、思惑を見事に破壊してくれた存在に苛立ちながら、身なりを正す。

『――キンッ――』と澄んだかすかな音のが鳴った後、人間の胴体よりも太い氷柱（つらら）がティアの後方から飛来し、襲いかかる。それを壱朗の指示で習得した武術のお陰で、振り向く事もなく認識する。

その氷柱を紙一重で躱す。大事な――壱朗が冬眠する前に最後に

選んだ、ティアのお気に入りの――純白のコートが汚れない程度に離れて、ではあるが。

「何か用があるのなら、まずは名乗りなさい。いきなり攻撃を仕掛ける等と、どこの下賤の者ですか？」

ティアはそう言ってはいるが、氷柱という攻撃方法を認識した瞬間には、相手の素性はおおよそではあるが見当を付けている。フランス在住の真祖、『ラマルティーヌ卿』の二世以降の者だろう。『水氷』の血技は『氷の貴公子』とも呼ばれる、ラマルティーヌ卿の系統が最も有名だ。ただし、『水氷』の血技以外にも氷柱を作り出すだけならば可能な為、『水氷』を真似ている可能性を考えて聞いているに過ぎない。

「女。先程、此処で生まれた真祖がいるだろう。今すぐに差し出せ」

振り向き、歩道橋の上に佇む男の顔見る。服装は上質。金髪碧眼で身長も高く、腰の位置も高い。白人系だ。そして、男の顔がそれなりに整った者である事と、ティアを真祖だと勘違いしなかった事から、三世以上だと判断し、男を侮辱するべき言葉を選ぶ。

「『氷の貴公子』は眷族の躾もできない方だと有名ですが、名乗りも上げられないようですね。それとも、四世以降の当主の顔も分からない程度の吸血鬼なのでしょうか？」

三世より血の濃い吸血鬼にとって、四世代以下に見られる事は屈辱以外の何物でもなかった。

「女。五体満足でいられると思うなよ！　真祖共々、四肢を切り落とした状態で我が主の元へ届けてくれるわ！」

男はそう言いながら両腕を前に持ちあげ、『怪力』を発動させたのか、指と爪が四肢を引きちぎる為の鋭さを持つ、凶器へと変質していく。

ティアは確信する。『これで相手はラマルティーヌ卿の手の三世で間違いない。二世ならラマルティーヌの姓を許可されているはずだから、プライドにかけて名乗る筈』と。『恐らく、日本に唯一いる真祖がラマルティーヌ卿への借りを返す、という名目で日本の真祖誕生の時期を教えたのだろう』とも判断していた。

しかし、一番最初に問題を起すのが、ティアが嫌いなラマルティーヌ卿とは。『これも降りかかる不幸の一環かしら……』などと考えながら、体勢を変え時間を稼ぐ為の台詞を考える。

「それが可能だとでも？　我が主は今、『血技』の試技で此処を離れておられるがすぐに戻られる。『氷の貴公子』程度の千年も生きていない真祖の眷族ごとき、我が主は相手にせぬわ。相手をして欲しくば、『城（ホーム）』に逃げ帰り、主を連れて来くるがいい！」

今のティアは百年にも及んだ『結界』の維持と今開いたままの『隧道（シネル）』の為に９割程の力を失っていた。

だから相手を挑発し、近接戦闘を挑ませて体術と会話だけで、壱朗が戻るまでの時間を稼ぐ心算だった。

「生まれたての真祖などに帰属した程度の分際で……我が主を侮辱する者は決して許さん！！」

『帰属の儀式』を見られていた事という事は、この吸血鬼はかなり遠くからこちらの様子を伺っていた事を理解した。何故なら、この吸血鬼の気配は先程まで感じなかった。という事は半径１０ｋｍ以内に居なかったはずだ。

三世で１０ｋｍ程度の移動に、この位（１０分以上）の時間をかけると言う事は、ティアにとっては大した相手では無いと判断していた。

ティアの表情から『大した相手では無い』という評価を読み取った男は、その事実にさらに侮辱だと怒り狂い、『怪力』に加え『血技』を発揮しようとした。

その瞬間――

「俺の眷族に何しようとしてやがる。餓鬼（ガキ）」

空間が軋んでいるのではないかと思わせる程の存在感を身に纏った壱朗が、男の隣に存在していた。

「――――なっ」

「五月蠅い。喋ろうとするな。口を開けるな。腐った豚の臭いが広がるだろうが」

その瞬間から、男は指一本1ミリたりとも動かさなかった。いや、動かせなかった。動かせば死ぬ。呼吸すら、するなと自身の『血』が言っている。

「御帰りなさいませ。壱朗様」

ティアは隣いる男を完全に無視し、優雅に頭を下げて挨拶をする。

「おう、おはよう。ティア。俺は嘘吐きだったか？」

「いえ。嘘吐きではなく、ただの意地悪だと、再度理解致しました」

「酷いな。俺に愛していると叫んだ癖に」

今の壱朗は旅立った頃の記憶など、ほぼ覚えていなかった。成熟した真祖しかし、ティアとの記憶を覗き、どんなやり取りをしたのかを知る事など、眠っていても可能だった。

「あ、あれは、可愛らしい反応をなさる、壱朗様に申し上げたのです！　意地悪な貴方様に言ったのではありません！」

「……嬉し泣きしてたくせに」

「――――っ！　もうっ！

そんな意地悪ばかり言うなら、膝枕も添い寝もしてあげませんよ！」

「それは困る。狭く硬い棺桶で眠るのにはもう飽きた。今日はティアの膝枕で寝ると決めてるんだ」

「だったら、意地悪を言うのはおやめ下さい。……棺桶が嫌だ、なんて言う吸血鬼は壱朗様か、四世以下の吸血鬼（クズ）ぐらいですよ……」

「……そうか？

だがそれはそれ、と別にしたとしても、今日はずっととっておいた初めてを貰わないといけないしな」

その言葉を聞いた瞬間、ティアは壱朗が『冬眠』に入ってから二百年の間、普段は考えない様にしていた壱朗との約束を思い出した。

「――――っ！！」

ティアは顔、耳、手、足、と肌が見えている個所を順番に、その全てを赤くして一言も言葉を発しなくなった。

「さて、ティアが再起動する前に、面倒事から片付けるか」

壱朗は隣に立つ吸血鬼に首から上だけを向け、完全に見下した目で命令した。

「――――聞いてやる。名乗れ。餓鬼（ガキ）」

第０５話　待ち続けた約束（前書き）

プロローグの第０１話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第０５話　待ち続けた約束

「――――聞いてやる。名乗れ。餓鬼（ガキ）」

男は目の前の現象が理解できなかった。

できなかったが言う通りにしなければいけないと『血』が騒いでいる。

それを抑えられる程の力がなかった男は、言われた通りに名乗る。

「……ふ、フランスはマコンにおわします真祖、ラマルティーヌ卿が血族の三世のピエール・オリヴィエと申します。

――――我が主、ラマルティーヌ卿の命により、生まれたばかりの真祖様をお迎えに上がりました」

「ふん。お迎えに、な」

ピエールは知らなかったが、壱朗はティアの用意した『隧道（トンネル）』の向こう側で会話を聞いていた。つまり、ティアに『四肢を切り落とす』などと暴言を吐いていた事も知っていた。

「わ、我が主は、新たなる１５番目の真祖様の誕生を祝い、その将来を思えばこそ、フランスへの移住を……『黙れ。俺は話していいと言ったか？　名乗れと言っただけだ』……はっ。……」

生りたての真祖は、固有の血統技能（アビリティ）を創生する力が血に込められており、真祖の身体の安定するまでの百年間は、血の質が違う。

その血は二世、三世の吸血鬼にとって『血の熟成（生きた年数）』と『努力』以外の方法で力を得る絶好の機会となる。

真祖は他の真祖の血から力を得る事は出来ないが、人間の血液よりも魔力の回復には役に立つ。そして、生りたての真祖の血液は、

極上のワインよりも美味であり、処女の血液や精通前の男子の血液よりも、上等な嗜好品でもある。

だからこそ、生りたての真祖は他の真祖に飼われる場合が多い。

吸血鬼はほとんどの場合、吸血鬼の子を成せない。

真祖以外が吸血鬼を産んだ例は一度もない。ごく稀に、真祖同士の間に真祖が生まれる事があるが、それも過去に二人だけしか例が無い。

では真祖以外の吸血鬼には、子供が作れないのかと言われれば、そういう訳ではない。ただ、百年かけても一人もできない場合が多い、それに生れてくる子供は何故か、唯の人間になる。そして、吸血鬼から生まれた子供が真祖となった例も、その子孫がなった事も今のところ一度もない。

故に真祖の血が欲しければ、誕生した者を見つけ出すしかない。そう認識されているのが普通だ。

ピエールには訳が分からなかった。過去に二度に渡り、自分より上位血族である二世の方と共に、真祖の捕縛を行った事がある。

現在、真祖で１２番目と１４番目と呼ばれる方の時だった。その時の生りたての真祖は、両方とも生れてから５０年は経っていたが、それでも三世である自分でも、十分に連れ帰る事が可能な程度の力しか持っていなかった。

しかもピエールは、三百年しか生きていない三世でありながら、生りたての真祖の血を二度も飲み、三世としては世界でもトップクラスの吸血鬼の筈だった。

「しかし、ラマルティーヌか……あのアンドレのクソガキが……二百歳ぐらいの時に、なりたての血は吸うなとお仕置きしたはずだったが。あの程度じゃ、お仕置きが足りなかったか？」

ピエールは目の前の真祖が呟いている言葉が信じられなかった。彼の言うアンドレとは、恐らくアンドレ・ラマルティーヌの事。つまり七百年以上も生きている真祖であるはずの我が主を『クソガキ』等と言っている事になる。そんな事が言える存在はこの世に三人しかいない筈だった。いや、四人か。

どちらにせよ、『生りたての真祖』にできる言動では無い。つまり、この真祖は先程まで此処にいた『生りたての真祖』ではないという事だろうか。確かに顔はほぼ同じだが、服装が違う。別の真祖が年齢と外見を調整して、同じ顔に見せているのだろうか。

吸血鬼であれば『不老』で年齢を調節できる。訓練しなければ吸血鬼の外見は普通に年を取る。逆に訓練すれば赤ん坊の姿にもなれるし、老人にもなれる。もっともその変化には、年を取るのと同じだけの時間が必要となるが。つまり、１０歳の姿の吸血鬼は７０歳の姿になるのに６０年かかるし、７０歳の姿の吸血鬼が１０歳の姿になるのにも６０年かかるのである。大抵は気に入った年齢で現状維持をする。

しかし、ピエールの『血』が違うと騒ぐ。先程まで此処にいた『生りたての真祖』と目の前の真祖は同じ人物だと『血』が言っている。先程『帰属の儀式』をしていた、眷族の女が従っているのが何よりの証拠だ。

眷属は『吸血』によって創られる。真祖が直接吸血し、創った吸血鬼は二世。二世が創れば三世。三世以降は血が薄く、真祖とのつながりも希薄で力もかなり弱くなる。実際、四世以降の吸血鬼は、人間でも一流の武道家なら十分に相手にできるレベルに収まる。

吸血鬼が世界中で受け入れられている最も大きな理由は、吸血鬼全体の９０％以上を占める四世以降の吸血鬼が、人間でも十分管理

可能な程度の力しか持っていない事だと言われている。
一般人が四世以降の吸血鬼になったとしても『霧化』や『蝙蝠化』で飛んで逃げられない限り、警察官二、三人で取り押さえる事が十分に可能だ。
しかし、三世より血の濃い吸血鬼は別である。世界に十四人しかいない真祖の大半が、人類との共存を約束しているからこそ大人しくしているが、弱点などを考慮しなければ、千年生きた三世ですら完全武装の軍隊一個師団に匹敵する。同じく千年生きた二世や真祖など、対比評価すら難しいだろう。
つまり、人間には簡単に管理しかねる自由を持つ者が三世以上。人類に管理可能なのが四世以下という明確な違いがある。そして、その世代の違いは百年程度の『血の熟成』では覆せない程に大きい。

年齢による力の増加

『血の熟成』という意味だけで言ってしまえば、真祖が百かけて得る力は、二世ならば二百年かかる、三世ならば三百年かかる。四世以下は血が薄く何年かかるかも分からない。ただし、真祖は最初の百年で、のちの千年分の力を得る。
同じ時期に百歳を超えた血族の力の比率は、
真祖、二世、三世、四世の順に、１０００：１００：１００：１００だ。
更に二百年経ち三百歳になると、１２００：２００：１６７：１５０となる。
千年経ち千百歳になった場合は、２０００：６００：４３３：３５０となる。
二千年経って二千百歳となると、３０００：１１００：７６６：６００となる。
現在の最高齢の真祖が二千歳という事実を顧みれば、真祖以外の吸血鬼が力で、真祖を頂点とする吸血鬼社会を覆すには、六千歳以上の二世が真祖を倒すしかない。九千歳の三世や一万二千歳の四世

でもいいが、どれも現実的では無い。つまり、西暦２１００年までの吸血鬼社会では現状の序列を覆す存在はいなかったし、不可能に近かったのである。

「おい、餓鬼（ガキ）。この時期に真祖が生まれる話を教えたのは日巫女（ひみこ）で間違いないな」

ピエールは言葉を発することなく、首を縦に振るだけでかろうじて答える。

「あの女……よし、新年の挨拶も兼ねて殴りに行くか……」

「あの。壱朗様。日巫女（ひみこ）様とは仮ではありますが、不可侵の取引をしておりますので、それはちょっと……」

再起動を果たしたのか、ティアが壱朗の行動を止めようとする。

「何で、不可侵なんだ？」

「私の日本国内での結界の発動を、許可して頂く為です。煩わしい揉め事は避けるべきかと思いまして……」

「……いや、殴りに行く。というか見てるだろ、あの女なら。もう二千歳を超えたババアだし、ティアの結界の中でも状況は見れてたはずだ」

「で、でも『約束』したんですよ？」

「……」

「……」

「……しかたない。文句だけ言いに行く」

ピエールはすぐに主の元に舞い戻り、この状況を伝え、判断を仰ぎたかった。主の事をクソガキと呼び、血の熟成（年齢）だけなら現在の吸血鬼社会の中でもトップのはずの日巫女（ひみこ）様をババア等と呼び、殴るとまで言っている。

しかも、それが可能だと『血』が理解している事実に混乱していた。

ピエールは先程までの事を頭の中で整理してみた。

ピエールは生まれたばかりの真祖を発見し、その傍にいる女吸血鬼をどのように排除するかを考えていた。すると女吸血鬼は『帰属の儀式』を行っていた。つまり、女吸血鬼は『はぐれ吸血鬼』だったわけだ。

『はぐれ吸血鬼』に相応しく、魔力（血の力）も大した事はなさそうだったが『生りたての真祖』が、陽炎のように消えてしまった。もしかすると女吸血鬼の『血技』で逃がしたのかと、すぐさまその場所へと向かい、何らかの儀式を行っていた女吸血鬼に問いただした。

その直後、消えた筈の『生りたての真祖』が服を着替え、とんで（尋常で）もない（はない血の力）存在感をその身に宿して隣に立っていた。

消えてから再び現れるまで、１時間も経っていない。そして吸血鬼が最も信頼する、『自分の血』が同一人物だと告げている。

整理してみても、全く訳が分からなかった。

なんとかこの場を離れ、主に早く伝えるのが最優先の使命だと考え――この場に居たくない、逃げ出したいというのが本音だったが――ようとした、その時、壱朗の目が再び、ピエールを捕えた。

「おぃ。餓鬼（ガキ）、さっきまでの無礼（コト）については、お前の主の責任だ。とっとと尻尾を巻いて帰れ。んで言っておけ、『１４番目を連れて、一週間以内に謝罪に来い。来なければ、こちらから出向いてお前の絵画コレクションを全部燃やす』とな」

「ひぃっ！　――――理解致しました！　今すぐに帰り戻り、主にお伝えさせて頂きますです」

よく分からない言葉遣いになったピエールに、壱朗は首を傾げていたが『もう興味はない』とばかりに――犬を追い払う様に――手

を振られ、ピエールはその場を逃げ出した。

ティアは、ピエールの負け犬っぽさがなんとなく可哀想だったが、壱朗の気まずそうな雰囲気にから、弱い者苛めをした気分になったんだろうなぁ。と察した。

「よろしかったのですか？　あのまま行かせてしまっても」
「問題ない。『世界の修正力（タイムパラドックス）との衝突』は起こっていない様だから、これからは正体を隠す必要もない」
壱朗の目が自分の服装に向けられた気がして、ティアは純白のコートの裾や襟などの身だしなみが変でないか、さり気無くチェックした後、問いかける。
「では？」
「あぁ、すぐにでも仕事を始める。まずは曾爺さんの仇の吸血鬼、その後、他の真祖のクソガキどもの、目を覚まさせる準備。そんなトコだな」
ティアはコートのポケットから符を取りだすと、目を瞑り額に当てる。
「確認致しました。犯人（ターゲット）の吸血鬼は今、京都の街の貧民街（スラム）区画で死肉を漁っていますね。これが情報です」
追跡用に飛ばしている蝙蝠――といってもティアの体の一部を『獣化』で蝙蝠にさせたモノだが――をずっと犯人（ターゲット）の吸血鬼に張りつかせていたのだ。そこから得た情報を式符に込めていく。
「よし、ちょっと眠気覚ましの運動がてら、行ってくる。
ティアは一応、俺の家族を頼む。その後は寝床を確保して、隅々まで綺麗に磨いておけよ？　俺は一切、我慢するつもりが無いからな？
寝床の場所は任せるが、明後日までは滞在できる場所にしてくれ。」

そう言って、壱朗は空へと浮かび上がった。壱朗の背中には、飛行を補助する透明な渦が四つ、五つ見える。その渦がロケットの様に力を吐きだす事を知っているティアは、壱朗が飛び立つ前に返事を間に合わせる。

「――っ！　は、はぃ。準備もちゃんと、綺麗にして、お待ち、して、おります」

その言葉が耳に届いた瞬間、壱朗はティアに視線をやりながら、尖った犬歯をかすかに覗かせてニヤリと笑った。それをティアが目にし、再び顔が赤くなりそうになった所で、透明な渦は爆発し、壱朗を空の彼方へと運んで行った。

ティアは熱を持った頬を冷ます様に手を当てながら、この後の事を考えた。

――これで恐らく、壱朗様は一時間以上は戻らないでしょう。犯人（ターゲット）の吸血鬼を消滅させるか、明日以降に虐める為に半殺しにして捕縛するか、どちらかを行うまでは。

壱朗様がそんな事をしている間に移動して、体を清めましょう。壱朗様の家族の事と、寝床の事を頼まれましたが、そんな準備はとっくに済ませていますし。

私にしてみれば三千年も待った初めてなのです。出会った頃は、それこそ私の方から何度もアプローチしてきましたが、『世界（タイム）の修正力（パラドックス）との衝突』の影響を理由に、やんわりと断られてきました。

壱朗様は『女を本気で抱くのは、もうすぐ死ぬ女だけだ』とずっと仰っていました。万が一、自分との間に子供ができ、『世界（タイム）の修正力（パラドックス）との衝突』の影響を受け、相手の女性かその子供のどちらか、

もしくは両方が消滅してしまう様な事態を恐れている、との事でした。

ですから、近々死ぬ女以外を抱くのは、現代に戻る迄は我慢するつもりだと聞かされていました。

今回の予定が『世界の修正力（タイムパラドックス）との衝突』を生む事もなく、無事に壱朗様の旅立ち送り出した暁には私の全てを貰って頂く。いえ、壱朗様は『ティアが嫌がっても徹底的に満足する迄奪う』と仰っていましたね。嫌がる筈もありませんけど。それが冬眠する前の壱朗様と交わした『約束』でした。そして壱朗様は『約束』は守る御方です。

やっと正式な眷族に成れました、しかも今日が初夜です。もちろん、寝床は部屋から見える景色までをちゃんと厳選して、三ヶ月前から半年間前払いで、高級ホテルの最上階を1フロア丸ごと貸し切りました。下の階から天井を叩く阿呆が居ない限り、邪魔は入らないはずです。

――――自分好みの調度品（アンティーク）に変えてあるホテルの部屋へ1600年辺りの（が搬入済み）と向かいながら、だんだんと実感が湧き始めたティアの頭の中では、嬉しさと恥かしさから生まれた妄想が凄い事になっていた――――

しかし、妄想の最中、ティアはふと気付いてしまった。

最後の一線を超えないだけで、それ以外（キスや触れるだけで）の行為で物凄く攻められ、ティアは三千年もの間ずっと、そんな壱朗の行為に満足させられてきたのである。しかも壱朗は、興が乗ると意地の悪さが三倍程になり、ティアの奉仕で壱朗が満足しても、ティアが失神する迄は絶対にやめない。

そんな壱朗が『本気で徹底的に満足する迄』の相手をして『明後日の自分は生きていられるのだろうか』と、かなり本気で不安にな

るのだった……

第０６話　初夜と真実（前書き）

プロローグの第０１話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第０６話　初夜と真実

『冬眠』から目覚めてから8時間後、腕の中のティアの身じろぎを感じ、壱朗は意識を通常レベルに覚醒させる。

「あ、申し訳ありません。起してしまいましたか？」

「いや、寝てはいなかったと思う。まどろんでいただけの気がする」

気を使おうが何だろうが、今の状態（眷族になった）のティアに『嘘』は意味が無い。触れていれば、全て理解されてしまうからだ。

ピエールを追い返してから、京都の街の貧民街区画（スラム）で仇（ターゲット）の吸血鬼を捕捉した壱朗は、『縛符』と呼んでいるティアのお手製の札で、身動き一つできない状態にして、ティアの用意した部屋の隣に放り込んでおいた。

そして家族に、『曾爺さんの仇を見つけたので追いかける』と連絡を入れた。すぐに家に帰らなかったのは、壱朗は曾祖父が死亡した時の壱朗ではないからだ。

何千年を生き、友人を殺された事もあれば、逆に友に裏切られて殺した事もある。今すぐ家に帰っても、家族と同じ気持ちになる事は出来なかった。

だからこそ、ティアと二人で部屋に籠った。それから四時間。

徹底的にティアを堪能（あい）した。まだまだ足りないし、やめる気もないが、それでも魔力を限界近くまで消費していたティアには、休息は必要だった。

壱朗が散々注ぎ、つぎ込んだ魔力（体液）のお陰で、ティアの髪も元々の金髪に戻っていたし、肌の色も艶も先程までとは段違いに美しい。

ティア自身の魔力（血の力）も大体、元に戻っているだろう。その分、体力は消費しているだろうが。

過去へ旅だった壱朗（人間だった壱朗）だった壱朗は知らなかったが、初めて会った時の、銀髪にも見えた灰色の髪。あれは、魔力（血の力）を消費しすぎて、白髪になってしまっていただけである。ティアの目は灰色だが、髪は元々綺麗な金髪だ。

「壱朗様は、最初に何処に行かれたのですか？」

「最初か？　空も飛べなかっただろうし、使えたのは能力（スキル）の『怪力』ぐらいだっただろうし、そのまま過去に飛んだだけだと思うぞ？」

「あ、そうですよね。私と初めて会った時には、壱朗様は既に真祖としてもすごい方でしたので勘違いしてました」

ティアは壱朗の胸に顔を擦り寄せ、甘えている。今日までの三千年、心のどこかで不安を抱えていたのだろう。ティアの生まれた時代の知識では『時間跳躍』という概念がまず理解できなかった。それが意識の共有できない不安の一つになっていた。逆に理解できてしまってからは、余計に不安になった様だった。

とにかく『生りたての壱朗』を送りだしてしまえば、『世界（タイム）の修正力（パラドックス）との衝突』は起こり得ない、壱朗はそう定義していた。

ティアが一人で百五十年間『結界』を維持できる魔力を得た時、この計画を実行した。壱朗が最大級の『結界』で墓所と棺を覆う。その中に自分を閉じ込め『冬眠』し、ティアが一人で彼方一族を『不幸に襲われなくなる結界』で守る。

ティアは『彼方』という姓が生まれた事を確認した後、西暦２０００年から２１００年までの百年間、神社の地下に籠り、地下で結界を維持し続けた。

たまに遊びに外に出たらしいが、それ以外はずっと籠り、上手くいった時に壱朗としたい事を幾つも考えて、時を過ごしていたらしい。

そして『彼方　壱朗』は歴史通りに生まれて、無事送り出された。

ティアは時間の許す限り、三千年一緒にいても教えなかった事を、全部聞こうと心に決めているようだ。

「どれぐらい昔に跳ばれたのですか？」

「ん～。そのあたりは覚えてねぇな。『魔血晶（背中）』、触っていいぞ？」

「あ、はい」

壱朗の背中には『魔血晶』が１６個付いている。この『魔血晶』の数は吸血鬼の生きてきた年数に応じて変動する。ティアは抱きついた姿勢のまま、左手で背中を探る様に撫で、目当ての『魔血晶』を見つけた。

「あ、ありました。初めは大正時代と呼ばれる時代に跳ばれたようですね」

ティアが『魔血晶』の内でも、最初の頃を記録している物を触りながら言ってくる。壱朗の記録や記憶に関する事を知る事が自体が、嬉しいのだろう。声が弾んでいた。壱朗もティアの触れている『魔血晶』に意識を集中し、思い出そうとする。

「あ～、そうだったな。初めは日本特有の古武術をできるだけ習得して、第二次世界大戦が起こる前にアメリカへと渡ったんだった」

「第二次世界大戦、ですか……あまりいい時代では無かったです。私も壱朗様が『冬眠』されてからは日巫女（ひみこ）様の元にお邪魔していて、ほとんど地下から出ませんでした」

「まぁ、『酋長』が生きてる限りは、もう二度とアメリカが戦争を起す事はないだろうがな」

「私はお会いした事がありません。どの様な方ですか？」

「そうだな、気のいい爺さんって感じだな。もう千二百年は生きてるはずだ」

ティアは顔を上げ、壱朗の顔を覗きこむと不思議そうに聞いてきた。

「『酋長』様は千二百年生きておいでなのに、戦争を止めなかった

のですか？」
「止めようとはしたんだろうがなぁ……」
「御存知ないのですか？」
「俺にとっちゃ、歴史への介入は禁忌（タブー）だったからな。止めろとも言えねぇし、協力もできなかったしな。詳しい話は今度、『酋長』と酒でも飲みながら聞くつもりだ。今のアメリカは恐らく『酋長』が他の真祖（ガキ）を抑えてるんだろ」
ラマルティーヌ卿と同じような真祖がアメリカにも居る様なモノなのか、とティアは理解したようだ。
「とにかく、大陸を変えて西暦９００年～１９００年の間を何度も生きたな」
「ずっと不思議だったんです。何故、その期間だったんですか？」
ティアとは最近の三千年しか一緒に暮らしていないが、それでも壱朗と二度、過去に跳んでいる。その時から考えていたんだろう。
「西暦９００年より前（過去）に跳んで、誤ってティアの祖先を殺す訳にもいかないだろ？」
「……っ！　そ、そういう事をしれっと言うのはずるいと思いますっ！」
真っ赤になった顔を隠す為に、ティアは再度、壱朗の胸に顔を埋め、掛け布団を頭の上まで引き上げた。
ティアは、壱朗が西暦９００年より昔に跳ばないのは、ティアが生まれてくるのを守る為だと、初めて気付いたようだ。
世界の修正力（タイムパラドックス）との衝突から百五十年は身を守れる程の結界術が完成するまでは、『１９００年の壁は越えられない』とティアはずっと、そう教えられていた。だからちょうど１０００年遡（さかのぼ）るのは、ただの区切りだと勘違いしていた。
西暦９００年には、ティアは吸血鬼になっていた筈だ。

「今だから言うけどな。ティア、過去に行く前の俺に『帰属の儀式』したろ。あれのせいで、俺はティアのある程度の情報を持ったまま、過去に跳んだ。しかも、出会った時から、触れてればティアの思考は俺にダダ漏れだ」

「～～～～っ！！」

ティアは布団に籠りながら、壱朗のお腹を抓りまくった。ティアが触れているせいでティアの思考が壱朗に流れ込んでくる。

『恥かしすぎる！　二十歳超えた後なんて、毎晩の様にアプローチしたし、毎晩ベッドに入りこむのに、さり気無さを装うのに必死だったはずなのに！　なのにそんな思考がずっと伝わっていたなんて！』

ティアは当時を思い出しただけで、悶え死にしそうになっているようだった。

「ま、それを黙ってたのは、ティアが俺を送り出した時に『御主人様』って呼んだからなんだが」

「……うぅ。やったと思ったのに……仕返しできたと思ったのに……」

ティアはかなり血の濃い二世だったが、主を失った後で壱朗に拾われて、帰属する事を望んだ。理由は簡単だった。

『理性を失いたくない』ただそれだけ。

吸血鬼は記憶が脳の容量の限界を超えた時点で理性を失い、ただの獣と化す。吸血鬼であったとしても脳の容量は人間と変わらない。ただ、人間が３０％以下しか使っていないモノを１００％使えるだけの話である。

吸血鬼が理性が保てたとしても、およそ五百年が限界だ。それは真祖だろうが、二世だろうが変わらない。五百年以降は何もしなければ、人格を形成していた部分の記憶が消えてしまい、発狂し、理

性のない化け物になり下がる。
そして、そんな限界を安全に回避する唯一の方法がある。

それが『記憶の結晶化』である。
『記憶の結晶化』は吸血鬼の記憶とＤＮＡを引きずり出し、吸血鬼の背中に『魔血晶』を作り出す。これは真祖にしかできない上に、どの記憶を結晶化するのかも、真祖の判断に委ねられる。
そして消去も、破壊も、真祖の思いのままだ。
例えば、真祖がその血族者の性格が嫌いだった場合、性格形成する部分の記憶を結晶化し、背中に埋め込まずに破壊したとしよう。
するとその吸血鬼は生きてきた記憶はあるのに、自分の好みや主義などが白紙に戻ってしまっている。その為、『血』の指示に従い、ロボットの様に真祖の言葉にだけ、従う様になってしまう。
二世以降の吸血鬼の寿命と運命は、真祖に握られているのである。どんなに二世や三世が力を手に入れて、物理的な強さで真祖を超えてしまおうが、『死』や『血の束縛』という概念から抜け出すには真祖に尽くすしかないのである。

安全ではないが、もう一つ方法がある。

それは『脳の消滅』である。
ただ破壊しても、吸血鬼の脳細胞は時間が経てば、記憶も元通りに復元される。だが『聖水をかけ、炎で焼かれた脳細胞』には記憶が復元されない。外見的にも能力的にも復元はされるが、新しい脳細胞となってしまい、あったはずの記憶が消えてしまう。
この方法が安全でない理由は、『どの記憶が消えるか全くわからない』事だ。この方法がとられた場合、最悪、体の大きな赤ん坊の吸血鬼が誕生する。『魔血晶』が一つでも背中にあれば、そこから生活の方法などは復元できるだろうが、それすらない場合、本当の赤子と同じになる。体と力は化け物並みの、である。

医学の発達により、脳のどの部分が、どの様な記憶を司るか分かってきてはいるが、それでも完全ではなく、自分で実験したいと言う吸血鬼も居ないだろう。

自分の姉が真祖になった翌日に、ティアは二世の吸血鬼になった。平穏に暮らせたのは初めの数年だけで、最終的には教会から迫害される。姉は、ティアを吸血鬼にしてしまった事を悔み、ティアを村から逃がす為、真祖でありながら民に殺される事を受け入れた。

そこに前もって知っていた壱朗がティアを迎えに来たのである。

そして今、壱朗の言葉でティアは気付いた。

『壱朗はティアの情報を持ったまま、過去に跳んだ』そう言ったのだ。

つまり、迎えに来れるだけの情報は知っていた。

『壱朗は知っていて姉を見殺しにした』

ティアの吸血鬼化も、止めようと思えば止められた筈。

――――その瞬間、壱朗の腹を抓っていたティアの指に込められていた力が、何倍にもなって腹から血が噴き出し、肉がえぐれる。

掛け布団で顔が見えないティアに、責める事もせず、壱朗はただ聞いてみる。

「……恨むか？　ティア」

「……解りません。『たら』『れば』に意味はない。そう教えてくれたのも壱朗様です。……私は、壱朗様と共に歩む生き方以外、知りません」

「……」

「……ですが、教えて下さい。何故、吸血鬼になるまで待ったのですか？　何故、姉も一緒に救って下さらなかったのですか？」

「……待った理由は『吸血鬼のティアが欲しかった』ただそれだけだ。他には何も考えなかった。ティアの姉の方も同じだ。誰もティアの主でいて欲しくなかったから、見捨てた」

『嘘』だ。壱朗の優しい『嘘』だった。伝わってしまう事も分かっている。

だが、壱朗は『嘘』をついた。

「『嘘』はつかないで、下さいと、お願い、したじゃ、ないですか」

壱朗の感情が流れ込み始めて、ティアは涙を止める事ができない様だった。

「覚えてないな」

それも『嘘』。旅立つ壱朗へのティアの願いは、今も覚えている。忘れた事など一度もなかった。冗談を言った事や、言いにくく口籠った事はたくさんあったが、許されない『嘘』をついた事は一度もない。

ティアは壱朗の腹の傷に口を付け、癒そうとするかのように舐める。それと同時に当時の記憶がある『魔血晶』を探して、その記憶と感情の全てを見ようとした。

その当時、壱朗はティアの姉も助けようとした。その為にティアを迎えに行く時期をできるだけ遅くし、自分の『血の熟成（魔力の蓄積）』に五千年もの時間をかけた。

吸血鬼は、生きれば生きる程、その力は増す。『血の熟成（魔力の蓄積）』と言う概念は壱朗の為にある様なものだった。現代（いま）ですら日巫女（ひみこ）の『血の熟成（魔力の蓄積）』が二千歳で最高だ。当時でそれの倍以上である。

力を得た壱朗は、できない事など何もないはずだと信じていた。

だが、それは大きな間違いだと気付かされる。

世界に『絶対』はない、と。

ティアの　姉（真祖）の血技は壱朗の血技と同じく、特殊であり強力だっ

た。

『強奪』

ティアの　姉（真祖）の血技は、どんなモノをも奪う事ができる。そういう恐ろしい能力だった。血も、力も、『血技』も、奪う事が可能だ。能力の使用の代償に『血の熟成』を失うのだが、『血の熟成』すら奪えるのならば、補充は可能だった。壱朗の五千年もの『血の熟成（魔力の蓄積）』すら奪い、殺されかねない能力だった。

それを知っても、壱朗はティアの　姉（真祖）に救いの手を差し出した。だが、ティアの　姉（真祖）はティアの為に死ぬ気だった。強力すぎる『強奪』は二世であるティアにも受け継がれ、そして二世であるが故に、代償を背負わせていた。

ティアはティアの　姉（真祖）とは違い、『強奪』を所持するだけで『血の熟成』を著しく消費する。それは常に記憶を失うのと同じ。そして、ずっと消費し続けていた。

つまり、ティアは吸血鬼であるだけで、自然と死んでしまうのである。

壱朗は悩んでいたが、ティアの　姉（真祖）は答えを出していた。

『ティアから血技を『強奪』し、自分が死ぬ』

そうすれば、ティアは死ぬ事が無い。

他の真祖に帰属し、その真祖の血技を得ても問題はない。

だが、ティアの　姉（真祖）が生きていては、他の真祖へ帰属できないし、『血の熟成（魔力の蓄積）』と共に再び『強奪』の力に目覚めるだろう。

確かにその方法は有効だった。壱朗は血技の研究（五千年の蓄積）でどういった受け継がれ方をするのか、十分知っていた。だが、壱朗も食い下がる。

『自分ならば、ティアが吸血鬼になる前からやり直せる、過去を変

えられる』と。
そして、ティアの　姉（真祖）は壱朗に笑顔で聞いた。
「それなら、もう既にやり直されているはずなんじゃないの？」
それ以降、壱朗は何もせず。ティアだけを助け、旅に出た。
ティアの　姉（真祖）とのやり取りはティアを助けた直後に『魔血晶』へと封じ込めておいた。思い出す事が無い様に、ティアに気付かれる事が無いように、と。それからの壱朗は、さらに歴史への介入を徹底的に避けるようになった。

全てを知ったティアは、必死に取り繕った陽気な声で話しかけてきた。
「『帰属の儀式』が成功した訳ですから、私も過去に跳べるんですかね？
ね、壱朗様？」
「……そうだな。飛べるかもな」
「じゃあ、商店街で一週間前に食べ損ねた『２１００年年越しパフェ』も食べに行けますよね。一緒に行ってくれます？」
「……あぁ、過去の俺（人間だった壱朗）に会わない様に、ならな」
「生まれたばかりの壱朗様の顔も、見てみたいんですけど、いいですか？」
「……俺は病院には入らないけどな」
「じゃあ、じゃあ……」
……お姉ちゃんを助けに行きたいって言ったら、一緒に行ってくれますか？」
「……本気でお前が望むんならそうするさ。世界の修正力（タイムパラドックス）との衝突とだって闘ってやるぞ」

ティアは、それ以上は自分を繕えていなかった。今の壱朗ですら見るのが怖い、優しい笑顔を見たのだ。壱朗の記憶の中にあるティアの姉は、見た事のない強い意志と、見惚れるぐらい綺麗な笑顔で、ティアの為に死を選んでいる。

ティアは耐えきれなくなったのだろう、暴れた。壱朗の腹筋を掴み、千切り、嗚咽も、涙も、我慢も、加減もできておらず、壱朗の腹筋はティアのせいでボロボロで、ベッドは血まみれだった。

「い、壱、朗様はっ。や、さしぃからっ。きらぃです」

「そうか。俺はティアが大好きだ」

「もっっ、と。じょうっずに、嘘をつぃてほし、かったです」

「そうだな。約束を破ったのは、あの時が初めてだと思うが練習するべきだな」

「嘘でっすよぉぉ！　お姉ぇちゃんにも、いちろぅ様にもっ、嘘ついて欲しくなかったっです！」

言葉と共に力任せに叩きつけられた両腕は、壱朗を傷つける事なく、――壱朗でなければ大穴が空いていただろうが――その下のベッドだけを破壊し、とてつもない音を立てた。

「あぁぁぁぁぁぁっっ！！」

「泣いていい。今度は全部、俺が受け止めてやるから」

力任せに腕を振り回すティアの体を、物を壊さない様に片手で抱き締めて固定してから、ティアごと空中に浮かびあがり目を瞑る。ティアは暴れるのは止めたが、物凄い腕力で抱きつかれたままの状態になる。恐らく先程からずっと、無意識に『怪力』を使っているのだろう。壱朗でなければ圧迫死どころか、胴体が真っ二つになっているレベルだ。

「うっうっ……ぉねぇちゃん……」

『ＰＵＬＬＬＬ。ＰＵＬＬＬＬ』

ティアがベッドを破壊した音が、下に響いたせいだろう。従業員からの確認の電話だと予測がつく。片手で受話器を取り、相手の話も聞かずに一方的に通達する。

「何だ。音なら気にするな、ただの痴話喧嘩だ。『邪魔しに来るなよ』」

壱朗は言葉に魔力を乗せて、来ない様に『言霊』で念を押しておいた。

「すみません。ぃちろぅさま。また、ごめぃゎくをかけてしまぃましぃ……」

「なんだ、子供にでも戻ったのか？」

「ちやぃますよぉ。ぎぇんぎょちゅぅしゅぅぎゃ、おかしゅく」

「喋るな。思うだけで伝わるだろうが」

「ぁ……ぁぃ」

恐らく、体の混乱が言語中枢にまで及んだのだろうと察しておく。

『壱朗様、ごめんなさい』

「どうしたい？　ティア」

『何もできないですよね。過去って変えれないですよね』

「恐らく無理だろうな」

『だから、お姉ちゃんは笑ってたんですよね』

「そうだな。ティアの事だけ考えて、満足してる笑顔だった」

『壱朗様は、死なないって約束してくれますか？』

「それはどうだろうな。死なない存在はない。吸血鬼だっていつかは死ぬさ」

『じゃあ、私より先に死なないで下さい』

「ふむ。それは俺が嫌だな」

『むぅ、じゃあ一緒に死んで下さい』

「心中がしたいのか？」

『違います。解ってて聞いてますよね？』

「あぁ、止む追えず死ぬ時は、一緒に死なせてやるよ。どんな事を

しても死なさない様に散々、足掻いた後でならな」
『それでいいです。お姉さまの事は我慢します』
「お姉ちゃんの為にも、そのほうがいいな」
『その呼び方は忘れて下さい』
「お姉さまの為に強く生きろ」
『はぃ。御主人様と一緒に生きます』
「ったく、我が儘な眷族だな」
『はい、壱朗様のたった一人の眷族ですから』

そのまま、下らないやり取りを少し続けていると、落ち着きを取り戻したティアは眠りについた。そのままの状態で眠ってしまった為、壱朗もそのままティアの為に、ティアの壊したベッドの代わりをする事になった。

第０７話　家族（前書き）

プロローグの第０１話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第07話　家族

壱朗は目の前の状況を無視し、ティアと自分達の血技について考える。

結局、ティアの姉の目論見は9割方成功した。ティアと壱朗は三千年の間、一緒にいたが、結局ティアの血技は完全に消える事はなく、『記憶をコピーする』というモノに落ち着いていたし、それ以上に成長する事もなかった。

ティアは知らなかった事だが、『帰属の儀式』は眷族側が行うだけでは『血技』は付与されない。眷族側が行う事で真祖による『記憶の結晶化』が可能になるだけだ。だからティアが旅立つ壱朗に儀式をした事で、壱朗は幼いティアと初めて会った時にはすでに『記憶の結晶化』が可能だった。ただ出会った時のティアの主は姉だった為、姉が死ぬまでは不可能だったが。

結局、ティアが生きた三千年の間に壱朗により、背中に六つの『魔血晶』が創られた。そして、これからも増えるだろう。

真祖側の『帰属の儀式』は壱朗自身が恥かしがったので、ホテルの部屋で抱いた時にこっそり済ませておいた。おかげで抱いている途中から、壱朗の意識がダダ漏れになり、焦らしたり、反応を楽しんだりと、苛めようとする意思がティアにバレて怒られた。素直に苛められてくれなかった為、壱朗は少し不満だった。

本当の意味で儀式が完了した為、ティアには壱朗の『時間跳躍』の血技が新たに付与された。ティアは壱朗が吸血鬼化した訳ではない。『帰属の儀式』により眷族となっただけなので、血のつながりは薄い。なので『時間跳躍』も大した効果はないだろう。

とりあえず、3時間後の自分宛てに手紙を跳躍（ジャンプ）させたりと、暇な時に微妙な訓練を行っている。

そして、壱朗が何故こんな事を考えているのかというと、今まさに壱朗は現実逃避の真っ最中だからである。

「あら、お母様。御夕飯のお買い物でしたら、私（ワタクシ）が購入しました材料がもうすぐ届きますのでお待ち下さいな」

「あら～。ティアちゃん。悪いねぇ、そんな事まで気にしてくれなくてよかったのに～」

「いぇいぇ。これからは家族として過ごさせて頂くんですもの。今日ぐらいは私（ワタクシ）が全て用意させて頂きますわ。旦那様にも、御両親にも私（ワタクシ）の手料理を召し上がって頂きたいんです」

壱朗にとって、あまりにも現実味の無いやり取りが、目の前で交わされている。仕舞には爺さん婆さんまでが調子に乗りだした。

「ティアさん、ワシらも御一緒させてもらってえんかのぉ」

「あら、お爺様。もちろんですとも。旦那様からは、お婆様といつまでも睦まじいお二人で、大変幸せそうだとお話を伺っております。その秘訣を御食事をお召上がりになられながら教えて頂けますか？」

「えぇ、構いませんよ。爺さんが浮気しそうになった時の話も、してあげましょうかねぇ。ねぇ、爺さん？」

「婆さん、それはもう許すと言ってくれてたじゃろうが。今更、蒸し返さんでもええじゃろに……」

壱朗は爺さん婆さんの態度の変化に、頭が痛くなってきた。

「……爺さんも婆さんも。年末までは、爺さん婆さんと呼ぶなと俺に言ってなかったか？」

「そうじゃったかの？」

「『爺さんというのは曾爺（100歳を超えた）さんくらいの年齢の人を差すのだ！』とか『ワシらの事は民子さん敬三さんと呼びなさい！』って二人揃って言ってたじゃねぇか！」

「壱朗ちゃんや、婆さん達ももう若くないんよ？　いつお迎えが来

るか分からんけんね、今の内に『肩叩き券』と『肩揉み券』使っておこうかねぇ」

「婆さん、俺はそんなもの作ってプレゼントした事なんか無いぞ。親父の間違いだろうが。つーか、『けんね』ってどこの方言だよ！　ウチは三代前まで全員、大阪生まれの大阪育ちしか居ないって言ってただろうが！」

「壱朗や、優しい婆さんをそんなに苛めるもんじゃないぞ。苛めはよく社会でも問題になるじゃろうが。苛めていいのは、自分の嫁さんを布団のな……『バキッ』……」

「……婆さん、殴るのは良いが……それはちょっと凶器が過ぎないか？」

「壱朗ちゃん、これはスチールバットに見えるだけのプラスチックのバットやけん大丈夫よ？」

「……そうか。ならいい。部屋に戻るから飯（メシ）ができたら呼んでくれ」

そう言って、壱朗は自分が生まれてから２８年は過ごした家を、懐かしく感じながら二世帯住宅の二階へと、階段を上がり自分の部屋へと入って行った。

そこには、八千年前と変わらない部屋がそのままあり、寝正月を満喫しようとしていた為の用意も、そのまま置いてあった。

「確か、煙草と酒を買いに出たんだよな」

西暦２１００年1月2日に曾祖父が死亡し、壱朗は過去へと跳んだ。八千年かけて研究し、現段階の方法では過去は変えられない事は、間違いない。

この時代にやっとたどり着いたが、葬式に出る事もしなかった。昔の知り合いに、吸血鬼になった事がばれるのが怖かった。いや、友人に『化け物』という目で見られるのが怖かったのだ。家族にも知られたくなかったが、ティアに説得された。家族が死んでからでは、伝えたいことも伝えられない、と。

この部屋に、まだ2箱も残っていた煙草に火を付ける。用心深い性格だったのだろう。だから、あと3箱しかないと考えて煙草を買いに行った。今では何でも出来るようになったからか、『2箱も』なんて考えている。

この時代の煙草は軽い……軽過ぎて目にもしみない。泣くことすらできなくなった壱朗自身の様だった。

姉貴と弟は葬式が終わって、すぐに東京に帰ったらしい。仕事人間な二人らしい行動だ。

壱朗は明日から会社が始まるが、辞表を用意した。何らかの形で迷惑をかけるなら辞めた方がいいと判断していた。

ティアは交際している女性、という設定で上がり込んだ。親父が警察から戻り話が始まれば、それもすぐに嘘だとばれるが。

『お父様がお戻りになられました』とティアからの『血族間通話（テレパシー）』が届くいた。『すぐに降りる』と返し、一階の居間へと向かう。

居間では大きな卓袱台が出され、ティアが一生懸命、地中海風の鍋物を作っていた。ティアには空気を読む、という期待はしない方が良いらしい……

「おかえり、親父」

「お前こそな、壱朗」

「さぁさ、先にご飯を食べてしまいましょ。貴方もお腹すいたでしょ？」

「あぁ。爺さんの焼酎出してくれるか。美津子」

「はいはい。それと、漬物よね」

そう言って母さんが親父を促し、食事が始まる。コレがきっと、『彼方壱朗』が真祖になった時に、無くしてしまったはずの『日常』の一つだったのだろう。

その後も壱朗とティア以外にとっては、曾爺さんが居ない事以外

何も変わらない日常の風景のまま、酔っ払わない程度に全員が酒を飲み、――壱朗とティアは全く酔う事が出来ない体だったが――食事が終わる。

ティアと母親と祖母が片付けの為に、台所で洗い物を始めた頃を見計らって、話を切り出した。

「親父、爺さん」

二人はやっとか、と言わんばかりにジロリとこちらを睨み、――流石親子、そっくりだった――しかし、壱朗が話し始めるまでは、何も言わずにお互いのグラスに焼酎を入れ合っていた。

「俺は、吸血鬼になった。そして、ティアもそうだ」

――台所では壱朗の母、美津子が食器を落としていたが、ティアが床に落ちる前に掴んでおり、割れる音が響く事もなかった――

「曾爺さんを殺した吸血鬼も捕まえて、閉じ込めてある。これから復讐する為に」

「そう、か。だから、電話の後、すぐに帰って来なかったんだな……」

「あぁ、帰りたかったけど、もう日常には戻れなかった。明日から会社が始まるけど、辞表を出すつもりだ」

こういう時の彼方家の人間は強い。医者から、曾爺さんの残りの寿命の話をされた時もそうだった。感情的で、無駄な事は聞かない。必要な事だけを話す。

「どうやって生きて行くんじゃ？　当てはあんのか？」

「爺さん。当てはある、こう見えてティアはかなり長く生きてるんだ」

「一緒には、暮らせんのかぃ？」

「それができそうなら、今ここで話してない。って事だよな、壱朗」

「すまない、婆さん。親父の言う通りだ」

壱朗の『血技』と現在の年齢については、話さない事に決めていた。

しかし、家を出る事は壱朗の中ですでに決めており、――ティアはかなり渋ったが――その為、家族を安心させる設定を考える事にした。

ティアが人類に友好的な吸血鬼としての地位があり、経験が豊富（高齢である）であるという事を話し、当面はティアに面倒を見てもらうという、男としては何とも情けない形にする事にしていた。

そういう話にする許可を、ティアから貰うのには苦労した。

ティアは壱朗の家族に、高齢に見られるのが嫌なようで――壱朗は『不老なのに気にするのか？』と女心の分からない、ヘタレらしい事を考えていたが――散々話し合う事になった。

我慢してもらう為の代償に、二人きりで南の島へバカンスに２週間も連れて行く事になり――ティアは、『それぐらい当たり前です。女にとって、旦那様の御両親の印象というモノがどれだけ大事なのか分かっていません』と壱朗の居ない所で怒っていたが――壱朗は今後の予定の修正をする事になったのだった。

「親父、申し訳ないけど適当な時期になったら、警察に行って、もう一度俺の行方不明届け出しておいてくれ」

「はぁ～。お前なぁ。俺が今日、警察で何人の人に『人騒がせな』って顔で見られたと思ってるんだ？」

警察や世間の間では、曾爺さんの仇打ちをすると家を飛び出した、曾孫（２８歳）は家族からの警察への連絡で行方不明扱いとなり、１週間経った後、仇の吸血鬼が見つからず、無傷で帰ってきた。というヘタレなオチが付いていた。今日、壱朗の父親は、それを警察に報告に行っていたのである。

「悪いな」

「壱朗らしくない落ち着きっぷりだったから、何かあるは思っておったがなぁ。他に、わしらにできる事はないんかの？」

爺さんの好意は嬉しい。だが吸血鬼は弱肉強食、善悪の価値は力で決まる事が多い。人間のみんなには何もできないし、足を引っ張るだけだろう。

「……」

何も言わない事で、その全てが伝わる。祖父は本当に曾祖父そっくりで、その辛そうな顔を隠す笑顔が、壱朗には辛かった。

「そうか……」

爺さんの顔を見たせいでティアは、言いたい事をじっと我慢していたのが限界を超えたのだろう。ティアは自分は何も言うべきではないと、家に来る前に自分で言っていたのに反し、言葉一つ一つを模索するように話し始めた。

「壱朗様が、毎年、初詣にこの街の神社に来られる様に、私が、何とかします。ですから壱朗様の事を、お忘れにならないで下さい。私達は、皆様がお亡くなりになられても、その後も、きっと、ずっと、生き続けてしまい……『ティア、もう良い』……はい……」

「壱朗にはもったいない嫁さんだのう」

「若い頃の私みたいだと思いませんか？　敬三さん」

「それを言うなら、この家に来たばかりの美津子にそっくりだよ」

「お前はいつまでたっても、美津子さん離れができんのう。お前がそんなだから、壱朗はティアちゃんを捕まえる前に、バツイチなんかになるんじゃ」

「父さん、それは壱朗自身のせいでしょうが！」

壱朗はそんな祖父母に対し、『過去の事持ち出すなよ。後で、ティアの機嫌が悪くなったらどうしてくれる』などと考えていた。
「前の嫁さんはひどかったからのぉ。一回も民子さんって、呼んでくれんかったしねぇ。壱朗ちゃん、ティアちゃんと仲良くの？」
「ティアさん。壱朗の事。よろしくおねがいします。毎年大晦日には、神社でお待ちしていますね」
「あ、はぃ。お義母様（かあさま）」
何やら意味深な返事の仕方をしているティアを壱朗は努めて無視し、父親と向き合う。
「壱朗、いつ行くんだ」
「……今晩中には、行くつもりだ」
「次は、年末か……約束は、守れよ？」
「俺は『約束』しないぞ、親父」
「こんなにいい嫁さんを嘘付きにする気か？」
「……努力はする」
母親とティアが共に傍にきていたので、壱朗は『まだ嫁じゃない』という言葉は呑み込んだ。『まだ』に反応されても、『嫁じゃない』の方に反応されても碌な事にならないのは分かっている。
「お母さんもお父さんも、その……吸血鬼の事はよく知らないけど、壱朗が苦労するっていう事は分かるわ。でも、何があっても壱朗は私達の息子よ？」
「わしらの孫じゃしの。のう、民子さん」
「そうじゃねぇ。敬三さん」
『俺も彼方の家の子に生まれて良かったよ』と思ったが、口に出したら負けだと壱朗は思い、頷いて見せた後に心の中で感謝しておいた。
「俺の息子だ。特に自慢できる所はなかったが、良い嫁さんを連れてきたのが良い男の証だ。……行方不明にするんじゃ、周りの誰にも自慢できないじゃないか。おい、壱朗。商店街の皆にティアさんを自慢してからじゃダメなのか？」

「アホな事言うな、親父。母さんと爺さん婆さんを見習って、カッコよく締めろよ。それじゃ俺の中の親父は、いつでもアホな親父じゃねぇか」
「アホでいい。だから忘れるな。俺はお前の家族（父親）だ」
「姉貴と隆弐（りゅうじ）への説明よろしくな。ちょっとは吸血鬼の事調べてから、話すかどうか決めてくれ」
「一美（ひとみ）と隆弐（りゅうじ）にも一度は会っとけ。後が煩いからな。……そうだな四月になったら話す。それまでに会いに行け」
「分かったよ。ティアと必ず行っとく」
横を見るとティアも少し目が赤くなり初めていて、壱朗はそろそろ潮時かと考えたのだが。

「じゃ、日付が変わるまであと三時間はある。美津子、飲むぞ～」
「いいのう、確か死んだ父さん（壱朗の曾祖父）の秘蔵の芋焼酎が出てきた筈じゃったろ？　あれも開けるぞ。民子さん、熱燗と冷はどっちがえぇ？」
「あらぁ、どっちもいいですねぇ～敬三さん、まずは熱燗にしましょうか」
「貴方、おつまみに漬物は全部出しちゃいますね。御歳暮の残りも何かあったかしら……」
「……旦那様（壱朗様）？　お酒が無くなるまでは、出発できそうにないですね？」
調子に乗って呼び方を変えるティアを睨むと、そんな視線は気にせずに、壱朗の家族を見ているティアの笑顔に、壱朗も文句を言う事を諦める。
「あぁ、全くアホな家族だと、湿っぽくもなりゃしないな」
「……その割には嬉しそうですが……『ティアちゃーん。一緒に飲むわよ～』……はぁ～い！　お義母様～。では旦那様（壱朗様）。飲んできますね」
「ったく……」

……その後、本当に酔いつぶれた母親と祖父母が居間で寝ている間に、寝たフリなのが一目瞭然な父親に礼を言い、ティアと共に家を出た。

「旦那様～。素敵な家族でしたね～」
「ティアの両親にちょっと似てたな」
呼び方については、明後日ぐらいまでは好きにさせてやろうと思っている。
「はぃ、きっとこれから先も、あんな家族に出会いますよ。その時に思い出すんです。私達の家族もそうだったって」
「そうだな」
「私達にも、家族はできると思いますか？」
ティアは遠くを見ながら、確認する様に聞いてくる。
「望めばなんだってできる……とは、言えないよな。力があると余計に、できない事が分かってしまうもんな」
「そうですね～……でも！　いつか、旦那様の子供を産みます！」
「酔っ払ってるのか？　ティア」
「酔ってませんよ。吸血鬼は酔いません」
「だな」

力を手に入れると現実がより現実（リアル）になる。できる事が増えると、できない事がはっきりと解ってしまう。嫌な話だった。
空の高さを知る為に鳥を超え、空の高さを知ったからこそ、宇宙（ソラ）では生きていけない事を知った。そんな話を聞いた時、寿命が短い生き物だからこそ、人間には愛が溢れ、希望に満ちているのだと思った。
俺は俺の腕にしがみつきながらも、笑顔で隣を歩いてくれるティアを、いつまで愛していられるのだろうか。

「ずっと、一緒にいて下さいね。一緒に死んでくれる約束も忘れちゃ嫌ですよ？」

ティアは気付いていたのかもしれない。

現代に二千歳以上の吸血鬼が居ない理由に。

そしてそれは、壱朗達にも適用されているのかもしれない事に。

「だから、『約束』したのか？」

「……何です？　旦那様？」

「いや、何でもない。『約束』は守る。テイアとの南の島（バカンス）の『約束』もな」

「はい！　きっとですよ」

そうやって支え合いながら、ティアと壱朗は闇夜の道を歩いていく。まるで、人間が支えあって生きていくかのように。

第０８話　お披露目（前書き）

プロローグの第０１話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第０８話　お披露目

ティアは門の前に礼儀正しく立っており、次々と来る入場者を捌いていた。

ティアの後ろには扉が幾つも並んでおり、扉と扉の間には日巫女（ひみこ）の眷属がそれぞれ立って、ティアと同じ様に案内をしている。

「ヨーロッパ方面の血族の方は、ＡからＥの扉へとお願い致します。えと、アジアの方ですか？　ならＨからＫの扉へとお向かい下さい」

「ティアさん～、三世の方が『四世以降と一緒など馬鹿にしているのか』って怒ってます～！」

手伝いをしてくれている、日巫女（ひみこ）の眷属である壹与（いよ）が泣きそうな声で走り寄ってくる。

「壹与（いよ）さん、またですか？　とりあえず、有無を言わせず扉の中へと放り込んで下さい。そうすれば、彼方様の『結界』のせいでおとなしく座る以外、行動出来ないはずです」

「それが～扉の中に入る前に～、文句を言い始められまして～」

壹与（いよ）は三世だが日巫女（ひみこ）と同じく、二千年近く生きており、背中の『魔血晶』も既に三つ付いている。故に、その辺の三世や、四世以降に遅れを取るはずが無いのだが、いかんせん気が弱い為、強気に出られるとついつい萎縮してしまい、ティアに泣きついて来るのである。

お陰でティアの立っている後、一際大きなの扉の前には吸血鬼が十人程、正座させられている。全て、壹与（いよ）に因縁をつけ文句を言って、ティアにお仕置きされた二世と三世だった。

「それは～分かっているんですけど～何故か～皆さん怒るんです～」

ティアは壱与を見て、何度目になるかわからない溜め息を吐いた。
壱与の外見の事を考えて、『これでは仕方ないのかもしれません。またお仕置きしますか』と思いながら壱与に指示を出す。
「とりあえず、文句を言う輩は真祖でないかぎり、全てこちらへ回して下さい。真祖の方々が一般門に来る事は無いと思いますが、誤って来られた場合は、直ぐに『念符』で連絡を。御迎えに上がりますので。宜しいですね？」
「はい～解りました～」
壱与は間延びした話し方のまま――本人的にはシャキッとしたつもりの――返事をし、ポニーテイルに纏められた綺麗な黒髪を揺らしながら担当の扉へと戻って行く。ティアには歩き方までフラフラしているように見えるのだが、本人は至って真面目に、真っ直ぐに歩いているつもりらしい。

日巫女の血族は全員、日本人らしい黒髪だ。それが血族の条件なのかと聞きたくなるぐらい、黒髪の者しかいない。そして何故か十代に近いの容姿の者が多い。日巫女本人は『年齢不詳の京美人』といった出で立ちなのだが。

ティアは、その後ろ姿に『日巫女様も変わった趣味の方なのね』と思いながら、入場者が疎らになってきた事を感じ、正座している面々に話しかける。
「さて。『結界』を解きますが、大人しく座席へ向かえますね？」
既に戦意喪失どころか、とにかくこの場から離れたいと考え始めていた二世や三世の面々は、ティアを怒らせない様に、ただ黙って首を縦に振っていた。
「では。……解！　これで動ける筈です。問題を起こさないで下さいね」
やっと解放された面々は、とにかく逃げる様に己に指示されてた扉へと入って行く。この時正座させられた面々が、『吸血鬼社会に

変革をもたらす存在』としての壱朗の、力の誇示に一役買い、広告塔になり得る存在だった。

ティアを含め、扉の前で案内と雑務を担当している数名は皆一様に、背中の大きく空いた衣装で行っている。

ティアは純白のイブニングドレス。壹与（いよ）を含め、日巫女の眷族である八人の男女は、袴が男女色違いの巫女服だった。何故、背中を大きく露出させているかというと、簡単にいえば『魔血晶』（身分）が解る様にである。

力のある吸血鬼（五百年以上生きた者）は背中に『魔血晶』が付いている。

その色と数が、ほぼそのまま力の格差となる。

色は、真祖なら『黒』。二世は『青』。三世は『赤』。四世以降は三原色の『黄色』に近い、明るい色をしている。

数は基本的に正多角形の呼び名で呼ばれる。

五つ持ちは『ペンタゴン（Pentagon）』、六つは『ヘキサゴン（Hexagon）』、七つで『セプタゴン（Septagon）』。

何故、多角形の呼び名で呼ばれるかというと、『魔血晶』を創る、つまり『記憶の結晶化』の際には、自然とその力に合わせた魔方陣が浮かび上がる。また、全力で力を行使する際にも背中に、魔血晶を基点とした同じ色の魔方陣が浮かび上がるのである。

この魔法陣は自分では見えない為、真祖か他の吸血鬼の『記憶の結晶化』を見た事がある者しか実物を知らない。『魔血晶』（強大な力）をいくつも持つ吸血鬼。その全力での戦闘を、見た事がある者達も知っているだろう。生き残っていれば、だが。

そんな呼び方をするのは、伝統や格式を重んじる三世以上の者が多い。

何故なら四世以降の者で、千年を超えて四ッ星『テトラゴン（Tetragon）』になる事は、あまりにも珍しい事なのである。故にまだ若い吸血鬼や四世以降の世代は、単純な言い方で『モノゴン（Monogon）』を一ッ星（シングル）、『ディゴン（Digon）』を二ッ星（ダブル）、『トライゴン（Trigon）』を三ッ星（トリプル）などと称する場合が多い。

伝統や格式を重視する事のない、下位の吸血鬼社会の中ですら禁忌（タブー）となっているのが五芒星（ペンタグラム（Pentagram））や六芒星（ヘキサグラム（Hexagram））を意味する呼び名だ。

ティアは六つ持ちの『ヘキサゴン（Hexagon）』であるがその背に現れる魔法陣の模様は六芒星ではなく、雪華模様に似た――壱朗が長生きとかけて『万年生きる亀模様』と言ったら殴られた――六角形模様である。

五芒星（ペンタグラム（Pentagram））や六芒星（ヘキサグラム（Hexagram））は吸血鬼に対抗しうる、教会所属の魔法使いや魔術師、日本の陰陽師や中国の符術師などが行使する力に現れる魔法陣である為、吸血鬼からは忌み嫌われている。

壱朗やティアはそんな事とは関係なく、技術として符術や陰陽術、果ては魔術まで世界各地の魔力で使用できる術を色々と収集している。

そんなティアでも、姉妹共に教会の人間に迫害された記憶があるからか、五芒星や六芒星には忌避感を隠さない事が多い。

壱朗からすればどんな技術を使ってでも、自分の血技の謎を解明しなければいけなかったし、なにより娯楽――小説や漫画、アニメなど――の中に魔術師や符術師など山ほど出てくる時代に生まれた為、恰好良いなどと評しており、その様な事は吸血鬼が口にすべきではないと、ティアによく怒られていた。

今、この正面の大扉を管理しているのは、背中に『Ｂｌｕｅ（蒼青の）Ｈｅｘａｇｏｎ（六角魔血晶）』を背負ったティアだ。

この大扉は『真祖』専用。世界に十四人いると言われる真祖の内、

既に十人が中にいる。
扉は一度も開けていない。
だが真祖なのだ、それぐらいの事はやってのけるのが当たり前だ。
例え、この会議場が壱朗の全力の『結界』により『扉』以外からの、入退場や破壊が出来ない様にされていたとしても。

愚か者達を全員解放したティアは、外から見えない様にお腹に貼った『符』を剥がす為にドレスの中に手を入れる。
壱朗の指示の通り、『血の力の熟成』を誤魔化す『符』を貼ってワザと愚か者を集めるのは、もう十分な筈だった。

「おい、何故三世たる私が四世ども等と、同じ区画に入らねばならんのだ」
壱与の処で文句を言っていたという愚か者だろう。近づいて来ているのは目の端に映っていたので知っていたが、名乗りもせずにいきなり言う事がこれとは。ちょうど『符』を剥がそうとした時に話しかけてきたので、まだティアの魔力には気づいて居なかった様だ。
剥がしてから姿勢を正し、答える。たとえ、格下相手だろうと壱朗の眷族として守るべき作法は守る。礼儀まで守ってやるつもりは無いようだが。
「我が主たる真祖様の意向です。貴方はどちらの方ですか？　力ある者として振る舞いたいのなら、上位者への礼儀作法ぐらいは、守りなさい」
まるで子供を叱る教育者のように振舞われ、中世の貴族の格好をした、三世の吸血鬼は頭に血を昇らせたが、ティアがそれを許す筈もなく、さらに畳み掛ける。
「壱与殿は日巫女様の眷族たる『ＲｅｄＴｒｉｇｏｎ』です。その彼女に無茶を言ったと聞いておりますが、『魔血晶』すら持ちえぬ貴方程度の何を持って我々の手を煩わせるのです？　格下は格下らしく言う事を聞いていればいいのです」

三世の男は、突き付けられる上位者のからの宣告に身動きが出来なくなった。

「言葉も返せないとは。一体、どの様な教育を二世から受けているのですか？　三世の教育も出来ない二世が居るという事ですか。同じ二世として、嘆かわしい事この上ありませんね。話があるのなら、お前の親たる二世を連れて来なさい」

ティアは男に背を向け、此方に近づいて来る別の二世――恐らく『ディゴン（Digon）』だろうと一瞬で判断し――に、扉の場所の案内をする為に、小走りで向かう。

その場に取り残された三世は、急に大きくなったティアの魔力（血の力）に絶句し、走り去る背中の『Ｂｌｕｅ Ｈｅｘａｇｏｎ（蒼青の六角魔血晶）』まで見てしまっては更に文句をいう事も出来ず、ただ来た道を戻って自分に相応しい扉へと入るのだった。

「そろそろ時間ですね」

ティアは腕の発条式時計（ぜんまい）を――骨董品（南の島で壱朗に買わせた）のお気に入りだ――確認してから、壱与（いよ）の元へと向かう。

「壱与さん。全員に中に入るように連絡を。これから五分後、『封鎖結界』を予定通りに発動します」

「もうそんな時間ですか～解りました～」

これから壱朗による、吸血鬼社会全体に対する挑戦が始まる。ティアはその宣誓式展会場ともいえる、場所の維持を任された。

日巫女や壱与（いよ）達にすら、『封鎖結界』だと教えているこの建物の結界は、壱朗の八千年に及ぶ研究と知識を使用した『時空間捕縛結界（五次元）』だ。しかし、それを維持しているのはティアの魔力だ。

あとは、予定時刻に来なかった者に関しては、入れるつもりは無いし、真祖が来ていない場合はこの会合後、壱朗が直々に出向くと言っていたので放置で良い。

とは言っても、冬眠中で来れない二人の真祖を除けば、来ていないのは二人だけだが。

そして、刻一刻と時を刻む骨董品（アンティーク）の発条式時計（ぜんまい）――吸血鬼は魔力で水晶の振動に影響を与えてしまう為、水晶振動子（クォーツ）時計は使えない――を見つめながら、『時』と『壱朗の言葉』を待つ。

――――ティア、時間だ。始めよう。――――

壱朗（血族間通話）の声がティアの頭に響く。それを聞いたティアは、その大扉の内側に入った後、『時空間捕縛結界』発動の為の最後の一枚の『符』を扉に貼る。

他の全ての扉では、すで日巫女の眷属が同じ様に貼ってくれている。

結界に穴が無いか確認した後、ティアは壇上付近へと向かう。

会議場はすり鉢状の形をしており、北側のスクリーンを中心に周囲２７０度の観客席がある。壇上には普段は置いてある演説台はなく、その中央には四人掛けのテーブルセットが一揃いとその左右に五個ずつ、計十個のサイドテーブル付きの豪華なソファがあり、既に十人の吸血鬼が着席していた。

中央には三人が、左側は五人埋まっており、右側には二人しか座っていない。しかし、中央にいる日巫女（ひみこ）はこれで全員と判断すると、席を立ち客席に向かって話し始めた。

中央にいる真祖を取り囲むように、一階部分の客席にまばらに座る二世達――およそ五十人程――は一様に起立し、日巫女に向かい頭を下げる

「諸兄らの参集、誠に嬉しく想います。此度の参集は異例のモノですさかいに、すぐに終わらせますよって、御静聴お願い申し上げます」

京言葉のイントネーションや雰囲気が、日本人以外の吸血鬼に理解できるはずもないが、真祖たる日巫女が丁寧な挨拶をしているというのは、会議場にいる全ての者に伝わっただろう。日巫女は『言の葉は伝わりゃしぁせんでしょねぇ』などと考えていたが、実は日巫女の熱狂的信望者(ファン)はかなり多く、この場にいる七割近い者が日本語を習得している。だが、観客席の吸血鬼達はお互いにそれを隠しており、完璧には理解できずとも、ある程度は理解していた。そして、二千年の歳月で整えられた、日巫女の美貌と肌の艶――肌が露出しているのは、その大きな胸元と鎖骨迄だったが――そして、体つき。それに花魁の様に綺麗に結い上げられた、美しい黒髪を見て、感動に打ち震えていたのは本人達にしか分からない、事実であった。

そんな彼らの心の内はさておき、これ以降、この場にいる真祖以外の吸血鬼は単なる傍観者か、声を出す事も許されない観客にすぎない。

「それでは、日巫女殿が我らを呼んだ理由を教えてもらおうかの」

中央に座ることの許された『酋長』と呼ばれるアメリカ先住民族(ネイティブアメリカン)の古き装束を身に纏った千二百歳の真祖が問う。

「いくら最高の『血の熟成(年齢)』を誇る日巫女殿とは言え、いささか性急な呼び出しではあったのぉ」

同じく中央に座る『春の女王(クロゥディア)』も、早く理由を知りたかったのであろう。彼女は日巫女とたった弐百年しか変わらない、千八百歳だった。彼女は日巫女と同じく着物姿でありながら、日巫女とは正反対だった。

優雅ではあるが、胸元の開き具合から妖艶さを強調した、花魁そ

のものな日巫女に対し、『春の女王（クロウディア）』は桜模様の着物をきっちりと着こなし、風情のある涼やかな乙女、という印象だった。

血技が日巫女のモノよりも戦闘向きである分、戦闘能力は『春の女王（クロウディア）』の方が上で、日巫女に強く出る事の出来る真祖の内の一人だった。

「そうですなぁ、ほなきちんと紹介させてもらいましょか。我（ウチ）らが日本にお生まれにならはった新しき真祖どす。二千百年を迎えた翌日に真祖にならはったばかりやよって。まだ生れて四ヶ月という所どすなぁ。

では、彼方様こちらに……」

その瞬間、特に日巫女をよく知る、真祖達は皆一様に驚きのあまり、腰を上げそうになった。日巫女が敬称で呼ぶ相手が居ると言う事に。

そして、スクリーンの手前に『隧道（トンネル）』が出現したかと思うと、日本人らしい黒髪黒眼で、真っ黒の礼儀服に身を包んだ壱朗が姿を現す。

その姿を見た真祖達は、日巫女が何をしようとしているのか、意味が全くわからなかった。たった一人、ラマルティーヌ卿を除いては。

「さぁ、このお方が我（ウチ）らが日本の真祖、彼方様どす。よしなに。では……」

「日巫女どの、待たれよ。理由を先に申せ、妾を呼び付けた理由が、ただの真祖の紹介というのではあるまいな？」

言葉どおりの意味ではない。壱朗を中央のテーブルに座らせようとする日巫女に『春の女王（クロウディア）』が説明を求めているのである。そこに、壱朗が口を挟む。

「だから言っただろうが、日巫女。こんな茶番よりも、とっとと本題に入るべきだってな」

「へぇ、せやかて。彼方様、真祖の挨拶てゆうんは、いつもこうし

てやってはったんどすえ？」
「そうなのか？」
「そこなラマルティーヌはんが抱え込まはった、１４番目の娘はんも百歳超えはったら、プルケラはんに後見してもろうて、お披露目する予定やったんやさかい……」
そこに『春の女王（クロウディア）』が割って入る。
「待たんかぬしら！　何を妾抜（わらわ）きで話をしておるか！　大体なんじゃ、たかが生りたて真祖の分際で日巫女を呼び捨てか。日巫女も落ちたもんじゃのぅ。ついでにプルケラと姓を呼ぶな！」
「春はん、そないに目くじら立てんでもええんちゃいますのん？　春はんとは違（ちご）うて『酋長』はんは解らはったみたいやけどなぁ？」
壱朗が『酋長』の方に振り向くと、『酋長』は椅子から下り床に跪いて壱朗の手を取ろうとしている所だった。それを見て、苛立たしげに爪をかじるスーツ姿の白人系男性。その姿を横目に、ラマルテーヌ卿が声を出す。
「日巫女様も彼方様も戯れはおやめ下さい。『酋長』殿も分かっておられるのならば、御遊びを辞めて頂けるように、仰ってくださいませんか？」
普段のラマルティーヌ卿とは違う、場をわきまえた態度と発言。そして『彼方様』という言い方に、隣で爪を噛んでいたウィルソン卿は業を煮やし口を挟む。
「ラマルティーヌ卿、貴様まで何だというのだ。『酋長』殿。貴方も我がアメリカ合衆国の誇る真祖ならば、その様な生りたてに跪くなど、お止めになってはいかがか？」
「黙れ、戦好きのガキが。この御方の事（魔力）が分からん程度の者は、例え真祖といえど会話に入る資格などないのじゃ。黙って金の勘定でもやっておれ」
アメリカの抱える真祖同士の不仲は有名だったが、これでは話が進まないと、ラマルティーヌ卿は壱朗に声をかける。
「彼方様、『結界』をお解き下さい。話が前に進みませんので」

訝しげな目で壱朗を見る『春の女王（クロウディア）』と、その他の真祖の視線に晒された壱朗に、日巫女は視線と仕草で『御随意に』と促す。それを受け、日巫女の悪戯に付き合うのは止め、壱朗は結界を解く。

――――背中を逆撫でされた後、首を掴まれ深海の底へと引きずり込まれる感覚。

実際には深海に潜った事のある吸血鬼等あまりいないので、感覚的なものでしかないが――――

全ての吸血鬼が同じ感想を抱いた。

――――格が、いや住んでいる世界が違う、と――――

その場で行動できたのは、やはり『血の力（血の力）の熟成』のお陰か、日巫女唯一人だった。三千年を共に生きたティアですら、全ての『結界』を解除した壱朗を、目の当たりにするのは初めてだった。

「もう一回。ちゃんと、紹介させてもらいましょか。

我ら（ウチ）が日本にお生まれにならはった新しき真祖の彼方様どす。

二千百年を迎えた翌日に真祖にならはったばっかりやよって。

まだ生れて四ヶ月という所どすなぁ。

あ、後。ウチの旦那はんやさかいに、誰も手ぇ出したらあきまへんぇ？」

日巫女はその血技である『予知』と、飄々としてはいるがあまり話さず、話す時には重要な事ばかりを言う普段の行動から、吸血鬼の中でもその言葉には信用がある方だった。しかし、この時ばかりは誰も日巫女の言葉を信用しなかった。

――――生りたての真祖がこんな存在感（魔力）を放つ筈が無い、と――――

日巫女の最後の言葉に納得のいかない壱朗の唯一の眷族は、『約束』がある為、今日までは京都にある神社（日巫女が住んでいる）に滞在しなければいけないが、明日以降の寝床の場所は『京都からは離す』と心に決めたのだった。

第０９話　会合（前書き）

プロローグの第０１話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第０９話　会合

ティアの後ろで成り行きを見守っている日巫女の眷族の二世達は、ティアの滑らかで男なら誰でも触りたくなるような綺麗な背中を、色んな意味で見続けていた。

普段は日巫女から遠ざけられている程、欲望に忠実な部類の彼らも、今回ばかりは目の前の背中に欲情を抱いたりはしなかった。

何故なら、壇上で『本気の壱朗』が放つ魔力（血の力）に圧倒されていたし、何よりティアの背中に、『Ｂｌｕｅ Ｈｅｘａｇｏｎ（蒼青の六角魔血晶）』の魔方陣が、浮かび上がっていたからである。

ほんの先程まで、一緒に案内をしていたティアを初めて見た時の彼らは、その外見と放つ魔力の美しさに見惚れ、内心欲情していた。

だが、ティアを怒らせる愚か者が次々現れ、『Ｂｌｕｅ Ｈｅｘａｇｏｎ（蒼青の六角魔血晶）』の魔方陣が肌に浮かび上がる度に、叩きのめされ、正座させられている人数が増えていくのを横目で見てからは、『この背中は自爆（トラップ）スイッチだ。触れたら死ぬ』と認識していた。

文句を言いつつ、馴れ馴れしくもティアの肌に触れようとした愚か者と同様に、ティアの『御主人様以外の方に触れる事を許す程、安い肌ではありません』という言葉と共に、地面に肩まで埋められる末路をたどるのはご免だった。

そんなティアが、何故か今も『Ｂｌｕｅ Ｈｅｘａｇｏｎ（蒼青の六角魔血晶）』の魔方陣を肌に浮かび上がらせ、真祖達の方をじっと見つめている。

二世（事情を知らされていない）だが日巫女と暮らしていない彼らは、あまりの恐ろしさに吸血鬼（世たるプライド）の誇りも忘れ、早くこの場から解放されたいと心の中でずっと祈っていた。もちろん、吸血鬼は神になど祈らないので、祈る相手

は自分の主だ。彼らが普段の日巫女を知っていれば、間違っても彼女に祈ったりはしなかったが。（日巫女／日巫女の本性）

「おぃ、日巫女。旦那さんってのはなんだ。俺の可愛い眷族が怒るから、下らない冗談はやめろ」（ティア）

「あきまへんかぁ？　なら、お妾でもよろしおすぇ？」（めかけ）

一階席の一部では、壱朗の発言と共に魔力が減少し、日巫女の発言の後、倍以上に膨れ上がる。（二世／圧力）

日巫女が壱朗の眷族をからかっているのは、日巫女の眷族には一目瞭然だった。（ティア）

そして、最も壱朗の圧力に晒されている壇上では『血の熟成』の強い順に、行動できるようになっていき、言葉を発し始める。（血の力）

「して、日巫女殿。本当の所、そちらの御方は何年もの間、どちらで眠っておられた御方なのじゃ？　妾もきちんと挨拶すべきだと思うのじゃが」（わらわ）

先程までとは打って変わり、額に汗を流し無礼にならぬように話しかけようとする『春の女王』は、日巫女の目には面白い玩具に見えるのか、意地の悪い笑顔で答える。（クロウディア・ブルケラ）

「春はん、そないな事言わはっても、ウチは嘘なんか吐いてやしまへんぇ？　それにいまさら丁寧に口調を戻さはっても、手遅れやと思いますぇ？　春はん、先刻はえぇと……『たかがなりたてのヘタレでやすけない真祖の分際』とか言わはったやおまへんか。いくら旦那はんが、気の優しい御方やいうても、限度ちゅうもんがありますぇ？」

「それぐらいにしてやれよ……」

いくら何でも可哀想だと思った壱朗は、助け舟を出すが……

「あら、旦那はんはウチよりも春はんの方が好みですのん？　ウチのべべと違うて春はんのは安もんですぇ？　わからんよぅに底上げたはるけど、旦那はんが満足できる程の大きさやおまへんし、それに髪もウチを真似て染めたはりますけど、ホンマは赤毛なんどすぇ」（着物／ちご）

日巫女は肩や、その深い胸元が大きく開いた着物を見せつける様

に、壱朗に擦り寄りつつ、凹凸には乏しいが桜の模様が美しい着物を、きっちりと着こなし、染めているとは思えない黒髪を持つ『春の女王』を流し目で見て、挑発する。

「〜〜っ！　貧相と言うな〜っ！　しかも捏造するな！『ヘタレ』と『やすけない』は言ってない！　というか『やすけない』って何だ！」

誰も貧相とは言っていないにも関わらず、気にしているのか自爆している。

「はいはい、お嬢ちゃんも挑発に乗るな。『やすけない』は品がないって意味だ。それと日巫女、俺は外見にも着てるもんにも興味はない。傍に置く眷族は理屈では選んでないからな。お前も傍に置くつもりはないぞ？」

「旦那はんのしぶちん！　ティアちゃんがけなるいわぁ……」

これ以上の脱線は困るので、日巫女を椅子に座せる。そして、泣き崩れたフリをする日巫女を無視し、壱朗は『春の女王』に話しかける。

「お嬢ちゃん。俺は此処には挨拶に来ただけだ。それに自分の四分の一も生きてない小娘が、何をゴチャゴチャ言っていようが全く気にしてない。だからお嬢ちゃんも気にするな、安心してろ」

「――――っ！！」

『春の女王』にとって、それはそれで問題だった。

――日巫女に次ぎ千八百年を生きる真祖である妾が、小娘扱いされている。しかも今、この真祖は四分の一と言った。つまり妾の４倍。七千二百年を生きているという事になる。確かにこの圧力はそれぐらいはありそうだが、それは一体何だ？

本当に吸血鬼と言う存在か？　――

などと『春の女王』が考えている間に、『酋長』が話に加わり始めていた。

「大いなる力をお持ちの真祖様。お久しぶりでございますのう。あの時はお名前をお伺い出来ませんでしたが、此度はお名前を知るお

許しを頂けるので？」
「やっぱ、爺さんには解っちまうか。名乗るかどうかはまた後でな。近々酒でも飲もう。爺さんと一緒に、かなりきついヤツでなら酔えるかもしれん。狼達のその後の事も、聞かせてもらいたいしな」
「うぅ、泣き崩れるウチを袖にして、爺と話に華咲かすやなんて…旦那はんのいけず。ウチが行かず後家になったのは、旦那はんのせいやのに……」
「酷い言いがかりだな。俺の眷族が、お前の眷族を圧迫死させかねないから、そういう冗談はやめとけ」
普段なら、真祖の中で最も我が儘な『春の女王』が真面目な顔で話を進めようとした。
「彼方様。『挨拶』というのはどの様な？　むしろ来いと言わしめる事すら可能かと思われますが？」
「ふむ、思ったより頭が良いな。流石に真祖なだけあるか。言葉使いは、気にせんでいいぞ。とっとと用事を済ませて、爺さんと眷族で酒盛りするかな」
そう言いきると壱朗は、縋りつこうとする日巫女をやんわりと椅子に戻し、他の真祖達を視線で撫でる様に一瞥すると犬歯が見える程、口を歪ませて笑った。

「改めて自己紹介だ。俺は『彼方』。名は俺に従う者にしか許す気はない。生れたのは日巫女の言った通り、西暦２１００年１月２日深夜。３日になってたかもしれん。が、どうでもいいか。おかしいと言われる前にさっさと誤解を解いておこうか。
俺の『血族技能』は『時間跳躍』だ」
その言葉に、既に身動きができる様になってはいたが、事態を静観していた真祖達が腰を上げる。しかし、壱朗は真祖達を再度一瞥する事で、座らせ話を続ける。
「詳しい事まで話すつもりはないが、俺は時間を何度か跳び、通算

で八千年近く生きている。これが証拠だ」
壱朗は儀礼服の上着を日巫女に投げ、――受け取った上着に顔を埋(うず)めて悶えている日巫女と危険な眼差しのティアを務めて無視し――振り向いて、白いシャツの背中の部分が空いている為に、むき出しの背中を見せる。

――そこには合計十六個の『魔血晶』と、上下二つの八角魔法陣が重なる様に描かれていた――

二世の誰かぽつりとつぶやく。
「『Ｂｌａｃｋ(漆黒の)Ｏｃｔａｇｏｎ(八角魔血晶)』……」
「それも二重にあるぞ……」
そこに更に壱朗は話を続ける。
「俺に従え、とは言わん。だが覚えておけ。俺は今日より、むやみに人間の命を奪う吸血鬼を許さない。そして、生れたての真祖を幽閉し、魔力を強化する為の餌とした者は必ず滅ぼす。生れた真祖が心から、それを望めば止めはしないがな。本当に望めば、な」
「旦那はんは甘いどすなぁ」
艶かしい視線と仕草で、そう評価する日巫女に全く動じない壱朗。
「悪いか？」
「いいえぇ。ウチ、本気で惚れそうやわ」
「それはいらん」
「いけずぅ……」
「……冗談はさておき、俺の『血技』に疑問を持っている輩もいるだろう。そんな現実を見れないアホどもの為に、用意した趣向がある……ティア！」
ティアは前もって言われていた通り、画面以外には『結界符』が山ほど張られたテレビを持ってくる。
「さて見えるか？　まぁ、見えないヤツはいないだろうが。この画

面に映っているのが今現在のこの会議場以外の場所の映像だ」
　画面の中にはこの会議場の外の様子が映っており、時間に間に合わなかった吸血鬼等がせわしなく歩き回っている。
「こいつらに落ち着きが無い訳じゃないぞ。目と頭の良い奴は気付いただろうが、今、『この会議場は未来に向かって跳んでいる』中の俺達を含めてな。そして、もうすぐ到着する。この中にお前等全員が入ってから『3日後の未来』へな」
　そこで比較的若い吸血鬼達、特に1900年台後半以降に生れている者達は気付いた。この会議場が未来に飛ばされているという事は、外と中とで時間の流れる速さが違う。この中に入ってまだ一時間も経っていない。一時間が3日になる。およそ72倍の速度で外の時間が流れる事になると。
「さて、『時空間捕縛結界(五次元)』で俺達の存在を守っているが、この会議場自体は守っていない。3日後に飛ばされた会議場は、3日後の未来で2つ存在するのか？　できるのか？　その結果もお見せできるだろう。お前達には傷一つ付かん事は保証しておいてやる。安心しろ。後15分だ。到着までな」
　そう言うと中央のテーブルにテレビを置き、正面のスクリーンに『隧道(トンネル)』用の符を張り、ティアを連れ『隧道(トンネル)』へ向かう。
「俺に従う者は自分の意思で挨拶に来い。来ない者は中立だろうが、何だろうが全部敵だ。中立を保ちたいならそれを言いに来い。心配するな、期限は決めん。挨拶に来れば、その瞬間からは保護対象だ。来るまでは何が起ころうが助けないし、敵対すれば殺す。この会議場がその結末を教えてくれるだろうよ」
「旦那はん、ウチを置いていく気ぃどすか？」
　符術で会議場の外へと出ようとしている壱朗に、それに気付いていた日巫女がしな垂れかかる。
「いいのか？　眷族が困った顔をしてるぞ？」
「ええのええの。たまには眷族から離れて、ゆっくりしぃたいし」
　壱与(いよ)を筆頭に日巫女の眷族は、『逃げられたら、数十年は見つけ

られない！』などと頭を抱えていたが、壇上に跳び込む訳にもいかないので、ただ困り果てていた。そんな事はお構いなしに、真祖達は自由に動く。

「さて、行くが……

――あ、おぃ、アンドレ。ミーシャはどうしたいと言った。ちゃんとしたんだろうな？」

「も、もちろんです。彼方様と共に行きたいそうです。はい！」

ミーシャとは、まだ生れて八十年ほどの１４番目の真祖だった。ラマルティーヌ卿が自身の眷族に見つけさせ、その血を楽しむ為に飼殺しにしていたのだが、一ヶ月程前に壱朗達に城に殴り込まれ、ミーシャの好きにさせる様に約束させられた。

おかげでラマルティーヌ卿が、やっとの思いでルーヴル美術館の本物とすり替えた絵画の数点がティアに燃やされ、ラマルティーヌ卿は大事なコレクションを守る為に、壱朗には逆らわない事を決めていた。

そして壱朗がミーシャと呼ばれた真祖に目を向けると、ミーシャは『ビクッ』と一度肩を震わせた。ミーシャにしてみれば何故壱朗が、自分に優しくしてくれるのか解らなかった。

だから、会合の後は好きなようにさせてやると言われた時も、どうせ嘘で、会合が終わればまた元通りの生活だと思っていた。壱朗が本気を出すまでは。

そして今。話が本当だと分かり、ミーシャはおずおずと口を開いた。

「もう、おじさん達に噛まれたり、しない？」

「あぁ。誰にもさせん。だからお前も人間を噛むなよ？」

吸血を経験済みのミーシャは、少しその味を思い出したが諦める。

「がんばる。だから、一緒に連れてってくれる？」

「よし。じゃあこい」

「うん！」
　ミーシャは八歳で吸血鬼になった、その瞬間から無意識に『不老』を発動し、それ以降は全く変わっていなかった。そしてミーシャはその外見通り、子供らしい笑顔で壱朗に駆け寄ると壱朗の首に飛びつき、甘え出す。
「吸いたくなったら、俺のを吸えよ？　何もかも我慢しなきゃいけない訳じゃ無いからな。したい事は言っていいんだぞ？」
「うん……じゃあ、我が儘言っても怒らない？」
「内容によるな。何でも言っていいわけじゃないぞ？」
「じゃぁ……パパって呼んでいい？」
　その瞬間、日巫女とティアは凍りつき、壱朗よりも圧力があるのではないかと思う様な暗いオーラを背負いミーシャへと目を向ける。
「怖いお姉さん達が睨んでいるから、それは止めた方が良いんじゃないかな？」
　壱朗も内心では鬼婆だと思ったが、空気を読んで言わなかった。
　すると悲しそうにティアと日巫女を見て、
「駄目？　お姉さんなの？　日巫女ママとティアママって呼んじゃダメ？」
　雷が走った様に体を震わせた二人は、壱朗に抱えられ首に抱きついているミーシャを奪い、我先にとミーシャを抱きしめ許可を出す。
「えぇ、ミーシャちゃん。かましまへんぇ。旦那はんはパパ。ウチはママ。それでよろしおすぇ。そこにいる眷族の事は鬼ババァでかまやしまへんえ？」
「ちょっと、日巫女様。そんなに力を入れたらミーシャちゃん死んじゃいます。どうせ、子育ても子守もした事ない様な、行かず後家なんでしょうから、無茶は止めて下さい。
……ォホン。ミーシャちゃん。長年、彼方様と連れ添った私が、ママとしてパパの事も色々と教えてあげますからね～。その行かず後家は『オバサン』とでも呼んであげてね～」
　壱朗は女達のそんなやり取りを無視し、――主に自分の精神衛生

上の理由で――それを見守る『酋長』に声をかける。
「爺さん、後で会いに来てくれるか。アンタのトコの白豚（ウィルソン）合衆国に興味はないがアンタとはやり合いたくないからな」
「分かり申した。儂は此処に残ってお力の一端を拝見させて頂いた後、改めて真祖でも酔える酒を持って、お伺いするとしますかの」
「彼方殿！　妾（わらわ）は、その……」
「クロゥディア、だったか？　今は自分の血族の事に集中しろ。気になる事があるんなら聞きに来い。一年は日本を出るつもりが無いからな」

そう言葉をかけたあと『隧道（トンネル）』の方へ向き直ると、右手を日巫女と、左手をティアを繋いだミーシャが明るく笑っており、なんとなく満たされた気分になった壱朗は、笑顔で三人と共に『隧道（トンネル）』をくぐった。

◇　◇　◇　◇

『漆黒のＢｌａｃｋＴｗｉｃｅ重積Ｏｃｔａｇｏｎ八角魔血晶』それが『春の女王（クロゥディア）』と『酋長』が名付けた、壱朗の本気の『血の熟成』の呼び名だった。
壱朗達が立ち去ってから、その力の結果に日巫女の眷属以外は動けずにいた。日巫女の眷属はさっさとこの場を離れ、日巫女の捜索に向かっている。他の吸血鬼達は瓦礫（元会議場）の山の中で、真祖達が動くのを待っていた。その中でも最初に動いたのは、灰色のイタリア製のスーツに身を包んだ、ウィルソン卿だった。

「この力、素晴らしい！　研究し、解明すれば不可能はなくなる！

どうです、皆さん。真祖全員で協力し、あの彼方という真祖を捕えるのです。そうすれば我々にもさらなる力が手に入りますよ！」

ウィルソン卿は両手を広げ熱のこもった台詞を吐くが、賛同の眼差しを向けた真祖は一人もいなかった。しかし、真祖は賛同していなかったが、二世、三世やそれ以下の者達の中にはその考えに賛同する者達が、かなり居そうだった。

「阿呆か貴様。今のこの惨状を見ろ。手を出せば、我らすら死に絶えるわ。よく見てみろ。残っているのは守られておった我々と、床などだけじゃ。外壁、外装、屋根。何処に行ったと思う？　同じように消滅したいのか？」

『春の女王（クロウディア）』は残された事の不満をウィルソンにぶつけるかの様に睨んでいる。

「ウィルソン、お前が儂を騙して研究した『重力』の研究、その研究過程で生み出した副産物（原子爆弾）の様な紛い物をもっと増やす気かの？」

『酋長』の言葉は騙された恨みは忘れていないと、射殺す様な視線と共に放たれている。

『春の女王（クロウディア）』と『酋長』に駄目出しされ、その怒りの圧力に何も言えないウィルソン卿ではあったが、戦闘向きではない日巫女と今百年を経ていない14番目はまだ幼いミーシャを人質にすれば、どうにかならないものかと頭の中で計画を考え始めていた。

そして、『春の女王（クロウディア）』と『酋長』の二人は自分達が、良識ある行動を取る者として壱朗に期待され、此処に残された事に気付く。他の真祖達は、壱朗の見せた力への対抗策も無いまま、己の立ち位置を決めてしまうのは不味いと感じていた。

それ故に、『春の女王（クロウディア）』と『酋長』の二人より先に動き、壱朗に伝わる事を避ける為、ただ黙って座っていた。

「どちらにしろ、『春の女王（クロウディア）』様と『酋長』様はあちらにつくのでしょう？　ボクは自分の目で彼を見定めてからにするよ。格上に対しては失礼かもしれないけれど、このスタンスだけは崩せないね」

動かない面々に見切りを付け、消滅のせいで埃まみれになったソファから、優雅に立ちあがった金髪碧眼の男は、その場に残る全ての者の目の前から、何の予兆も痕跡もなく消え去った。

「私は挨拶を済ませてから、帰らせてもらいますよ。これ以上コレクションを燃やされては敵わない。彼方様云々の話はともかく、あのティアという眷族には、城に近寄って貰いたくないのでね」

コレクションの為に中立しか選択肢の無いラマルティーヌ卿は、そう言いながら自分の眷族に指示を出し、撤収を始めた。

その横でずっと何かを考えていた、チャイナドレスに身を包んだ真祖の一人が、この場で最も力のある二人に対し、提案を持ちかける為に話し始める。

「『春の女王（クロッディア）』様と『酋長』様は黒髪魔神というお話を聞いた事がありますか？」

その提案が、誰の為に、何の為にされたのかは、今の段階ではまだ誰にも解らないのだった……

第１０話　生りたて真祖冒険記　其の壱（前書き）

プロローグの第０１話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。
この話は御遊びです。読まなくても問題ありません。
ただ単に、筆者の好きな過去の人物との絡みを入れようとしただけです。
説明が長いのでめんどくさい方は無視して下さい。

第１０話　生りたて真祖冒険記　其の壱

とある神社の付近の森。
そこに、その付近の景色の美しさには似合わない声が響き渡っていた。

「ティア～。くっそ～！！」
壱朗は、最後のティアの言葉が原因で、その付近に響き渡る声でティアの名を連呼し、呪いの言葉を吐いていた。
「覚えてろよ～次に会った時には、百倍返しにしてやる……」
壱朗が今居る場所は、周辺が何故か森だった為、周りを気にする事もなく、地面にのたうちまわり悶えたいた。現段階では、『能力』は『怪力』以外全く発現していない為、そこに近づく二人の人物に、全く気付いていなかった。
そして少し落ち着くと、誰が結んだのかは解らないが、大木に結んであった薄汚れた白い帯を見つけ、今度はその帯に八つ当たりを始める。

「くっそぉ、あんな不意打ちを食らうとは……油断してた……これは黒歴史に成るやもしれん……」
などと、ちょっと古臭い言葉使いで自問してるあたり、既に傍から見ればかなり怪しい男に見えるのだが、『御主人様』などと呼ばれる事に比べれば大したことはない。
少なくとも、壱朗はそう思っていた。
そして、八つ当たりで白い帯を引っ張り、振り回し、木に叩きつけている内に帯が切れてしまうと――『怪力』を発現している以上は当たり前の結果なのだが――そこで自分のしている事に初めて気

付く。
「し、しまった。コレ、どうしよ……代わりなんか用意できるはずないのに……」
「もし、そこの君……」
壱朗は焦った。誰も居ないからと思い、やっていたはずなのに誰かに見られていたとは。冷静に考えると『時間跳躍』で過去に跳んだはず。今が一体、何時(いつ)なのかも分からないのに自分は何をやっていたのか、と壱朗は自問自答し始める。

そこでかけられた声を無視しているあたり、まだ冷静ではなかったのだろうという事はよく分かる。しかし、声をかけた方にはそんな事が分かる筈もなく、再度声をかけてきた。
「もし、君。先程から熱心な掛け声で、修練をしているようだが型が悪いのではないか？」
「そうだな鈴木君。帯を見るに、まだ学び始めてそにゃあに経っとらんちゅう事は察するが、いかんせん腕力に頼りすぎちょる。その細腕で、そこまでの力を出せるちゅう事は、才能はあるかもしれんがの」
その二人の発言で我に返った壱朗は、とにかくこの場は無難に過ごし、現状把握と生活基盤の確保だな、と思い至る。目の前の人には修練だという事で、千切れた帯の事は許してもらえるだろう。
「あ、その、見よう見まねだったので……」
「へぇ、見様見真似でその結果か、君の真似ているのはどこぞの古武術かぃ？」
「いや、鈴木君。武術自体が初めてなんじゃなかか？」
「は、はい。そちらの人の言う通り、武術をやった事はないです」
「にしゃあ(おぬしは)、武術の心得なしで帯をちぎりおるか……ふむ……」

目の前にいる、小柄な男は和装の出で立ちで、もう一人の青年は同じく和装なのに何故か下には襟のないYシャツの様なものを着て

いた。二人は壱朗の着ている服を珍しそうに見ている。――と壱朗は思っていたが、実は見ていたのは服ではなく体つきだったのだが――

鈴木と呼ばれた青年の服装の方が珍しいんじゃないか、などと思っていた。

「四郎殿？　また悪い癖が出ておりますな？」

「にしゃの先程迄の掛け声から察するに、何者（なにもん）かに負けたんじゃろう？」

「え、と。あの、そういう訳では」

「隠さんでもよか。鈴木君と先程の掛け声が気になってのぉ。力のこもった掛け声にじゃったけぇ、覗いてみたんじゃ。何度も負けておるのかの？　負け歴史ちゅう（と言っていた）とったじゃろうもん？」

鈴木と呼ばれた青年の言う事から察するに、四郎という名前の初老とまではいかないが、四十は超えているであろう男性と二人で、先程までの壱朗の一人芝居モドキを見ていた様だ。それに気付いた壱朗は、頭を抱え悶えそうになるのを、必死に堪える。

「余程、負けたのを気に病んでおるんじゃのぉ」

「会津でよく聞く掛け声から、会津あたりの方かと思いましたが、服や言葉遣いは東京の育ちでしょうか？　服も外国の物で揃えてある様ですし」

「文明開化と共に日本を離れた商家のもんかもしれんのう。それならば武術に覚えがなくとも仕方なかろ」

「あぁ……日本に戻ってみれば、講堂館の柔道の波にのまれてしまい、荒れている柔術家に暴力で負けた。と言ったところでしょうか。それで『ていやーていやー』と叫びながら修練に打ち込んでいたのでしょう」

目の前で次々と勝手に話が進んでいる上に、『ていやー』ではなく『ティア』だと思ったが、説明しろと言われても困る。だから、

黙ってそれを受け入れていた壱朗だったが、とりあえず聞くべき事を聞く事にする。
「あの、申し訳ないのですが、今は何年でしょうか」
「ん？　年号も知らないのか？　今は大正二年になったばかりだよ」
「いや、鈴木君。年の瀬からやっておったのではないかの？　年が明けた事に気付いておらんのじゃろう」
「なるほど。そういう事ですか。しかし、四郎殿のようですな。時間を忘れ修練にかまけるなど」
「鈴木君も言う様になったのぉ」
「ところで君、失礼だが名前は？」
壱朗はここで初めて、回答に真剣に悩んだ。万が一だが名前を何らかの記録に残されても困る……と。そしてあまり待たせるのもおかしいと、咄嗟に答える。
「『田中一郎』です」
「ふむ。ありふれた名前じゃの。特に聞いた事はなかが……」
「そうですね。この辺りでは農家の方はほぼ同じです。根掘り葉掘りすまないが、漢字はどのような？」
すまないと思うなら聞かないでほしい。壱朗はそう思ったが、傍から見れば自分が不審者なのだったと気付き、聞かれた事に答える。
「田んぼの田に、上中下の中、横一本の一に桃太郎の郎です」
もちろん出鱈目を。心の中で天国の曾祖父に「この『嘘』は必要悪なんだよ、かんべんな」などと言い訳しながら。しかし、この時代に壱朗の曾祖父は、産まれてすらいないだろうが、それに気付く事は無かった。
「そうか、漢字もありふれているね。あ、すまない。僕は鈴木義雄という。鈴木天眼という名前に聞き覚えは？　父なんだがね。四郎殿ほど有名ではないがね」
「そんな事なかろうもん。鈴木先生にゃぁ、世話になっちゅう者も多かろうて。
わしゃあ、西郷四郎ちゅうもんじゃ」

「西郷四郎……どこかで聞いた様な……」
「そりゃあ、君。知らない方がおかしいさ。聞いた事ないかい？『寄るな触るな西郷四郎、触ると恐いぞ西郷四郎』ってね。子供達でも知ってるよ。『山嵐の西郷四郎』の名はね」
「あぁ！　なる程。それで……」
「それも昔の事よ。わしも無敗ちゅうわけやないしの」

壱朗は、先程の自分を褒めてやりたかった。全く気付かなかったとはいえ、歴史上で、ある程度の記録に残っている人物の傍に、本名でいられる訳がない。まかり間違えて、何らかの記録に残ってしまったらどうするのか。

曾爺さんが『彼方』という名字を付ける時に、そういう人物が過去に居た事を調べ上げ、止めてしまったら、それだけで歴史が変わってしまう。それで自分の名前が変われば、どんな変化があるかも分からないのだ。

とにかく無難にこの人たちとは別れよう。そう思ったのだが。

「のう若いの。にしゃあ古流をやる気はなかか？」
西郷四郎殿がそんな事を仰って、ぶち壊しにして下さいました。

「どうしてでしょうか。自分は大した才能も……」
「そんな事はなか。にしゃあ、その力がある。嘉納先生の元で『柔よく剛を制す』と道を極めてみようとしたものの。古流の技、異人の恵まれた体格の前には『道』だけでは勝てん事も多かった。確かに『柔道』は素晴らしいもんじゃが、しかしそれが最強、最高という訳ではなか」
壱朗は困った。そして隣を見ると、鈴木青年も困っているように見える。何が起こっているのか。何でこんな話になっているのか、理解できなかった。
「不躾にすまんの、しかし、その力を見てしまうと心が抑えきれん

での。にしゃあ武術はしとらんと言っとったが、しとったら間違いなく、わしは試合を申し込んでおった。それ程までの『剛』じゃの。わしの『柔』でどこまで制する事ができるか試したかったわ」

「そんな事は……」

恐らく能力の『怪力』の力を見抜いているのだろう。いくら薄汚れているからと言って、流石に帯をちぎるのは不味かったようだ。全く折れてくれる気配が無さそうな西郷四郎に壱朗は困り果てる。

「隠すな。でないとわしが間抜けになる。いくつかの流派の師範と共に考えた事がある。『柔よく剛を制す』のではなく『柔剛一体』となればどうなるのかと。年を重ね、技を磨いたからこそ解る。今のわしの技が二十の頃に使えたら、とな」

「……素晴らしい技となる、でしょうね。四郎殿であればなおさら」

鈴木青年にも言っている事は解るのだろう。本当に素晴らしいと思っている表情をしている。壱朗にも分かった。柔道だろうが空手だろうが、同じ技なら体重の重い方が勝つ事がある。もちろん小柄な方が仕掛けやすい技もあり、一長一短なのだろうが。

だが、西郷四郎殿の言っているのはそういう事だけではない。恐らく体格に優れた者、――陸上選手には黒人の選手が多い様に――『怪力』を使える壱朗の体で、郷四郎並みの技を行えばどうなるのか。そういう事を言っているのだろう。

「しかし、私は此処に流れ着いたばかりです。身元も解らない者を徒ってくれる流派もないでしょう」

「一郎君と言ったの。やる気があるんなら、ある程度はわしが、後は古流をいくつか紹介しちゃる。君は幾つじゃ？」

「四郎殿、本気ですか？　長崎まで連れて行く気ですか？」

此処でも困った。壱朗は吸血鬼の真祖になった。今はもう、日が昇っているので日光は大丈夫なようだが、鏡に映らないとか、海を渡れないとかいう弱点をよく聞く。そして老けないとも。そのまま

の年齢を言う訳には、いかなかった。
「老けている、とよく言われますが、次で二十歳。今は十九です」
「僕と同じ年かい。確かに老け……いや、貫禄があるね。うん」
内心では『うるせぇよ。２８だよ。当たり前におっさんだよ』と思ったが、何も言わなかった。言えるはずもなかったが。
「よし、決まりじゃ。一郎君、これからよろしくの」
「四郎殿の我が儘には敵いませんね。一郎君。長崎までは一緒だからよろしくね」

壱朗は、今日何度目になるか分からない混乱の最中にあった。
『何で、一緒に行く事になってんの？　しかも長崎って。そう言えばここどこか聞いてない。跳ぶ前は大阪にいたはず。過去に跳んだだけなら此処は大阪？　いやいや、そういう事ではなくて。連れて行かれるのは決定事項なのか？』といった疑問が渦巻いていたが、目の前の二人はそんな自分の意思を無視し、『僕たちの宿に一旦行こう。そこで詳しい話も聞きたいしね』などと促され、ただ流されてついて行くのだった。

◇　◇　◇　◇

次の日、一緒の宿に泊まらせてもらった――もちろん壱朗はお金を持っていないので奢ってもらった――後、四郎達の用事が済んでから、買い物をした。その後、堺の港まで馬車に乗って移動した。

とにかく困ったのが移動だった。『怪力』の効果で身体能力に加え、体力まで増えていなかったら、絶対にこの時代に生きていけそうになかった。日程が迫っている為、馬車に乗ったのだが、そうで

なければ徒歩の予定だったらしい。県を超えるのに、徒歩で行くというのである。

壱朗の生きてきた西暦２１００年でも、車は空を――２０世紀に有名だった青い狸型ロボットの漫画で描かれる未来の様には――飛んでいなかった。しかし、個人所有の車や単車はあった。それが大正時代のはじまったばかりには、一般に普及していないのだ。基本はとにかく徒歩。これが何より辛かった。もちろん蒸気機関車や車もあったが、残念ながら縁はなく、四郎達の用事がある間と買い物の間はずっと徒歩だった。

「つまり、一郎君は異人に負けたせいで、親から勘当された。そういう訳だね」

「明確にそう言われた訳ではありません。が、家に戻る事も、有名になる事も避けたいです。特に家に戻るのは不可能なので、知られる訳にはいきませんので」

「わしはかまわんよ。……その気持ちも理解できるしの。一郎君が技を身につけた結果を、見せてくれればそれでええんじゃ」

「四郎殿はそれでいいかもしれませんが、私は父上に説明しなければなりませんので。それと一郎君。ウチの新聞社で、雑用をして頂きますからお忘れなく」

「はぁ。私は働けるのなら、それに越したことはないですが。無一文ですし……」

「とりあえず、わしの指導しておる柔道、弓道の道場に居候という事になる」

「戸籍が困りそうですが……まぁ、田舎の方で隠されていたと言って、何とかしましょう。父の『鈴木天眼』は衆議院議員にもなった事がありますので、伝手でなんとかなるでしょう」

壱朗は複雑な心境だった。記録に残りそうな所からは、離れなければいけないのではあるが、しかし生きていく当てもない。

買い物の途中で目立ちたくないからと、着ている服の出所については嘘をついて、服を全て売り払い――これが実に良い金額になった――新しく和装を整えた。

そんな訳で三名は今、長崎に向かう船の上で会話をしている。船旅は壱朗にとって窮屈な物であったが、四郎の語る『道と術』の理論に、壱朗は漫画や小説の知識からの机上の空論で相手をし、それが理解できない鈴木青年が身の上話を切り出した、という状況だ。

「しかし、にしゃの事を見くびっておったようじゃな。異国へ渡ればその様な考えの武術があるのか？」

「どうでしょうか。大陸の武術はもっと奥が深いと聞いていますが」

「四郎殿の御実家の方にも確か、御留流が残っていると聞いていますが、薩摩や出羽の方にもある様ですね。行ってみるのでしたら、古流の師範代あたりへの紹介状が要りますね」

「いや、そこまで学べるかどうかも、分かりませんし……」

「まずは最低の基礎からじゃの。奥義に近い理想論は持っておっても、実行できる土台がなけりゃ、どないもなりゃせんじゃろ」

壱朗が四郎と話して気付いた事は、確かに漫画や小説等で語られる武術の技は、無理があるものもあるが、実は日々の修練と、それを体現できる先駆者がいれば、けして不可能なものではない、という事だ。

これである意味、スポーツに特化してしまう過程で、失われてしまった技や概念には力がある物が多い、という事がよく分かる。小説や漫画に『奥義』やら『秘伝』などが出てくるが、実在のそういったモノは存在したが壱朗の居た未来には伝わっていない。もしくは、伝わっているのだが公開されていない。そういう事なのだろう。そして壱朗は、それを見てみたいと思ってしまっていた。

◇　◇　◇　◇

「一郎、行くのかの？」
「はい、四郎先生。三船師範の元へ向かいます」
「恐らく、次はもうないじゃろ。にしゃには確かに見せてもらったぞ。『古流』にある『術』や『道』では見れなかった可能性を」
「私こそ四郎先生には、数々の技を見せて頂きました。後、この古流の噂や記録。これを辿ってみようと思います。この先に武の到達点が見れるよう、祈っていて下さい」

四郎に連れられたあの日から、十年が経っていた。四郎の指示で基礎を学んだが、吸血鬼である彼にはあまり必要がなかった。ある条件を満たせば、覚えが良すぎるのである。

条件とは、『死の危険』が伴う事であった。実際に死ぬのではなく、壱朗が死ぬかも知れないと、思い知らされる状況で覚えた事は、血が忘れなかった。

「にしゃは危なっかしいが、覚えは悪くない。やり方は悪いが、道場破りのつもりで死にに行けば、いつかは辿り着くじゃろう」

「はい。私の事情（吸血鬼だという事）を知って、それでもなお、受け入れてくれた四郎先生とだからこそ、出来た稽古でした。一生忘れません」

受け身一つとってもそうだった。四郎が殺す気で、頭から落ちかねない技を放てば、嫌でも受け身を取った。

それを『血』は覚えており、次からは同じ技は効かなくなったし、自分でも再現できた。ヘタレな怖がりの、壱朗ならではの習得法だったのかもしれない。

吸血鬼である事に慢心して、のぼせ上がって命の危険を感じなくなれば、習得に時間がかかっていたかもしれない。

そして何よりも、吸血鬼である事がばれても、受け入れてくれた四郎とでなければ出来ない事だった。それ故に壱朗は四郎に感謝していた。

「わしの事たぁ忘れても構わん。だが可能性を辿り、その神髄に辿り着いたら、それだけは志高き者に伝えてくれ」

「はい。必ず、その神髄だけは後の世に残します」

その願いが、壱朗の聞いた四郎の最後の声になった。

それから壱朗は日本全国を回り、剣術、柔術、居合、弓術、唐手、山の様な武術の形を見て、一つ一つ手に入れていく事になる。

しかし、そのさなか、第一次世界大戦における徴兵でかなりの口伝、秘伝が失われている事を知り、戦争に対する嫌悪を抱いた。口伝や秘伝が失われる前へと跳んで、回収したいという欲望を抑える事に労力を割く事になった。

そして、壱朗は西暦１９３０年に三船師範が、隅落しを完成させた事をきっかけにしてアメリカへと渡る。それは完成を待っていた

のではなく、ただ三船師範の試合、その場に集まった高段者が古流の面影のない、スポーツの柔道を目指したものばかりだった事が理由だった。スポーツとしての強さは維持していたが、神髄を究める意思が見えなかったからである。

もちろん、日本国内でそれを目指す流派もあったが、そのほとんどとは接触済みで、海外に渡った柔術家を追いかける為にアメリカへと渡ったのである。

のちに、壱朗はこの技術をティアに教えてしまう。そしてその日から、ティアを苛めた後には必ずと言っていい程、お仕置きと称して逆関節を決められる日々が来るのだが、渡米する段階の壱朗はそんな未来は知る由もなかった。

第１１話　思惑（前書き）

プロローグの第０１話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第１１話　思惑

しな垂れかかって来る日巫女を脇にどけながら、壱朗はティアの煎れてくれた緑茶を飲み、煎餅をかじっていた。
「日本で能力の使い方に慣れた後は、最初にアメリカに渡った。その時から『血の熟成』の研究を始めたんだよ。その研究がおおよそ形になった後、ありったけの力を使って、アメリカ大陸で過去に遡（さかのぼ）った」
「……はぁ」
ティアはどうにも意図が分からない、といった顔をしている。
「その後で『酋長』に出会ったんだ。出会ったのは結構経ってからだったけどな。西暦１９００年あたりまであの国にいたんだが、西暦１５００年くらいからだったか？
白人が移民してきてな。その中に三百歳くらいの真祖のガキがいたんだ。そのガキがな、調子に乗って白人主導の国を作り始めたんだよ。知っての通り、歴史には携わる訳にはいかなかったからな、そのままアメリカ大陸を出た」
忌々しい、そんな表情を隠す事なく言う壱朗に、当時の悲惨さが伺える。
「そうなんですか……」
「ただ、先住民族を排除しようとする、白人系の奴等のやり方に頭に来てな。つい、手を貸しちまった。それが狼の群れと暮らしてた、『酋長』の部族だった」
ティアはそれを聞き、安堵する。歴史への干渉はしないと言いつつ、人助けをする。そんな壱朗の優しさが、ティアは大好きだった。
「そういえば壱朗様は、たまに人助けしてましたよね。その後に必ず『歴史が、歴史が』って言いながら、唸って後悔されてましたが

……」

「旦那はんらしおすなぁ。ウチも阿呆な眷属から、助けておくれやすぅ」

日巫女は話の合間を読んでは、誘惑しようと壱朗の胸元に躰を寄せる。

「日巫女様！　いちいち、壱朗様にしな垂れかかるのはやめて下さい！」

そう言ってティアは、日巫女を壱朗から引き剥がし、二人の間に腰を下ろした。

「ティアはん、会合の終わった翌日迄は、好きにさせてくれるお約束やおへんか」

「えぇ。そうでしたね。少し違いますが似たような『約束』はしましたね」

不満そうな日巫女にティアは笑顔で肯定する。

「ほんなら……『ですが』……ぇ？」

「約束では、『４月１７日迄は、日巫女様のお好きな様にして頂いて構わない』というものでした。会合の翌日ではありません」

「……まさかっ。旦那はんっ！　ウチの事、騙しはったんかいな！　このっ。旦那はんの変態っ。いけずぅ！」

ティアが壱朗との間にいる為、日巫女は煎餅を壱朗に投げつける。壱朗はそんな日巫女に苦笑しながら、飛んでくる煎餅を受け止め、籠へ戻している。

壱朗は会合が始まって、直ぐに会議場を三日後に跳ばした。つまり、今は４月１６日に会合が行われた三日後、４月１９日なのである。

壱朗以外はティアも日巫女も、約束の日時の事に気付いていなかったが、あまりにもティアの機嫌が悪くなるので、壱朗がこっそり気付かせるや否や、ティアは鬼の首を取ったかの様に、日巫女を妨害し始めたのである。

「パパ！　ママ達も！　見て！　猫ちゃん！」
どこで見つけたのか、猫を抱えて走ってくるミーシャ。
「お、ミーシャ。懐かれてるな。でも気をつけろ、猫は気まぐれだからな。ちょっとでも嫌になると逃げ出すぞ？」
「一緒にいられないの？」
三毛猫を抱いている、ミーシャの表情が曇る。
「飼うなら、日巫女の神社に預ける事になるなぁ」
「ごめんね、日巫女様の所には長くは居ないから、置いて行く事になっちゃうね」
ミーシャは、猫がどういった動物なのかも知らなかった。
「そっかぁ……」
ミーシャの精神年齢は幼い。
吸血鬼となり、無意識に『不老』を発動した事で体が成長せず、気味が悪いと両親に病院へ放り込まれた。その後はずっと幽閉状態で暮らしていたし、ラマルティーヌ卿に捕まってからも、それは変わらなかった。
故に、付近には桜が満開のこの茶屋も、壱朗達と食べている和菓子もお茶も、猫を抱いているミーシャにとっては、新鮮で楽しい事だらけだった。そんな些細な事が嬉しく思えてしまう程、ミーシャの今迄の生活がどれだけ暗く、そして重い人生だったのかが、他の三人には解ってしまう。
だからこそミーシャに同情してしまい、ある事に気付けなかった。それを後悔するのは、数日後の事となる。

茶屋には今、従業員はいない。此処は日巫女専用のお茶飲み場所であり、迷い込んだ一般人の対策に、茶屋の形をとっているだけだ。普段はずっと、日巫女の眷属が暇つぶしに営業している。
ただ、日巫女の眷族はまだ会議場に閉じ込められている為、誰も

居ないだけだ。
会議場を出てからの四人は、壱朗作の『血の熟成』の力を抑える『符』を身に付けて、ずっと茶屋にいた。それに気付かない日巫女の眷族は、会場を出たら京都からは逃げただろうと、全国へと散って行くだろう。
冷静さを欠いていると、意外と気付かないのは人間も吸血鬼も同じ様だ。
過去の日巫女の逃亡癖が、そうさせるのかも知れないが。

「パパはお札が無いと、いつも怖いパパなの？」
ミーシャは可愛らしく首を傾げて、こちらを覗きこんでいる。
「そういうわけじゃ無いさ。でも今は隠れんぼの最中なんだよ。見つけた人だけ、美味しいお茶とお菓子と桜が楽しめる。そういうお遊びなんだ」
「せやからミーシャちゃんも、腕のお札、破がしたらあきまへんぇ。そないな事したらミーシャちゃんが鬼になって、ウチらが逃げてしまいますぇ？」
「やだ。パパとママ達と一緒にいる！　破がさないよ」
日巫女の言葉に、ミーシャは札を張った腕を背中に隠し、守っている。

壱朗は日巫女の言い方は子供心をくすぐる、いい言い方だと思っていた。これでミーシャは、当分は札を身に付けているだろう。お札そのものでは見た目が悪い。何か考えてあげなければ、と壱朗は頭を悩ませていた。
しかし、ティアは日巫女の意図に気付いていた。ミーシャに『ママ達と一緒にいる』と言わせたかっただけなのだと。壱朗に聞こえる様に、ママ『達』と。

「しかし、これで気づく人いるんでしょうか……これ、壱朗様の渾

身の『符』と同じですよね？」
「『酋長』は結界にすら気付いたじゃねぇか。一人一枚だし、大丈夫だろ」
壱朗は楽観的だが、実は自身を過小評価していた。この状態で気付けるのは、『魔血晶』を背負う真祖か日巫女の眷属の血技、後は偶然ぐらいであった。
「何枚も貼れるの？」
「えぇ。そうすれば更に解りにくくなるのよ。」
「じゃ、ミーシャもっと貼る！」
頂戴と両手を前に出し、アピールするミーシャ。
「だ、め。それはズルっこだぞ。一枚で我慢しなさい」
「うぅ～」
壱朗にあっさりと断られ、ミーシャは頬を膨らまして、拗ねる様に壱朗を睨む。
壱朗はそんなミーシャの頭を撫でてやった。実は壱朗は本気でそう思っている訳ではない。ただ、札の効果は貼られた者の魔力を使用して発動している為、生りたての吸血鬼に負担がどれだけあるのかが、分からないのだ。

『符』の効果は、体の表面から十数ｃｍより外側に、魔力（血の力）を出さない様にするだけだ。おかげで魔力の残滓が、体表を循環し治癒も高める効果があるが、目視されれば気付かれる。壱朗が会議場で力を見せない為に張っていた結界とは、完全な別物だった。
一定以上強くなれば、自然とその強さを隠すのも上手くなる。それは人間も吸血鬼も変わらない。自分の力を誇示するなど、阿呆のする事だと思っている者は多い。特に真祖や二世はそうだ。
背に『魔血晶』を背負えば、更にその傾向は強くなる。格の違いを突きつける為に見せる者も居るようだが、普通はしない。何故なら三世以上は血が濃い為、上位者の存在は見れば解る。『血』が上位者の存在に畏怖を感じ、敬意を表する様に騒ぐので、見せる必要

もない。

『魔血晶』を背負う吸血鬼からすれば、四世以降の者などは人間と大差ない存在だ。血の力が弱く、解り難いからだ。千年以上を生きた真祖や二世なら、三世すら同じ吸血鬼として認識していない場合もある。

恐らく今、京都タワーなど高い建物の上には、挨拶に来ようとする者達が、壱朗達を視認しようと登っているだろう。

どんなに魔力が感じられなくても、『見れば解る』筈である。

その為に壱朗は、普段の生活ならば完全に消している滲み出る魔力の残滓、それを今は抑えていなかった。その上で、見つけやすいように見晴らしと景色の良い場所で、お茶を飲んでいるのだから。

◇　◇　◇　◇

久しぶりの和菓子を楽しみながら、壱朗は日巫女に聞きたかった本題へと話を進める。

「日巫女、お前は背に幾つ背負ってる？」

「旦那はん、そういうんは寝屋で聞いておくれやす。旦那はんからすれば、対した事おまはんやしれまへんけど、ウチはこれでも祇園で最も高いお華やった女（おなご）どすぇ。安ぅ見てもぉては困りますぇ？」

日巫女は茶化すが、壱朗には通じなかった。

「……死ぬ気か？」

「……旦那はん達は特別な『血技』をお持ちやから、知らはらへんまま、乗り越えはったんかと思てましたけど……知ってはったんどすなぁ……」

「壱朗様？　なんのお話ですか？」

ティアは知らない。本能で気付いているかも知れないが、はっきりと自分の中で認識していない。

「それに答える前に旦那はん、教えておくれやす。ティアはんの四つ目創りはった時、その時はどないしはったん？」
「時空間捕縛結界で棺ごと眠らせた。試作品の結界符だったから、内心ではヒヤヒヤしていたがな」
「え？　それって、私の『魔血晶』の創生に失敗しかけた時の事ですよね？」
「ぅ？」
　ミーシャには話の内容も単語の意味も、分からないのも無理はない。不思議そうにしていたが、理解するのを諦めたのか、猫をくすぐる作業に戻っていった。
「旦那はんの時はどないしはったんどす？」
「前半二回は過去に跳んだせいかと思い、気力で耐えた。後半二回はティアにとった方法と同じ、みたいなものだな。二回耐える迄はティアと会えてすらいなかったからな。ティアに会う為に死ぬ気で耐えた」
「これに二回も耐えはったんどすか。さすが旦那はんどすなぁ……それにしても。ほんに、ティアはんがけなるいわぁ……」
「え、と？　あれ？　何のお話なんです？」
　ティアも気付いている癖に、未だに認めるのが嫌なのだろう。思い出したく無いと拒否しているのだけかも知れない。
「ウチも、そこまで思うてもらえるんなら、頑張ってみてもええんやもしれまへんけどなぁ……」
　その日巫女の表情に、何か危ないものを読み取った壱朗は、驚きに目を見開くと同時に、ティアを退かし日巫女の身体を抱き寄せる。そして、元々肩にかろうじて引っかかっていた程度の着物を、後ろ襟を掴んで引き下ろすと肌を晒させる。
「旦那はん、こないな昼間から屋外でやなんて、ウチ恥ずかしおすがな」
「茶化すな。場合によっちゃ責任はとってやる」
「い、い、い、壱朗様っ！　一体何をっ！」

「おかしいとは思ってたんだ。舞妓姿なら、背中が結構見えてても、おかしくなかったのにな。お前、胸元はえらく見せてるくせに、背中を隠してたろ」

「旦那はん。遊びなれてはるんどすか？　御華遊びなんかしてないかと思うてましたけど……まぁ、ウチかて本気で隠せるとは、思てやしまへんでしたけど」

上半身を裸にされた日巫女は、袖から腕を抜いて壱朗の首に抱きつき、ワザとその豊かな、下着も付けていない胸を押しつけている。ティアはそれを止めさせようとしたのだが、そんな日巫女をの態度を無視し、背中を見る壱朗の顔が真剣そのものだった為、同じ様に黙って背中を見た。

もちろん、ティアは日巫女の背中など見た事は無かったが、ちゃんと見る事でその異常さに気が付いた。

背中だけ、異様に汗をかいている。それはまだ可愛い方だった。日巫女の背中には四つの『魔血晶』がある、そして魔方陣も浮かび上がっている。

異常なのは、その『Ｂｌａｃｋ（漆黒の）Ｔｅｔｒａｇｏｎ（四角魔血晶）』の魔方陣が血管や神経のように蠢（うごめ）き、明滅しているのだ。

「こ、これは……壱朗様っ。もしかしてっ！」

「その通り。ティアの時と同じだな。そして俺が四回経験した事のあるものだ。俺はこれを自殺陣病（アポトーシス）と呼んでる。ティアの時は魔血晶の創生に失敗したとばかり思っていたが、自分の十二個目を創った時に気付いた。コレは予定調和だと」

「自殺因子（アポトーシス）……どすか。旦那はん、上手い事言いはりますなぁ……」

ティアも今の日巫女の状態の苦しさは知っている。何しろ、約千年前に自分も四つ目を創ってもらった直後に経験した。その時はティアは創生の失敗だと思っていたし、壱朗の符で乗り切ったので、自分の背中を見た訳では無かった。だから、今の壱朗の確証がなければ、すぐには気付かなかっただろう。

「旦那はんも知ってはるんやったら、話しは早ぉおすなぁ……実は、もうそないに持ちまへん。せやから、旦那はんにはウチのトコ(眷族)の子らをお願いしたかったんどす。お詫び、ゆう訳やおまへんけど……ウチの事、好きにしてくれはってよろしおすさかい。なにとぞ、引き受けたってもらえやしまへんやろか……」

「そんな理由で、女を抱ける男だと思ってるのか？」

「思てやしまへん。だから、あんじょう抱いて貰える様に、気ぃつこうたのに。旦那はんがウチの事騙しはるから、やわ(無駄に)になってもうたんやおへんか」

「……そうか」

「あんまり女(おなご)に恥かかすもんやおまへんぇ？　ココ迄言わしたんどす。男らしゅう、責任とってくれはっても、ええんやおまへんか？」

日巫女眼は既に笑っておらず、真剣そのものだった。

壱朗はティアをみる。ティアからは日巫女に聞こえない様に、血族間通話で話しかけられる。

『眷属をお引き受けになられますか？』

『それはリスクが高すぎると思う。俺の血技を広める事になっちまう』

『では、死ぬつもりの日巫女様を無理矢理生かすか、死なせて、その眷属を放置するか。ですよね』

壱朗の答えは解っているのだろう。壱朗がティアの強さに甘えているだけだった。

『……そうだな』

『いいですよ。一人ぐらい愛人が増えても。

他に増やさないって、眷属も作らないって「約束」してくれるなら、ですけど。

どうします？』

『……すまん』

ティアは、壱朗が放っておけない事は分かっていた。自分の時も思い出したく無いくらい、生きる事を諦めてしまう様な感覚だったのだ。いつの段階で、日巫女がこの状態になったのかは知らない。ティアの時は創生して二日で同じ状態になり、発狂しかけて壱朗に眠らされた後、気付いたら収まっていた。

日巫女はそれを耐え、眷属を壱朗に託す為に今日まで我慢した。壱朗の表情を見れば、自分の体験を思い出せば、それがどれだけ辛いものか嫌でもはっきりと解る。

「旦那はん、そないな情けない顔せんとっておくれやし。最後に抱かれる男が、そないな顔してはったら、ウチの華もしぼんでしまいますぇ？」

茶化す日巫女に壱朗は本気の眼で言い返す。

「俺は、俺の我が儘でお前を生かす。許せとは言わん。責任ぐらいとってやる」

「やめておくれやす、ウチはもうかましまへんのや。ウチの子らだけ見てやっておくれやす」

壱朗はそれ以上説得をする事を諦める。そして、血の力を抑えている符を剥がす事も煩わしいと、力を開放する事で符を弾き飛ばす。

「ティア、ミーシャと一緒に此処にいろ。お前を見つけた者がいたら、すぐに戻るからと伝えておけ。多分来るなら『酋長』が最初にくると思うから、困ったら『酋長』に相談しろ。」

「はい。お帰りをお待ちしています」

ティアはもう、何も言うつもりはなかった。

「旦那はん何する気ぃ？　やめてんか。ウチの事はもぉ、ほっといておくれやす」

日巫女は壱朗が何をする気なのかが分からず、拒絶しようとする。壱朗の魔力の開放に当てられ、崩れかかっていた結い上げられた髪は、日巫女が首を振る事で完全に解けてしまう。

「うるさい。だまれ。時間旅行に連れてってやる。Ｔレックスとか

見ものだぞ？」
そんな綺麗な黒髪を、器用に胸元に垂らしてやりながら、無茶を言う壱朗。
「は！？　ほんまに何しはるつもりやのん！？　やめて、はなしておくれやす！」
日巫女の叫びも虚しく、壱朗は日巫女を抱えたまま、その場から消え去った。

実はティアの考えでは壱朗の為にも、日巫女を失う訳にはいかなかった。真祖が眷属にはなれないので、壱朗が拒めば愛人が増える事は無い。だから日巫女さえ抱かれる事を諦めてくれれば、それで良かった。そして、目的に協力してくれれば問題無かったのだ。

だが、死んでしまうというのは困る。
どんなに時間がかかっても、日巫女の協力を得て知りたい事があったのだ。

ティアが二世以降は『血技』を増やせると知った時、ティアは真祖より二世の方が強くなるのでは？　と考えたが、それはある意味間違いだった。
なぜなら『血技』は両刃の剣でもあった。『血技』を使用できる吸血鬼は、同時に『血技』一つにつき一つ、絶対的な弱点が発生する。
全ての吸血鬼に適用される弱点は『聖水を使い制作された武器による心臓の破壊』これだけである。ただ心臓を破壊しても意味はない。
それに加え『日光』や『銀』、『ニンニク』など『血技』の数だけ弱点が増える。『血技』の強さにも比例する。
既に真祖が死滅した『日光』が弱点だった血族の死に様が、教会所蔵の古い文献の記録に残っている。

その真祖は『日光』を体積と同質量浴びる事で完全に死滅した。
その二世は『日光』を体積と同質量浴びる事で灰になり、灰の中に残っていた心臓を聖水を使い制作された武器により破壊されて死滅した。
その三世は『日光』を浴びて体が焼け爛れ、二四時間浴び続けた後、灰になり、灰の中に残っていた心臓を聖水を使い制作された武器により破壊されて死滅した。
その四世は『日光』を浴びて体の動きが極端に鈍くなり、捕縛されて心臓を聖水を使い制作された武器により破壊されて死滅した。

弱点についての一番の問題は、ティアも壱朗も弱点が分からないという事だ。二人は同じ血技を持つ眷族が居ない為、血技を持つ事で生まれる弱点が、なんなのかは分からない。最悪、他の吸血鬼に頼み、ティア自身が実験台となって、調べてもらう必要があるかもしれなかった。

しかし、日巫女の血族の血技は『予知』であった。眷属はそこから派生したものが多く、眷属一人一人種類は違えど『本来知りえない情報を知る事ができる』というものらしい。
どちらにしろ、日巫女の血族は知ろうと思えば知る事ができるのだから、隠しても仕方ない。開き直って聞いてしまう方が、手っ取り早いとティアは考えていた。
おかげで、壱朗が真祖になる時期を『未来予知』で引き当て、ラマルティーヌ卿の血族に知られてしまったのだろう。
そして、日巫女は恐らく壱朗が眷族を託すにふさわしいかを見定めるべく、ラマルティーヌ卿の血族に情報を流したのだ。これらの予測に関しては壱朗と同意見だった。
その為、今の段階で日巫女に亡くなられると困るのだ。最悪自分が実験台になるが、壱朗がそれを許すとは思えない。
だから、日巫女には生きていてもらわないといけなかったのであ

る。

ティアは『あーあ。夜の回数減るなぁ……ミーシャもきっと何百年後には、そういう事、言い出すだろぉなぁ……』と独占欲丸出しの事を考えながら、猫と戯れる子供にしか見えない少女に、何とも言えない意味不明な視線を送るのだった。

第１２話　克服（前書き）

プロローグの第０１話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第12話　克服

壱朗は日巫女を抱え、いつか(何時代)分からないほど大昔に来ていた。日巫女さえ落ち着けばすぐにあの時代(何時代)に戻るのだ。自分と日巫女が存在しなかった過去なら、いつでも良かった。

壱朗はティアと連れ立ち、結界が完成した後も、自分が旅立った直後に跳んで戻るという方法を、とらなかった。

未来に跳べなかった訳ではない。ティアに自分が会っているから、送り届ける必要があったという理由もあったが、本当の理由は『魔血晶』十六個目の、四回目の二千年の時期を、ティアに見られずに眠って過ごす為だった。

四度目の自殺陣病(アポトーシス)を乗り切る為に。

それに耐える自分を見せたくは無かったので、専用の冬眠墓地を作ったのだ。

そして、今の日巫女にも壱朗の時と同じく、恐らく結界で因子を抑え込むだけでは足りないだろう。生きている実感が必要になる筈だった。壱朗の二回目までの時は、自分に痛みを与えたり、お腹を満たしたりした。その実感とティアへの想いで耐えきった。三回目、四回目には、符術もそれなりに使えたので、生きている実感を感じていた記憶を符で呼び覚まし、エンドレスで頭に流し続けた。どの時もそうして誤魔化している間に、抑え込んだのだ。

「旦那はん、こないなトコ連れてきはっても、どないもならしまへんぇ」

「ふん。俺を甘くみるなよ。八千年で計四回も経験させられたんだ、何とかするさ。だが、ヤリ方は好きにさせて貰うぞ……」

「え？　あ、ちょっ。そないなトコっ。んっ、いきなり触らはるやなんて……」

日巫女は慌てて、壱朗の手を抑えにかかる。しかし、壱朗の手から溢れる魔力の強さに、日巫女のそこは無理矢理、感度が引き上げられ、快楽の塊のような刺激がとめどなく襲いかかる。触れられているだけで、である。

「何だ。さっきは好きにしていいって、言ってただろうが」

「言うたけど、もぉっ、言うたけどぉ～。そっれはっ、ウチのっ、あぁあっ、子らを、あぁっ、もぉっ……んぅっ。あぁっ……あきまへん。あぁっ。そないにしたら、あきまへんってばぁ……」

そのまま壱朗は、日巫女の腰まである艶やかな黒髪をどけて、首筋に唇を這わせる。それを手始めに身体を隅々まで触れていきながら、所々に魔力の塊を流し込んでいくと、何処に持っていたのか、人が四人は入れそうな黒い柩を取り出した。

そこに日巫女を放り込み、自分も入ると蓋をしてしまう。

すると柩の足元から大量の札が溢れ、柩が見えなくなる勢いで張り付いていく。すぐに柩は札に完全に覆われて、真っ白になった。

札に完全に覆われる迄は漏れ聞こえていた、日巫女の押し殺した様な声も、耐えきれずに上げてしまった艶やかな嬌声も、何一つ柩からは聴こえなくなった。

◇　◇　◇　◇

壱朗は巨大な鉄球が連続して、ビルに叩きつけられる様な音で目を覚ました。

あれからどの位、時間が経ったのかは分からない。
延々と続く音に嫌気がさしてきた頃、隣にいる日巫女も目を覚ました様だ。

「旦那はん、何ですのん？　この音。逢瀬の最中で邪魔するやなんて野暮やわぁ」
「案外、本気でTレックスかもな。まぁ、この柩に居れば問題ない。東京スカイツリーから落としても壊れんぞ、こいつは」
「あれからどれぐらい経ったんやろか……」
「さあな。時計をみれば解るが……おぃ。何すんだ」
「嫌やわ、旦那はん。そう言う事を、女(おなご)の口から言わすんが趣味なんどすか？
あんまりええ趣味やとは言えまへんなぁ……」
壱朗自身を撫で回しながら、日巫女はそんな事を言い出す。
「言わすのが好きだと言う訳ではないが、状況次第では悪くは……ってそういう事じゃなく。もう大丈夫なのか？」
「大丈夫おすなぁ。もうあの時でかなりぎりぎりやったさかい、そないに時間かからんかったんやろか」
「それはそうかもな。ほら、背中向けろ。見えないだろ」
そう言いながら、日巫女に背を向けさせる。
「ぁん。もぅ、ちょっとは、優(やさ)しゅうしておくれやす」
日巫女の背中には、既に魔方陣は浮き出ておらず、一安心と言ったところだった。後は再発がないか確認し、数日問題ないのであれば、それで乗り切ったという事の筈だ。

そして、日巫女には黙ったまま、右手で『魔血晶』に触れ、記憶を探る。

「あっ、あかん。いくら旦那はんやいうたかて、女(おなご)の秘密(記憶)を勝手に……あぁん、もぉっそういう時だけ、そんな触り方するっ、やっな

んてっ、旦那っ、はんのっ、あぁあぁっ、すけべぇ、あっあっぁっ、いけずぅ！」

日巫女に生きている実感を無理矢理感じさせる。それは眠ってしまう前まで触れていた時と同じように、限界まで日巫女の快楽を引きずり出す。

「ちゃんと知っておかないとな。自分の女の過去ぐらいは。そう思うだろ？」

後ろから抱きしめられ、前に回された左手にソコを刺激され、抵抗できない日巫女は、壱朗に文句を言い続ける。

「もぉっ。都合のええ事、あぁっ、言わっはってからにっ。後でっ。っっっあぁっ。旦那、っはんっのも。見せてっあっ、あっ、あっ、んぅ。もらいますぇっっ。……はぁっ」

日巫女は駆けあがってくる快楽に抗えず、背を反らす。後ろの壱朗の耳元で、心地よい吐息と共に嬌声を上げる。そんな日巫女に意地悪い笑顔で答える壱朗。

「気が向いたらな」

「ずるぃわぁ。そんなんっ、ぁっあぁあぁあっ、あっ、あっ、うぅん」

耳元で囁かれた後、耳を甘く嬲（なぶ）られ、日巫女は更に追い詰められていく。

日巫女は、血を吸う際に快楽を与える事はあっても、与えられた経験は少ない。

しかも今は、かなり弱っている。

そんな日巫女に、壱朗の攻めは耐えられる筈もなかった。

「あっあああ、あぁっ――――うぅんっ――あぁ――っ」

壱朗はそんな日巫女を他所に、見たかった物が見つかり、そこで口と手を止める。そして記憶に意識を集中し考え始める。

――やはり、日巫女は吸血鬼の弱点を見れる。それなりに相手の情報が必要な様だが、可能な様だ。ふむ、コレはラマルティーヌの弱点を見ている時か、あいつは大地？　埋めればいいという事か。あぁ、水だから大地に吸収されて形が保てなくなる様なイメージか。後は……日巫女は火か。焼き尽くす、か。可能なようで難しいな。吸血鬼に限らず人間もだが、肉体というのは案外燃えきらない、跡形もなく焼き尽くす火力など短時間では簡単に起こせないな。火葬が良い例だ。それなりに時間がかかるからな。しかも、黙って燃やされている訳がないのだ。その間に反撃されない訳がないし、逃亡されるだろうしな。俺たちの弱点も、そういうものなら良いんだが……

「……はんっ……もうっ……こらっ！」

「んん？」

日巫女は壱朗を拗ねた様な目で睨む。

「もぉっ！　こないな事したまま、他の事に集中せんとって。旦那はん、おかしいんちゃう？」

壱朗は咥えたままだった唇を離して苦笑し、見たものとは関係ない事を話す。

「記憶を見て気付いたんだが、花魁や舞妓と色々やってたんだな」

「花魁やった頃は、吉野太夫って呼ばれた事もあるぇ」

「それで言葉が混じってるんだな。俺の大阪弁と標準語みたいなものか」

「せやなぁ。全部、京訛りで喋らはる人には同じ様に返しますな。そうやない時は、相手はんがわかる範囲迄しか、訛りでは喋らへんなぁ。旦那はんもせやろ？　所々で関西弁が出てますぇ？」

そういえば、と会社勤めの頃を思い出そうとする壱朗。

「……ふむ」

「……だから、旦那はん」

「ん？」
「そないなトコに手ぇ、入れたままにせんとってって。恥ずかしがればええのんか、怒りゃええのんかわからしまへんわ……」
言われて気付き、抜いて触れる場所をずらす。だが壱朗が触るのをやめないのは、それを望んでいると感じるからだ。
案の定、日巫女はそのまま身体の向きを変え、胸に頭をのせてくるので黙って引き寄せると『ぁん』と可愛らしく囁き、体重をかけてくる。
「――すまんな。
……一応、経験から言うと再発がある場合があるが、数日問題ないのであれば、それで乗り切ったという事の筈だ。あれから一日半は経ってるな」
「ほんなら、あと数日は旦那はんを独り占めできますなぁ。外でれますのん？
出れるんなら水浴びしたいわぁ、今のままじゃ色々困りますよって」
日巫女のお腹辺りが所々、血が張り付いて乾燥したかのようにカサカサになっている。おもに壱朗のせいだった為、壱朗は責任を感じたが一応、忠告はする。
「Tレックスとかいたら大変だぞ？　弱らせるのに苦労したんだあいつは」
「旦那はん……生身のままで怪獣と闘わはったんどすか……無茶しはりますなぁ……超の星のお人みたいに、巨大化しはるんちゃいますのん？　……三分だけ」
「いや……」
Tレックスは怪獣ではない。そう思いながらも、当時を思い出す。
――あの時は好きで挑んだ訳ではない。過去に跳んだりするのに必要な条件を模索していたら、テストで時代の認識などを間違えて、

誤ってTレックスの前に跳んだのだ。過去のアメリカ大陸にそんなものが居ると知っていたら、研究の為にアメリカには行かず、ロシアに行っただろう。

しかし『怪力』のおかげで力はこちらの方があるのだが、いかんせん身体の大きさが違う。『霧化』で牙を避けながら頭上に移動し、踵落としで頭にダメージを与えて、動きが鈍った内に元の時代へと逃げ出したのだ。のたうち回っていた様だが生きていたので、問題ないだろう。

――――ユーラシア大陸北部に、Tレックスがいなかったという保証はないのだが、今の壱朗もそんな知識はない。しかも、はるか未来でそのTレックスの骨が発掘され、壱朗の砕いた頭の骨が複雑骨折になっており、発掘した考古学者たちにパズルをさせる事になった事は、誰も知らない。

とりあえずその事は忘れ、日巫女の望みをかなえるべく棺を開ける。

「む、えらく眩しいし、暑いな……」

「棺の中の方が快適やなんて、ウチ(吸血鬼)らしいけど、けったいな話どすなぁ……」

実は太古には現代の人間では耐えられない、ウィルス性の病原菌などが多数存在する。するのだが、吸血鬼のＤＮＡや細胞は、むしろそれ自身が吸血鬼(ヴァンパイア)ウィルスと言って差し支えがない代物であり、そんな病原菌ごときに負ける筈もなかった。

そして壱朗は空気を読んで、あえて――気付いてはいたが日巫女が騒いでも面倒なので――黙っていたが棺の周辺の地面には、そのあたりを縄張りにしているのか、マンモスのモノかと思われる足跡が山ほど残っていた。

とりあえず、地面にめり込んだ棺を浮かせ、そのまま『浮遊移動』で飛んで川か湖を探す。付近には見つからず、海だと意味がないので更に上昇し、琵琶湖の原型を探す。

「えろう高いトコまで上がるんどすなぁ」

「海水の塩水で体を流したいか？　どうせなら琵琶湖の方がマシだろう」

「せやなぁ、海水は嫌どす。旦那はんに全部お任せしますぇ」

そう言って日巫女は壱朗の胸にしなだれかかり、力を抜いている。恐らくまだ体力が回復していないのだろう。懐中時計の時間から、まる一日は日巫女を攻め、自分もついでに満足させてもらった為に、体力を奪っている。日巫女も今は立てないかもしれない程の筈だった。壱朗が日巫女にも飛べと言える筈もなかった。

それなりの高さに到達した時点で、湖であろうものを見つけた。壱朗の知っている琵琶湖とは形が違うが、『まぁ、大丈夫だろう』と琵琶湖だと思われる湖へと跳んでいく。

「日巫女、もうすぐ着くぞ。起きろ」

「いやどす。旦那はんがこのまま湖で洗っておくれやす」

「おぃ。そこまでさせるのか？」

「旦那はんのにぶちん……腰が抜けとるんどす。やりすぎどす。お腹の中も……」

それ以上を言わせる訳にはいかない。そう壱朗は判断し、すぐに了承する。気付いてはいても、頭が回らないあたりは壱朗らしいのだが。

「わかった！　もう。これ以上ない位に綺麗にしてやるから、何も言うな」

「大昔の湖って、入っても綺麗んやろか……」

「あーそうだな、日巫女お前は棺桶で待ってろ」

「どないしはりますのん？」
日巫女は思いつかないのか、不思議そうに首をかしげていた。その仕草はミーシャに似ていて――ミーシャが真似したののだろうが――可愛らしいモノで、壱朗は自分の鼓動が高鳴るのを感じていた。
「ん。湖の中の水分だけ取り出す。取りあえず風呂を作るか」
壱朗はそう言うと、湖の付近の平らな土地を拳で殴り、穴を作っていく。二人ぐらいは余裕で入れる程の大きさになると、どこかへ飛んでいき、大きな岩を持って帰ってきた。その岩を砕き、穴全体に敷き詰めた後、上から蹴って圧力を与え、固定している。吸血鬼の『怪力』がなければ、絶対にできない岩風呂造りだった。

「旦那はん。結構、野性的（アウトドア）なお人やったんやなぁ……」
「まぁ、なっ。昔に跳んだは良いが、風呂と便所には苦労したからなっ」
岩を、手頃な大きさに割りながら言う辺り、壱朗も早く入りたいのだろう。
なんせ汗と体液でベトベトだったり、カピカピだったりするのだ。このまま戻れば、ティアの嫉妬（ヤキモチ）のお仕置き（の関節技）が壱朗を襲うだろう。

などと話している内に水を入れるだけになる。壱朗は火炎球（火炎符）を湖に打ち込み、大量に水を蒸発させる。そして氷柱球（氷結符）で水蒸気を集め、即席風呂へと放り込む。さらにその氷柱球を火炎球で溶かし、同じ火炎球で焼いた岩を放り込む。すると水の温度が上がる。それなりの温度まで温めれば、風呂の完成だった。

「はぁ、上手い事考えはりますなぁ……旦那はんと一緒やったら、風呂には困りまへんなぁ」

そう言いながら、壱朗に向けて両手を広げる日巫女。要は抱き抱えて入れろ、という事だろう。そう理解し、入れてやる事にする。

分かっていた事ではあるが、日巫女の肢体は美しかった。日本人離れした腰の位置、透き通るような白い肌。唇や所々に見られる、桃色な箇所までもが美しい。壱朗がつけた物(付着させた)がなければ完璧だっただろう。

そんな日巫女には先に入って貰ったまま、壱朗は少し離れて、もう一個同じ風呂を作る。そして、湯は入れずに置いておく。

「さて、俺も入るか。服は……後で洗わないとな。洗うという程はできないがな」

「もう一つは何に使いますのん？」

「どうせ、こっちはかなり湯が汚れるからな。戻る前にもう一つで入ってから戻る事になるだろ？」

「帰らはる前に、匂い落とそやなんて。そないにティアはんに気ぃ使わはったら、今一緒におるウチの立場がおへん(ないでは)やおまへんか(ないですか)」

何故か初めて会った頃よりも、精神年齢が下がった気がする日巫女の態度に、ちゃんと考えてあった言い訳の理由と行動を実行する。

日巫女を後ろから抱き抱え、逃がさない様にして、今度は本気で抱き始める。

「そないに抱きしめはったかって、誤魔化されやしまへんぇ」

「本気でそう思ってるのか？」

壱朗に顔を向けた日巫女は、そのとてつもなく意地悪そうな笑顔に不安を覚える。

「ぇ？　旦那……はん？」

「さっきまでのはお前の可愛い嬌声(こえ)は聞こえても、悶える姿が見れなかったろ？　今度はそれも含めて本気で可愛がるからな？　その後の為のもう一つの風呂だ。こっちはすぐに使えなくなる。さぁ、お仕置きだ。覚悟は……してなくても止めないから……別にいいか」

壱朗は少しだけ不満だったのだ、確かに吸血鬼は闇でも見通せる。しかし、それは見えるだけであって、昼間と全く同じように見える訳ではない。声は堪能したが、視覚的には堪能できていないのだっ

た。
「う、ウチがお仕置きされるん？　なんでっ」
「ティア（余計な事）の事考えたろ？　そういうのは、ティアが居る時だけにしとけ」
壱朗は先程までの自分の行動――最中に他の事を考えたりしていた事や、ティアに怒られるから洗濯はしようと考えていた事――は棚に上げ、それが当たり前だと言わんばかりに、日巫女にお仕置きをし始める。快楽の中に本気で叩きこむというお仕置きを。

「う、ウチが悪いのん？　ちょ、旦那はんっああっんっ」
「どっちが悪かろうが、もうどうでも良い。お前を堪能させろ。それだけだ」
日巫女が腕だけで逃げれる訳もなく、壱朗にされるがままになっていく。
「待ってぇ、まだっウチ、腰がっ、あぁぁ――――っ。ふっうぅん。ちょ。さっきまでとっ。ちやいすぎっ。ああぁっああっーーーっ！」
「どうせ抜ける腰だ。今からそうでも関係ない。言ったろ。本気だって」

日巫女はその後に二日かけて、壱朗を甘く見ていた事を理解する。八千年。言葉で言うのは簡単だが、とんでもない年月だ。その間で蓄積された技術に、とてつもない魔力。どちらかだけだったにしても、日巫女に耐えられるはずもなく。日巫女は壱朗の思うがままに、快楽に溺れ、気を失い、そして快楽に目を覚まし、更に気を失う。
合間合間に吸わせられる壱朗の血が、日巫女の腹を満たし、徐々に魔力を回復する。真祖同士での、魔力の上乗せや強化はできなくても、空腹を満たす事や魔力の回復はできる。体力と腰だけは、どうにもならなかったが。

「あかん、あっかっんっってぇっ！　うち、壊れっ、壊れて、まうっ、てぇぇっっあああぁっーーーーー」

とりあえず、壱朗の魔力が周辺の獣を威嚇していなければ、間違いなく獣に襲われるぐらい、日巫女の艶やかな嬌声は周辺に響きわたっていた。

のちに壱朗は、『あれを京都でやられていたら、間違いなく警察に捕まるな。猥褻物ナントカ法だったか？』などと言っていたが。実際は体力も魔力も少なくなっていた為に、抵抗らしい抵抗もほとんど出来なかっただけで『普段なら、あそこまではしたない声上げたりしまへん』と日巫女は拗ねたように言っていたが、内心では『たまーになら、ああいうんも良いかも』と思っていたのは日巫女だけの秘密であった。

そんな秘密の記憶も五百年後には、壱朗に覗かれてばれるのだが。

第１３話　酒盛り（前書き）

プロローグの第０１話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第１３話　酒盛り

壱朗が日巫女と共に、西暦２１００年４月１９日に戻って来た時、最初に行った事は服屋に飛び込む事だった。

壱朗はまずは一人で、――昔は大根も売っていた事もあるという――大型一般大衆向け洋服専門店に入り、自分用の服を一式揃えた。その後、日巫女用におかしくない程度のジャージとサンダル、そして大きな鞄を買って、彼女を待たせている林へと戻った。

「旦那はん、遅おすえ。さびしゅうて、死んでしまうトコですぇ」

「アホか。そんな兎みたいな可愛げがあるなら、俺は苦労してない」

「ありますぇ？」

「どこに？」

「ほら、兎みたいに白い肌、兎と同じピンク色の唇に……」

そう言って肌を見せつけるように、汚れて傷んだ着物を脱ぎ捨て、壱朗の首に抱きついてくる。日巫女は壱朗が少し意識している事を表情から読み取ると、さらに胸を擦り付け行動をエスカレートさせる。

「ほら、旦那はんに擦れてウチのピンク色の先もこないに……『わかった。日巫女は十分兎みたいに可愛いから！』……もぉ、旦那はん、そないにはっきり可愛いやなんて言われたら、ウチ……」

「時間ないんだ、勘弁してくれ」

「……仕方おへんなぁ。この二週間、楽しませてもろたよって、堪忍したげますぇ。でも旦那はん。いくらなんでも、ジャージは酷いんやおへんか？」

「お前の洋服の趣味……はともかく、サイズが分からなかったんだよ。だから、とりあえずはそれを着てくれ。今から一緒に買いに行

こう」
　日巫女は急に態度を変え、いそいそと黒いジャージを身につけ始める。
「嫌やわ、デートのお誘いやねやったら、先にゆうてくれはらんと。ほんならすぐに、着替えさせてもろたのに。旦那はん、いけずやわぁ」
　日巫女の態度に不安を覚える壱朗。
「話をする前から既にからかってただろうが……」
「そんな、からかうやなんて、全部本気どすぇ」
　まだ、半裸に近い状態なのにも関わらず、本気を証明しようと再度にじり寄る日巫女に、『しまった、また脱線する』と危険を感じ、先に日巫女を止める。
「あー分かった。だから着替えと片付けが先！
気配を感じる。一般人だろうが偶然だろうが、『自分の女』の肌を誰かに見られるのを良しとするほど、心は広くないんでな」
「旦那はん。独占欲は、えろぉつよぉおますなぁ」
　指で口元に触れながら言う、その仕草と表情はとても嬉しそうだった。

　自分が独占したいからなのか『自分の女扱い』に上機嫌になるのは、過去での二週間で壱朗が見つけた、日巫女の可愛い一面でもあった。
　着替えた日巫女の着物と、簪などの髪飾り一式を、先程買ったばかりの大きめのダッフルバッグに詰めて、肩にかける。
「さて、まずは風呂からだな。臭うか？」
「そないな事、あらしまへんぇ。服だけで全然ちゃいますぇ。まぁ、髪だけはどうにもアレどすけどなぁ」
　壱朗に鼻を向ける事なく言い切る日巫女。吸血鬼が、嗅覚も自在に強化可能だからこその事だった。

いくら、壱朗特製簡易岩風呂で体を流しても、流石に髪は石鹸やシャンプーがなければどうしようもなかった。実は壱朗は石鹸等も作れない事もないのだが、原材料を調達する植物が、太古の植物では理解不能すぎた。

「だなぁ。ちょっと歩くが、風呂だけ入れる旅館があったんだ。そこに行こう」

「逢引き専用の旅館でもよろしおすのに……」

「そんなトコ行ったら、買い物どころじゃ無くなるだろうが。ほら、行くぞ」

そのまま出来るだけ山道を通り、旅館付近で表通りに出て、旅館へ向う。

特に何事もな……い筈もなく。日巫女が家族風呂にしたいと嘘泣きし、周囲を気にした壱朗が渋々認め、中に入れば日巫女が壱朗を誘惑し、壱朗がお仕置きに気をやらせて眠らせ、寝てる間に髪まで全部、洗ってやった。

その後。最近出来たのか、まだ真新しい大型ショッピングモールに向かい、日巫女の洋服と一式を買った。洋服の上下と靴を選ぶ分には問題無かったのだ。だが、流石に下着を選んだ経験は少なく、何となく肩身の狭い気持ちでいっぱいになりながら、日巫女の下着モデルショーに耐えていた。居心地の悪そうにしている壱朗に、見せつける事だけが目的の下着モデルショーは、試着室で開催されている。

日巫女は自分をよく知っていた。どの姿勢が妖艶さを増すのか、どんな仕草が男の欲情を煽るのか、理解し、そして今は壱朗の為だけに実行された。流石に襲いかかり試着室に入る、という事はなか

ったが……何とか耐えていただけだが。

そんな壱朗の反応を楽しむ為に、次々に見せられる下着は、白、黒、赤、青、黄、桃、裸、橙、紫、水色、水玉、レース、ストライプと、とどまる事を知らぬかの様に延々と続いた。

次々と出てくる色とデザインに、壱朗は『何でこんなにも種類があるんだ』と思う。そして苛立ち半分、いや、二割程度と興奮が八割で構成された、自分の感情を必死に抑えていた。何時の間にか何処かへ吹っ飛んだ、当初の居心地の悪さは、全てが終わり『お会計を』と言う、女性店長らしき人の声を聞いた瞬間、数倍増しで返って来たが。

結局、買った服は着替える一着分だけで、後は下着を山のように買い込んだ。壱朗の肩にかかったダッフルバッグは、折り畳んだ羽毛布団でも入っているかのように、膨れていた。

そんなダッフルバッグを背負いながら、下着モデルショーの即席スタッフにされてしまった、下着売り場の女性店員が一番不幸だったのかもしれないと、壱朗は気の毒に思っていた。

だが店員を生贄にし、自分は逃げた店長の後ろめたさからか、その日の売り上げ向上を理由に時給が上がった生贄店員（即席スタッフ）は、半年に一回くらいなら来て欲しいなぁと考えていた事を、壱朗は知る筈もなかったのである。

――知っていたとしても、二度とその店には行かなかっただろうが。

壱朗が――主に精神面で――疲れ果て、ベンチに座っていると、日巫女が缶のお茶を持ってくる。

その顔は本当に楽しそうに、輝いており、それを見た壱朗の疲れが少しだけ和らいだ気がした。

「旦那はん、だらしないどすなぁ。男(おのこ)やったら気張りやす」
「楽しかったろ？」
壱朗は犬歯が見えるくらいの笑い顔で、日巫女に問う。
「……聞かはるんどすか？」
そっぽを向く日巫女の顔は朱に染まっている。
「日巫女が言ったとおり、言わせるのが好きなんだよ」
「ええ趣味やとは言うてまへんぇ？」
そんな軽口には答えず、話を続ける。
「二千年後も乗り越えたら、今と同じ顔にさせてみせる」
「そないな事、言いはらんとって。生きたくなるやおへんか」
日巫女は顔を歪ませ、口を開けていない缶を壱朗に投げつける。
「自然に逆らってる訳じゃないと思うぞ。人間にも吸血鬼にも、乗り越える手段は用意されてる。それを掴めるかどうか、掴む意思があるかどうかだ」
缶を受け止め、言葉を吐きながら横に置くと、日巫女の腕を掴み引き寄せる。
「旦那はん、ほんまにいけずなお人やわぁ。ウチをこないな風にしはってからに。責任、とっておくれやす」
「あぁ、俺の存在が許される間は、な」
壱朗の胸にしがみついたまま、文句を言う日巫女の声は震えていた。
「旦那はんのにぶちん。……こういう時は嘘でもええから、絶対守るて言いはるもんどすぇ」
「嘘はつかない約束なんだ」
「ティアはんと、ウチはちゃいます。上手い事騙されてあげますさかい、嘘ついて構やしまへんぇ。上手い事、気付かん振りしたげますぇ」
日巫女は自分以外を見ないでと言わんばかりに、壱朗の胸を叩きながら言う。
「そうか。なら、嘘吐きになりたくなったら、日巫女にいうか……」

「ウチはええ女どすよって、旦那はんを立てるのは任しときなはれ」

そう言う日巫女には、彼女が会合前までは持っていたモノが無かった。

妖艶な笑みで武装し、色気と艶やかさの中に潜ませた気然とした強さ。

二千年もの間、眷属を背負い続けた者の苦悩と覚悟。

そして、その苦悩と覚悟故に、眷属を託す決断。

託すが為の死ぬ覚悟。

全て、壱朗が知らなかったモノ。

そして、壱朗が奪ったモノ。

壱朗が日巫女に与えなければいけない。

次の二千年後までの支えを。

眷属を背負う事に押しつぶされぬ、強さを。

壱朗が背負う『ＢｌａｃｋＴｗｉｃｅ（漆黒の重積）Ｏｃｔａｇｏｎ（八角魔血晶）』にも劣らない強さを。

想像する。

壱朗の右には、ティアが礼儀正しく立ち、

壱朗の左腕には、日巫女がしな垂れかかり、

壱朗の足にはミーシャがしがみついている。

これからの二千年の生き方を決めたとたん、腹が座る。

壱朗は日巫女を抱きしめ、『嘘』を吐く。

「日巫女は俺が居なくても、日巫女の眷属の、吸血鬼の頂点だ。俺が現れようがその中身が弱くなる事はない。俺は日巫女の強さを欲した。だから、いい女のままの日巫女が、俺の横で今まで通り、艶

かしく美しくあれ」
　日巫女が疲れていた事も、死を望んでいた事も知っている、理解している。
　だが、その機会を奪った。
　だから、強く居られる様にしてやる。
「かなんなぁ。ウチは、ええ女やさかい、一旦口に出した言の葉は、引っ込められまへんのに……」
　そう言って、笑う壱朗の唇を強引に奪う。それ以上は何も言わせない様に。日巫女は流れる涙も気にせず、その想いが伝わる様に強く、強く唇を重ねるのだった。

――――それは幻聴だったのか。
『旦那はんの嘘に騙されたあげますよって、ウチの事、離さんとっておくれやす』
　壱朗には日巫女の願いが聴こえた気がした。

……そうして、日巫女は壱朗の左腕となった――――

「……で？」
　壱朗は、ティアの青筋を見ない様に目を逸らし、漬物を口にする。
「せやから。今、話さしてもらった通り、旦那はんがウチを無理矢理、手籠にしはったんどすぇ。もぉ、ウチは旦那はんのモノにされてしもたから。お傍を離れられまへんぇ」
　夢見る様に艶っぽい視線を、自分の下腹部に向け、意味深に撫でさする日巫女。
「い、ち、ろ、う、さ、ま？」
　ティアは、日巫女が傍に居る事になった事を、本気で怒っている訳ではない。その過程の一部が気に入らないだけだ。

「うん、まぁ、概ね、そんな感じだったかな。多分」
間違ってはいないので、とりあえず頷いてしまう壱朗。
「ほら、旦那はんもこう言うてはりますぇ？」
「ま、まぁ最後の『左腕』は、ちょっと脚色過多かもしれないが……」
「いぇ、それは構いません……右は譲りませんが……」
「それはいいのか……ティア」
壱朗にはあっさり許可するティアが分からない。
「パパ？　私、座ってて良いんだよね？」
やっぱりよくわからないミーシャは、自分の場所だけは守る様子だ。
「構いまへんで。旦那はんがあかん言わはっても、気にせんでええさかい」
そう言ってミーシャに御猪口を渡す日巫女。
「いや、駄目だとは言わんが……酒はどうかと思うぞ」
いや、年齢的には問題ないはずだった。

そう、見た目が駄目なだけで。その可愛さで人を殺せそうなミーシャが酔っ払い、頬を染めて『パパ大好き』などと言われた日には、間違いなく壱朗は、自分の理性をガリガリと削る戦いに、赴く事になるのは必至だっただろう。

「私が問題にしているのは！　何故、二週間もそんなトコにいたのか、という事です。あと、なんで二人でデートしてるんですか。此処でずっと待ってたのに！」
もちろん、言外に『どうせずっといちゃいちゃしてたんですよね？』と言っているのは間違いなかった。

話をしても怒られるのだが、大昔まで跳び過ぎて、日巫女が回復

した時には今度は、帰る為の壱朗の魔力が足りなかったのである。
今の状態で言ってもどうせ意味はないので、ティアの嫉妬と壱朗の失敗を行為で誤魔化せる時に、話をしようと考えている壱朗だった。

そんな弱腰な壱朗の右腕へ、ティアは奪う様に抱きつき、何故か現在進行形で関節に悲鳴を上げさせている。対抗して左腕は、日巫女の何故か下着の感触を感じない、柔らかく心地よい双丘に挟まれて、壱朗を堕落させようと包み込んでいた。

「私は右でいいですよ。右の方が壱朗様は上手ですし。自家発電のばかりの頃のお手伝いも、右手の役目でしたし。昔に両利きを目指したが、左手では色々やりにくいって言ってましたので。それに……」

勝ち誇るのはいいが、嫌な昔を次々暴露するのはやめて欲しい。
そう思う壱朗の心は、ティアには届かない様だった。
「なんやのんそれ、べつにどぉでもええ事ばかりやし」

そう言いつつも、羨ましそうに右腕を見ながら、左腕を抱擁する日巫女。
そんな日巫女に『勝った』とばかりに鼻を鳴らし、右腕を関節を極める締めるティア。
そして二人に挟まれ情けない顔の壱朗と、その膝に座る居場所確保の顔の赤いミーシャ。

『何気に一番良い場所はミーシャの位置では？』と二人は思い始めていたが、自分の位置は譲らなかった。何故なら――――

「何故、妾は酒宴が終ったら、帰らねばならんのじゃ！妾もここに残る！」

と言って、どう見てもティア、日巫女、ミーシャのうち、誰かが退いた瞬間に、場所を奪う気満々の『春の女王（クロウディア）』。

「春はん、それは無理やと思うぇ？　お迎え（眷属）が向かってきてるさかいなぁ」

日巫女の感覚では、後３０分もしない内に到着しそうな気配だった。

「この様な形で、力を持ちし方と再会できるとは。おぉ、コレ（この酒）が狼男の一族が作った特別製でしてな、儂らでも酔えますのじゃ。この頭が春のアホ娘の様に」

壱朗の隣で飲み明かしたいと、酒を注ぎ待っている『酋長』は、何気に『春の女王（クロウディア）』をアホ扱いしている。

「いや、『酋長』流石にアホは言いすぎなんじゃ……」

壱朗に勧められている酒は、普通の酒に『神酒（ソーマ）』と呼ばれる水を混ぜた物だ。これを混ぜると吸血鬼（吸血鬼）でも酔うし、二日酔いも体験する事になる。

「大体ですな、最近は芸術が分からない者が多いのです。だから簡単に、燃やすなどと言う愚行に走る者がいるのです」

とりあえず酔っ払い、桜の樹に愚痴を飛ばす、ラマルティーヌ。

「ラマルティーヌ卿、それは桜です。お酒を飲んでも正気は保って下さい。壱朗様の前ですよ？　なんならもう二、三枚燃やしましょうか？」

どうやらティアは、始めて酒に酔う様で、かなり危険だった。

「も、も、燃やしちゃ駄目ですよぉ～！　ティアさん～正気に戻って下さい～！」

そんな七人の雑用係に、強制的に参加させられている、茶屋（ホール）の従（ス）業員（タッフ）の壱与（いよ）。

彼女はその『予知』に関する血技を使い日巫女を探す為、茶屋に戻って準備しようとした所で日巫女を見つけたのだが、他の日巫女の眷族に教える前に日巫女に捕まった。

ばらしたら三百年は苛めると脅されたあげく、どうせなんだから、

と花見会場と化した茶屋で給仕役兼料理人(ウェイトレスおつまみ係)を務めていた。茶屋の備品の皿を、十分毎にゴミへと変化させながら。

ラマルティーヌの話しかけている桜の木の上で、可笑しそうに笑いながら八人の観察を続けている、金髪碧眼の男。ドレイク。

彼は中立でも味方でも敵でもない、と意味不明な事を言い、『ボクの立場が決まったら正式に言うよ』と壱朗に聞こえる様に、他の真祖に声をかけて桜の樹の枝に座っている。

時々、壱与(いよ)の作ったおつまみの皿と、酒を壱与(いよ)に気付かれない様に盗んでいる。

おかげで壱与(いよ)は、作っても運んでも足りないお酒とおつまみに首をかしげながら、茶屋の被害を増やしつつ頑張っている。

壱与(いよ)以外は全員が気付いてはいるが、あえて触れようとしない。それ故に彼は気配を隠す事もなく、壱朗を観察し、酒を楽しんでいた。

「旦那はん、これからどうしはるんぇ？」

「そうじゃな、壱朗殿。聞かせて欲しい」

「とりあえず、現状把握が最初かな……ティア」

「はぃ。私が調べたところ、『血の十字架(ブラッディクロス)』による血を捧げても良いという人間の方との意思疎通は、上手くいっていません。それは『血の十字架(ブラッディクロス)』を着けた方が、吸われた後に死んでいる事件の発生件数に、問題があると思います。ですのでこういった事件の解決と、政府機関との情報共有を行います。まぁ今のところ、こちらが一方的に送りつけるだけですが」

「『血の十字架(ブラッディクロス)』ですか～あれは～効果が薄い～みたいですね～ないよりは～いいみたいですが～」

『血の十字架(ブラッディクロス)』は吸血鬼に血をあげてもいいと考える人間が、体

のどこかに貼る刺青シールである。一応それを貼っている人は、夜間は血を吸われに街を徘徊している、とみなされている。見えない所に貼っていても、吸血鬼には分かるようになっている。

これは、吸血鬼になりたい人しかやらない。しかし、若い人間は早期美容整形を受けている人間がほとんどの為、吸血鬼化にかなり抵抗がある。

誰だって今の自分の顔が――本来あるべき姿だったとしても――醜くなるかもしれない可能性がある以上、嫌がるのは当然といえた。

逆に年老いた人の中には成りたがる人が結構いるが、吸血鬼が吸いたがらない。理由は簡単だ。不味いからである。

結果、無理矢理襲う吸血鬼が減らないのである。それも痕跡を残さなければ、少しはマシなのだが。残す程度のやり方しか知らない者は、吸い方も荒くなり、殺してしまう事が多く、吸血殺人となる。

そして、それを知り提供者が減り、また犯罪が増えるという、悪循環の繰り返しでもあった。

「とりあえず～犯罪件数を～減らしませんと～どうにも～なりませんので～」

最初の懸念事項を述べる壹与（いよ）。

「パパ、ぁ～ん。……ん」

やはり訳がわからないので、壱朗の口に漬物を運ぶミーシャ。壱朗の顎を頭に載せられ、グリグリされる。何故かそれでも嬉しそうだ。

「ぁむ……って事だな。ま、まずは犯罪者吸血鬼の捕縛と引き渡しだな」

同意し、方針を決めている壱朗。両腕は相変わらず動かない。

「しかし、それは反発を生まんかの？　妾（わらわ）が眷属にも居そうじゃが……」

自分の眷属をほったらかしにしていて焦る、クロゥディア。

「生むじゃろなぁ。儂はそれでもええと思うがな。秩序はどこかに必要じゃ」

眷属を統制しており、自分勝手な眷属は抱えていない『酋長』。

「ウチのとこは眷族は増やさんようにしてますさかいなぁ……最後の子でも四百近い歳やよって、ちゃんと守ってると思いますけど……」

自分の眷属の管理は、全て二世と壹与(いよ)任せの日巫女。腕は離さない。

「私はちゃんと、声をかけて誘う事を眷族に教えていますよ」

自信満々のラマルティーヌ。

「……ラマルティーヌ卿の所の三世さんは、えらく態度が悪かったですよ？」

生理的に嫌いらしく、ラマルティーヌには辛辣なティア。こちらも離さない。

「あ、あれはちょっと、気が立っていただけの筈だ！　全員が何時もそうな訳じゃない……はずだ。たぶん」

教えてはいるらしいが、徹底できているか不安を隠せなくなるあたり、かなり怪しいだろう。

壱朗はこの反応を見て思う。吸血鬼はその存在を認められはしたが、本当の意味で人間との共存共栄は、かなり先になりそうだ、と……

第１３話　酒盛り（後書き）

第１４話　撒き餌（前書き）

プロローグの第０１話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第１４話　撒き餌

ティアは壱朗の胸の上で、夢心地を楽しんでいる。
背中にかけた白桃色の長襦袢を、掛け布団変わりにして。
時折、壱朗が真剣な眼差しを、虚空に向けるので聞いてみた。

「壱朗様は、あれでいいんですか？」
「まぁ、仕方ないよな。誰かが囮になる必要もあるしな」
「大丈夫だと思ってはいても、私は不安です……あっ、ぃぁっ」
繋がったままの充足感を噛み締めながら、不安を口にするティア。
「ティア。毎回、吸血時に破瓜前に戻らなくてもいいぞ？」

壱朗は血を吸いたくなっても、人間の血は吸わない。多い時で、月に一度程しか欲しいとも思わない。そして吸う時は、ティアの血を吸う。ティアの姿は今までずっと十八歳に固定されている。壱朗が吸血を望む日だけ、処女だった頃の体に戻る。コレならば、ティアはいつでも処女の血を捧げられた。吸血鬼の、だが。

「嫌です。壱朗様には、私の一番美味しい時の血を、飲んで欲しいんです」
「それだと、抱かれる時に痛いだろうに……んっ」
気遣う壱朗の言葉を唇で遮り、『もっと』と、貪欲にねだる。
「っはぁ。いいんです。壱朗様からもらうモノだけは、痛みも甘美なんです。壱朗様から頂くモノで、私を満たしたいんです」
「おぃ……」
「言葉も、痛みも、血も、何もかも、もっと欲しい」
壱朗は薄々気付いていたが、確信する。

ティアの中に渦巻いているのは、日巫女への嫉妬だと。
「血を吸って下さい。そして、吸わせて下さい。今、繋がった、このまま、私の全部が壱朗様で満たされる様にして下さい」
壱朗は悔やみながら、ティアの頭を撫でてやる。ティアは絶対に、勝手には血を吸わなかった。
――10歳児の俺の血を、日巫女にも吸わせたのが引き金になったか――
三千年という時間は、長すぎたのかもしれない。
ティアは壱朗なしでは、もう、生きられ無かった。
他の真祖に壱朗の血を少しだけ送った時も、悔しさを感じていた。
『何故、私の壱朗様の血を分けなければいけないのか』と。
吸血鬼には、人間の血が必要。それは正解であり、嘘でもある。
別に吸血鬼は、血を飲まなければ死ぬという訳ではない。
吸血鬼も生物だ。そうした視点で見れば理解できるかもしれない。
吸血鬼と人間は同じ様に食事を行い、栄養素を取り込む事ができる。
吸血鬼が一度の食事で得られるエネルギー量は、人間の何倍もあるが。
吸血鬼は人間の尺度で計算されDNA改良した食品より、自然食品を好む。
吸血鬼にとって食品よりも、高エネルギーを得られるのが『血』である。
言うなれば、人間で言う高級食材だ。味わいも良く、エネルギー量も良い。

豊かな生活を楽しむ為には欲しい。そういった意味では同じだ。
それと同時に『血』は嗜好品だ。
煙草、珈琲、紅茶、菓子。
人間の嗜好品とは違うが、摂取せずとも問題ないのは同じだ。
年代物の酒、キャビア（蝶鮫の卵）、フォアグラ（鵞鳥の肝脂肪）、トリュフ（西洋松露）辺りが有名だが…
……
高級食材で嗜好品。そういったモノの本質を、知っているだろうか？
フォアグラなど、ガチョウに無理矢理餌を食わせる事で、生産される。
人間だろうと吸血鬼だろうと、変わらない。
他の生物の都合ではなく、自分達の都合で解釈し、選り好みしているのだから。

吸血鬼も、別に人間の『血』でなくても構わない。
動物の『血』でも問題はない。もちろん、吸血鬼の『血』でも。

ただ、人間の血液が最も美味く、人間が最もエネルギー量が多いというだけだ。
年齢は全盛期に近ければ近い程美味しくなる。
個人差はあるが、二十歳前後が美味しくなる時期となる。

血の味を比べると、
処女の女性の血、
精通前の男児の血、
処女の吸血鬼女性の血、
精通前の吸血鬼男児の血、
非処女の女性の血、
精通後の男性の血

非処女の吸血鬼女性の血、
精通後の吸血鬼男性の血、
動物の血
という順になる。
一番美味いのは、『処女の二十歳前後の人間の女性の血』だ。

しかし、ある弱小吸血鬼は気付いた。
もしかすると、処女の年齢の姿で何千年も生きた吸血鬼の血は、処女の人間の血の美味さを超えるのではないか、と。
吸血鬼の場合は、真祖に近ければ近い程、美味となる。
その上、全盛期とは血の熟成により上がる為、歳を重ねる程、美味くなる。
そう考えたのだ。
この解釈は、結果から言うと正しい。
残念ながら、この事実に気付いた吸血鬼は力が無かった為、真実には辿り着けなかったが。
この事実は、自殺陣病（アポトーシス）を超えた吸血鬼にしか、適用されなかったのだ。

壱朗が約六千歳の頃、ティアは千歳の誕生日を迎え、壱朗に我が儘を聞いてもらえる事になった。そして、壱朗は激しく後悔しながらも１０歳くらいの姿になり、精通前の壱朗の血をティアに与える。その日、ティアは狂った様に吸い続け、壱朗は死を覚悟しかける事になる。
壱朗が、本気でティアを気絶させなければ、危なかった。
壱朗は自分でも飲んでみたが、別に何も感じない。
『好意』という要素があるからか、少年に対する特殊性癖があったから、そこまでになったのではないか、と壱朗は判断した。
『確かに好意はあります。でも、特殊性癖（ショタで）はありません。それに、そんなレベルでの話ではありません。その血の為に人類を滅ぼせと

言われたら、私は滅ぼします』と、自分は至って正気だと言うティアは、そう語った。

壱朗はティアに正気という言葉の意味を、辞書で調べ直させたい気分だった。

だが、後（のち）にティアが自殺陣病（アポトーシス）を乗り超えた時に、思い知らされる。

今度は壱朗がティアを殺しかけた。もちろん、吸血による失血死で。

ティアの『壱朗様？　全部差し上げますから、死ぬ前に初めて（処女）も貰って下さい』という言葉で我に返る。そして、ティアが吸ったの（千年）前時の事も含め、詫びた。

自殺陣病（アポトーシス）を乗り越えた壱朗だからこそ、我に返ったのかもしれない。

ティアは心の中で、愛されているからだと信じていたが。

そして、壱朗が１２歳の姿、つまり精通後の姿だった場合には、ティアが吸血しても何も起こらなかった。少し、美味しいという程度だったらしい。流石にティアの初めて（処女）を、実験などという理由で奪いたく無かった壱朗は、そこで諦め、訓練に切り替えた。

壱朗は１０歳児の姿になったまま、ティアと共に吸血の欲望を我慢する訓練、吸血に慣れる訓練を二人で行った。狂おしい程の美味な血を一口だけ吸い、それを目の前にじっと我慢する。吸われる方は吸う方のほぼ全魔力を込めた符を持ち、襲いかかれば符を使う。という訓練を続ける事になる。

壱朗は自分を弱らせて訓練しなければ、ティアでは暴走を止めれないので苦労した。しかし逆に、ティアは自殺陣病（アポトーシス）を自力で乗り越えた訳ではなかったので、慣れるまで百年以上費やした。ティアは特訓中の事を『死ぬ時はあんなのがいいです。凄く気持ち良かったです』と語ったが、壱朗は何故かティアに吸血されても、性的快感

は感じなかった。
　これは二人が、処女の人間を吸血をした経験が少ない事から、起こった暴走だと理解した。また、吸血による快感は上位の者から、下位の者へしか起こらない事も解った。真祖同士だとどうなるのかは、後(のち)に知る事になる。

　会合の一週間後、壱与(いよ)の自殺陣病(アポトーシス)が起こり、日巫女、ティア、壱朗は確信する事になった。
　壱与(いよ)の血は自殺陣病(アポトーシス)を超えた時点で、味が多少ではあるが変わった。
　壱朗、ティアの変化のように、劇的なモノではないが。
　他には二千歳を超えている者はいない。
　他に確認する方法はなく、日巫女の希望もあり、日巫女には破瓜前になってもらう為に棺に眠らせ、過去へ飛ばし、肉体年齢の調整を行った。
　百歳未満の生(な)りたて真祖の血も試した。ミーシャには猫の特大人形ヌイグルミを買い与える事と、壱朗の血を飲ませる事になったが。
　そして、事実を確認する。壱朗はこの情報を外に出すべきかを悩んだ。

『自殺陣病(アポトーシス)を乗り越えた吸血鬼の性的変化前(処女や精通前)の血は何にも勝る』という事実を。

――――そして、壱朗は自身を囮にする事を決めた。

　数名の真祖の元に１０歳の姿で出向き、血を舐めさせたのだ。
　効果覿面だった。
　六千歳の壱朗ですら、自殺陣病(アポトーシス)を一乗り越えた処女(ティア)の血に我を

失いかけたのだ。
自殺陣病（アポトーシス）も本能を抑えられ乗り越えていない者に、耐えられる筈が無い。

護衛、というよりも楽しむ為について来た日巫女は、完全に見下して教えてやっていた。『旦那はんの足元に跪いて、『血の熟成』させたいから、過去に跳ばさして欲しぃて言うてみ？　涙流して懇願しはったら、聞いてくれはるかもしれまへんぇ？　その願い叶えてもらわはって、六千年程熟成でけたら、旦那はんみたいな血の味になりますぇ？』と。

ウィルソン卿、ラマルティーヌ卿を含む、数名に体験させた様子を録画し、他の真祖へと送りつけた。時間凍結した血を添えて。もちろん、１０歳児の姿の壱朗の血だ。

それだけで、眠ったままの真祖の二人と、未だ会えていない二人以外は中立を保つ事を約束しに来た。あくまでも中立だが。

ウィルソン卿など、舐めさせた瞬間に壱朗に飛びかかり、もっと吸おうとして『酋長』の重力により潰された。復活には三日はかかっただろう。ラマルティーヌ卿はティアが目の前にいた為、コレクションを守ろうと必死に耐えていた。

そして、昨日の晩は日巫女。今日はティアと、ベッドの中で問いただされた。

『何故、自分達を守る為に、壱朗自身を危険に晒すのか』と。

今の壱朗は、２０歳の姿でティアと共にいる。

「守る、そう決めちまったからな」

ティアの頭を撫でながら、そう呟く。

「やっぱり、壱朗様を送り出さなければよかった……」

ティアは不満そうに言う。自分の事だけじゃないのが不満なのだ。

「それじゃ、俺とは会えないぞ？」
「むぅ！　じゃあ、もっと何度も千年を繰り返して、山ほど満足してから……」
壱朗が撫でる手に力を入れ、髪の毛をかき混ぜる。
「あっあっ。ちゃんと綺麗に見える様に整えたのに……」
更に不満そうに、頬を膨らますティア。
「どっちにしろ、もう無理だったさ。ティアに黙ったまま（姉の事を秘密にして）でいるのも限界だったしな。だからそんな事言うな。四人で暮らすのも悪くないぞ。きっと」
「ミーシャちゃんに、性を意識させないで下さいね」
「させない為に日巫女と順番にしたんだろ？」
ティアはフンと、体ごと他所に向けようとするが、離れられない事に気付き、顔だけそっぽを向く。
夜は、もう片方がミーシャの面倒をみる。間違っても最中にミーシャが入ってこないように。どちらが壱朗と寝室を共にしようが、必ずそうするとティアと日巫女の間で、決めてあったのだ。ミーシャに性を意識させてしまい、自分達の回数が減ってしまわないように。
「こら。逃げるな」
「きゃっ。あっぁっ。ああぁっ。んっもぅっ。いいじゃないですかっ。
ちょっとぐらいっあぁぁっんっ」
壱朗に先を弄られ、腰を揺すられ、すぐにもとの体制に戻させられる。
「駄目とは言ってない。ちゃんと言えって言ってるんだ」
「……壱朗様の心の声は『言わないままでいてくれた方がお仕置きできるし、苛めてティアを愉しめるなぁ……』って言ってますが……？」
壱朗は『触れていると、何でも知ろうと思えば伝わってしまうのも、問題があるんだな』と頭の中で考えてみる。

「そうですね。何か考えますか？　妨害用の札とか」
「声に出してない言葉と会話するな。仕方ないけどな」
そして、苛める為わざとはっきりわかる様に考えながら、口を開く。
「ティアに知られて嫌な事はない。困る事はあってもな」
本気で知られてもいいと思っている事がわかってしまい、嬉しくなって真っ赤になるティア。
「ほら、つい嬉しくなって真っ赤になるティアも、可愛いからな」
「～～～～っ！」
ティアが背中にかけていた長襦袢を振り乱し、胸板を何度も殴り始める。壱朗は殴る手を受け止め、唇を重ね、絡め、流し込み、飲ませる。

壱朗は一緒に過ごしてきた三千年の間、馴れさせない様、気を付けていた。
おかげで今では、恥ずかしいと赤面するのが、直したくても直らない。
壱朗は、可愛いコレを絶対に無くさないように、と気をつけている。
ティアも恥ずかしいと思いながらも、本気で直すそうと思っておらず、求められている反応だと薄々気付いていた。
しかし、二人は知らないが、本当は吸血鬼（ヴァンパイアウィルス）のＤＮＡのせいだった。
自分の主に求められる存在に、適応されやすいのだ。
主に強くあれと望まれ強くなる者や、嫌われて弱くなる者までいるのだが、それには未だ誰も気付いていない。

そんな力がもう何年も前に働いて、悲劇は予定通り約四ヶ月前に起きた。

壱与は壱朗が、連れて来たという四世の吸血鬼を見ていた。そして、自分が置かれている状況が、良く分からなかった。

「私は～何故～生きてるんだと～思います～？」

目の前の四世の男は、全裸の上に『縛符』というティアの作った符が、全身に巻きついている。ピラミッドに安置されていたミイラの様に。

「貴方も～死んでいる筈～だったんです～何で～生きてるんです～？」

四世の男は何も言えない。当たり前だ、口も符で塞がれており、視覚と聴覚以外は、何も役に立たなかったのだから。

「このままじゃ～、せっかく預言通り～、日巫女様が助かったのに……バレて、責任取らされたらどうすんだ！　ゴルァ！　このグズがぁ！　ちゃんと預言通り死んどけやぁ！」

急に豹変した態度に、四世の男は訳がわからなかったが、何もできない。

「ちゃんと、預言通りにしてやっからよぉ。そこで待ってろよぉ？」

そう言って、横に置いてある鞄から、銀色の杭と金槌を取り出した。

「コレでテメェの心臓をよぉ、しっかり破壊してやるよぉ。嬉しいだろぉ？」

そんな筈はないが、四世の男は逃げる事もできず、ただ心の中で死にたくないと叫んでいた。

壱与は銀の杭を持つ、自分の手が爛れるのも気にせず、四世の男の心臓付近に当てた。

そして、金槌を振りかぶったその時――――

「楽しそうだなぁ、壱与チャンよ。おっと、それとも曾爺さんの仇って言った方がいいかぃ？」

全裸のティアが前にしがみついたままの、同じく全裸の壱朗が、

壱与の金槌を真後ろから止めていた。
「彼方様～流石にその格好で～来られますのはちょっと～どうかと～」
所々間延びしたりしていなかったりと、内心では焦っているのかもしれない。
「何でさっきまでみたいに……テメェの本性晒さねぇんだ、あぁ？　オィ、三世の嬢ちゃんよ。テメェ、俺の事、舐めてんのか？　あ？」
「……っ」
「ハッキリせぇや！　このダボがぁ！　……って感じかい？　壱与チャン？」
壱朗はティアを下ろし、ティアの身体中を『縛符』で覆う。もちろん、此処に来た時点で四世の男の目は『縛符』で覆われ、ティアの肌は欠片も見せていない。
「壱朗様……動けませんが……」
『当たり前だ。動けたらその方がおかしい』壱朗は目でそう言っている。
「彼方様～服の代わりとは言え～そっちの方が～えっちぃですよぉ～」
間延びした喋り方を変えるつもりはないなのか、首だけを後ろに向けて喋っている。
壱与の言う通り、ティアの身体のラインがきっちりと出て、かなり扇情的になっている。というか、ほとんど隠れていない。
胸は指三本分程の符が、横一列になり隠しているだけだった。下も大差はない。あとは身体を一周する様に、符の帯が巻きついているだけだ。
「ちっ、途中でお楽しみを止められたんだ。これぐらいいいじゃねぇか」

「壱朗様、真面目にお願いします……あとで頑張りますから」

「お、マジか。じゃあ、全部ティアにして貰うか。よっし。そうと決まれば……『縛符』『護符』！」

今度はティアに巻きついていた符が剥がれ、横一列のまま、壱朗とティアを囲む。ティアは護符出で来たミニのワンピース、壱朗は護符のスラックスに上半身は裸のままだ。

「始めからこれでお願いします。全く、時と場合くらい考えて下さい。でないと私の苦労が……『ティアさん～』……なんですか？」

壱朗のお腹を拳でグリグリしながら、ティアはめんどくさそうに壹与を見る。

「ティアさんも～大概かと～思います～」

壹与は、壱朗の手は離されているのだが、振り上げた姿勢のまま動かない。

「その手。振り下ろしたければ、どうぞお好きに。何度でもやっていいですよ」

ティアは壱朗が止めた事を、あっさり許可してしまう。

「いいんですか～？」

「ティアは遊びが足りないよな～……ベッド以外では」

腹を殴られながら全く無視する壱朗に、壹与は金槌を振り下ろす。

「あ～ぁ、やっちゃった。これでもう駄目だな」

壱朗のいい加減な言葉とは裏腹に、四世の男は死んでもいなければ、傷一つなかった。壹与は知らなかったが、『縛符』と『護符』は一枚の札の表裏で出来ている。縛符で拘束されると外側からの攻撃から守られる。護符で守られると外側からの攻撃が束縛される。つまり、四世の男を殺したければ、壱朗の符を破る力が必要である。

「何でです～？　私の手が～爛れるほどの～聖水で作られた～銀の

杭～なのに～。しかも～守るんですね～この～四世を～」
「当然です。壱朗様が考え、私が作った符が、聖水や銀の杭如きで破れると？　冗談はその身体と話し方、それと本性と、貴女の頭の中身だけになさい」
　ティアはあっさりと言いきる。
「ティア、それだと冗談じゃない処は、何もないんじゃ？」
　壱朗が念の為聞いてみる。
「何を言っているのですか。壹与（いよ）さんの身体（中）に流れる日（主）巫女様の血と、彼女が着ている服があるじゃないですか。その二つは冗談ではなく、真実です」
　さも当然。と言う様なティアの態度に、壹与（いよ）は問う。
「……いつから～？　何時から～気付いてたんです～？」
　言いながら時間を稼ぐ、何故か動かない身体を動かす為に。
「どの事を言ってるのかは分からないが。その話し方とそこに転がってる男の事なら、そいつを捕まえた時点から。その身体が子供に見えて、実は３０歳の姿でもその身体だというのを知ったのは、４つ目の『魔血晶』ができた後。壹与（いよ）チャンが眠らされた後だな」
　壱朗は楽しそうに解説するが、ティアは面倒くさそうにしている。
「だから言ったではないですか。自殺陣病（アポトーシス）を乗り超えた時点で話をしましょう、と。どうせ同じなのに、壱朗様が様子を見たいなんて言い出すから……」
「へぇへぇ。俺が悪いのよ、と。さって、何でこんな事したんだ？
……あ、そうだった。言うの忘れてた。今、身体動かないだろ？　自殺も勿論できない。しかも、理由に納得いかない場合、壹与（いよ）チャンも、日巫女も眷属も全抹殺だからね。ちなみに、日巫女の希望だからキャンセルはないよ。
……よく考えて話すんだな。三世のガキ」
「――――っ！」
　壹与（いよ）は完全に、全ての道を閉ざされた事を理解する。逃げる事も騙す事も。今の自分に許されるのは話し、その判決を待つ事だけだ、

と。

最後の一言で、壹与（いよ）とすら呼ばない壱朗に、ティアは口を挟むのをやめる。

『此処からは壱朗様が八千年待った、曾お爺様の仇討ちなのだから』と。

日巫女は、寝室で横に寝ているミーシャの頭を撫でながら、傍に置いた『銅鏡』で事の成り行きを見守る。初めて見る壱朗の怒りを知る為に。

そして、二度と会えないかもしれない、自分の眷属の顔を記憶に残す為に。

第１５話　確認（前書き）

前書き
プロローグの第０１話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第１５話　確認

日巫女（ひみこ）は『銅鏡』で視（み）て識（し）っていた。
壱朗（真祖）の吸血鬼（誕生）化を。
壱与（いよ）が壱朗の誕生の引き金を引き、曾祖父を死なせた事を。

日巫女の血族の血技は『予知』。
限定的ではあるが、未来が視える。
『銅鏡』で未来を覗き、画像が視えるだけではない。視える対象の過去も識る事が出来るし、隠されている物、情報を透視する事も可能だ。
まだ、確定していない未来は視えない。
決して、変えられない未来は視える。
あやふやな未来は、ぼやけて視える。
これを活用し、壱朗の誕生を識った上で、放置した。
真祖達の会合を開かせる為に、日巫女を頼って来る事を識っていたから。

壱与（いよ）は日巫女に任（押し付けられて）され、近くの神社で巫女になって、壱朗を幼少期からずっと見ていた。
壱朗が初めて交際した時も、離婚した時も見ていた。
壱朗は正義感に溢れている訳でもなく、悪事を働く訳でもない。
制限速度（スピード）違反と駐車禁止違反では、何度か捕まっていた様だが。
言うなれば普通の男。何の取り柄もなく、悪いところもない。そんな男に血族を託して、大丈夫なのか不安だった。しかし、誕生してからは違った。嘘のように別人だった。

日巫女は壱与から聞き、驚いた。そして確かめる為、その『銅鏡』で視た。八千年の『血の熟成』により、溢れ出る血の力を内包するその姿を。今すぐ傍へと馳せ参じ、頭を下げ、血族を託したいと思った。

それほどの血の力だった。どうやって得たかなど、問題では無かった。

『性格の変化を確かめるまではお待ち下さい』と壱与が止めなければ、すぐにでもそうしただろう。

これで視えない日巫女の血族の未来は救われる。そう『血』が言っているのだ。

だが、相変わらず未来の自分は、『ＢｌａｃｋＴｅｔｒａｇｏｎ』の魔方陣の苦しみに悶え、その先は視えない。日巫女が未来を視通す事ができないのは、確定していない場合か、未来で死んでいる場合だけだ。

自分は『ＢｌａｃｋＴｅｔｒａｇｏｎ』の魔方陣のせいで、数ヶ月後は生きていないのかもしれない、そう日巫女は理解した。

日巫女は自分の目で確かめる為、会合の翌日迄の間は自由にさせてもらう事を、壱朗の望みを叶える条件とした。

性格を知り、力を知った。これならば、クロゥディアに頼る事もなく、他の真祖からも、人間からも、血族を守ってくれるだろうと信じた。そして、死ぬ迄の自分を好きにしてもらう事を報酬に、血族を託して死ぬ覚悟を固めた。

その結果、守られたのは血族ではなく日巫女だったが。

「ほんに、旦那はんは接吻で起こしに来はる、白馬の王子様か、王女の危機に駆けつけはる騎士やろか……」

日巫女は自分の事ながら、何と乙女な考えかと可笑しくなった。

「これも旦那はんに愉しんでもらおと思て、処女の頃になったせぃやろか……？」

寝息を立てるミーシャの髪を指で梳かしながら、銅鏡に映る壱朗の姿を見る。そのお腹の上には、ティアが長襦袢を布団代りに寝そべっている。

「若いなぁ。……旦那はん、昨日はえろぉ喜んでくれはったけど、明日は何色にしよかいな……」

日巫女は現実に戻る前に、もう少し壱朗との愉しみに、浸っていたかった。

壱朗に我儘を言い、無理矢理買わせた３０種程の下着は、壱朗との夜以外は身に着けていない。日巫女は元々、和服の生活なのだ。必要なら和装下着もあるが、そんな物がなくとも、二千年かけて整えた日巫女の抜群の体形（プロポーション）は、崩れたりしない。

遊女の時もあった、華道の家元も務めた、薙刀道場の師範だった事すらある。

壱朗しか知らない女（壱朗の為に整えられた）ティアとは違う魅力に溢れている。女の魅力も、男の扱いも、積み重ねた経験が違う。夜の日巫女の表情や仕草は、幼い初心（ウブ）な少女であったり、妖艶な遊女であったり、抱く男の些細な変化（や抱き方）に対して、無意識に身体（や演技ではなく）が勝手に反応（感じるフリ）を変える。壱朗を飽きさせるどころか、底も見せない。

だが、日巫女は知っている。壱朗の実家、その部屋の天井には、特大ピンナップ（等身大ポスター）が貼られている事を。その美しい黒髪の女優（少し日巫女に似た）のピンナップが、十代の頃からずっと貼ったままな事を。壱朗の嗜好だという

そして、その女優はワザと着崩した白い長襦袢の隙間から、脱げかかった黒い下着と肌を煽情的に覗かせ、魅惑的な姿勢（ポーズ）で誘っていた。何故、長襦袢一枚きりの下が、ブラジャーとショーツなのかは分からないが、妖艶な雰囲気はわかる。

その嗜好の為だけの、下着だった。（再現する）

「……ほんで、ティアはんも長襦袢が欲しぃ、言わはってなぁ……」

眠っているミーシャの頬を、優しく指で突つきながら、一人で話

しかけている。
「……旦那はんの血ぃは、今の二十歳の姿でも、ミーシャ（未成熟で処女の真祖）ちゃんの血ぃよりも、えろぉ美味しいんどすぇ？……」
そう。吸血鬼は自分の血を飲んでも、何も感じないせいで壱朗は気づいていないが、日巫女の言っている事は事実だ。ミーシャにとっても同じ為に、そう話しかけているのだろう。もちろん、ミーシャには聞こえていないだろうが。
「美味どしたなぁ……でもな、十歳の頃のはもっと美味どすぇ？」
ミーシャも日巫女と同じく、壱朗の血で吸血衝動を抑える為の訓練をしている。だが、十歳の頃の血は飲んだ事がない。
「あんな血ぃ飲んだはったら、そら、人間なんか襲わんのは当前やわなぁ……」
ティアと壱朗は、そんな意味でも恵まれていた。
「……次は、いつ吸わせてくれはるやろか……」
日巫女は訓練の成果の見られない、艶やかな眼差しで、十歳の壱朗の姿に思いを馳せる。そこに、壱朗とティアが移動した事を知らせる為に、銅鏡が鈍く光る。

「……時間どすなぁ。ウチが別れを言うんは、壱与（いよ）か、それとも旦那はんにも言わなあかんのか……それとも……」
日巫女は自殺陣病（アポトーシス）を乗り越えた後、一度も未来は視ていない。壱朗が望まなければ、見るつもりもない。
もう、壱朗に我儘（全部）を言い倒す（任せる）。全ての未来を託すと決めていた。
「ウチはもう見せたぇ？　壱与（いよ）、あんたの想い（秘密）、覗かれてしまいますぇ？」

◇　◇　◇　◇

壱与は迷っていた。

――分からない、解らない、判らない、わからない。

目の前にいる、この真祖は気付いている。あたしのした事に。しかし何故だろう。彼方様の血技は『時間跳躍』と言っていた。つまり、探知系じゃない。なら、あたし達の巫術の様な事が、彼方様の符術でも可能なんだろうか。いや、先程の発言が本当なのなら、この四世から辿りついたみたいだから……

「無駄な思考はやめとけ。ティアにも俺にも筒抜けだ。巫術でも符術でもねぇ。お前じゃ考えてもわからねぇよ、『ＲｅｄＴｒｉｇｏｎ』を背負ってもな。……『壱朗様、『ＲｅｄＴｅｔｒａｇｏｎ』です。先日、自殺陣病を越えさせたのもお忘れですか？』……そうだったな……てゆうか、割り込むなよ。ティア」

「……何となく、気になりまして」

ティアの、とても１８歳の姿には見えない胸と腰のラインが、お札で出来たミニのワンピースというシュールな服装を、煽情的な物にしている。この場の雰囲気は重いはずなのだが、そうならないのはティアの服装と肢体が醸し出す雰囲気が、場を軽くしているからだろう。

「何でしょう？　そのやらしい目つきは。先程の約束はちゃんと守ります。なので、手早く済ませて下さい」

……早く戻って可愛がって欲しい。と、素直に言えないティアであった……」

「無駄なナレーションを付けないで下さい。私がどう思っているかなど、壱朗様はご存知でしょうに……」

壱与には、全く緊張感のない会話に聞こえるだろう。だが、これがティアの『血技』を使用した話術でもあった。

「で、三世の嬢ちゃん。とっとと話せ。ティアが『早く済ませて可愛がれ』って怒ってんだよ。その内、攻撃されそうだ」

「……話せば、日巫女様は助かりますか？」
壹与は縋る様に壱朗に問う。
「わざわざよ、丁寧に喋らんでいいぜ？　無駄だ。それと、日巫女とかお嬢ちゃんとか関係ねぇよ。気に入らなきゃ滅ぼす。それだけだ」
心を写し取った内容から、時間を稼げば誰か二世が来て、止めてくれるのでは、と期待しているのが伝わる。
「壹与さん、時間稼ぎは無駄です。今日は日巫女様とミーシャちゃん、それと我々三人……いぇ、そこのも入れれば四人ですね。計六人しかいません。皆さん、本殿の方に行っていますので。明日の夜迄は戻られません」
「……わかり……わかったよ」
やっと、無駄だと理解したのか、口調を変えて話し始める。
「私の受け継いだ血技は『預言』なんだよ。
ティアさんが日巫女様の元に来た、アレは百年以上前か。その時は、彼方様の家族を守ろうとする意味が、日巫女様にもあたしにも分からなかった。
それで日巫女様は『予知』で視られて、お識りになった。真祖の誕生を。その時は理由を理解しただけだったけど……あれは、そう。約十五年くらい前かな。日巫女様とあたしに同じ預言が出た。『生への執着を捨て、死の闇に抱かれ、苦しみ悶える』……わかるかい？　恐らく死の預言だった。前にも同じ様なのを、出した事があったからね。……勿論対象は死んださ。
あたしはまだいい。だけど日巫女様はダメだ。眷属が全員路頭に迷っちまう。あたしの弟分も。だから計画したんだ。日巫女様を救えるかもしれない、日巫女様の『予知』を完璧にする為に」
ティアは言葉よりも壹与の心に集中し、言葉で語られない細部まで写し取る。

「あたしの預言には、彼方様には途轍もない力があると出た。それを日巫女様にも伝えた。だけど、取り合ってくれなかった。生りたての真祖が、日巫女様を救う程の力を得るのなら、眷属を背負えるはずだって。その真祖を見極めて、眷属を託すって言うんだ。それで一人で計画したんだけど……」

壹与（いよ）の心をティアが読む。そして、必要な時だけそっと触れた手から、ティアの意識が壱朗へと流れている。壹与（いよ）の心の記憶と共に。

「彼方様が確実に生まれる様に、生まれた彼方様が、必ず日巫女様を助けてくれる様に、その為に……『アレはっ！』……ぇ？」

壹与（いよ）はティアが何故声を上げたのか、分からなかった。

「……っ！　壹与（いよ）さんっ！　貴女があの特大ピンナップ（等身大ポスター）を！……」

ティアは壱朗に伝わらない様に、手を離して文句を言う。

「……ティア？　何を言ってる？　特大ピンナップって……曾祖父さんに昔に貰ったやつか？　あれ？　お前が俺のお宝（エロ本）を漁るとか言うから、部屋には入れなかったハズ……なんで知ってる？」

「いぇ、その。……別に漁りたかった訳では、ないのです。ただ、壱朗様の若い頃の性癖が、気になったと言いますか、知りたかっただけと言いますか……」

しどろもどろになりながら、目を逸らし、意味不明な事を言うティア。

「それは答えじゃねぇだろうが。それに、そんな不順な気持ち（カミングアウト）の暴露（ト）は要らん。で、なんで知ってる？」

ティアが顔を背けた方に移動し、正面から問う壱朗。

「……」

更に逸らすティア。

「……」

追う壱朗。

「……日巫女様に教えて頂きまして……はぃ……」

ティアは諦めたのか正直に言う。
「……それで今日は長襦袢なんか羽織ってたのか……」
そんなティアの顔を両手で挟み、意識を読もうとする。
「……あっ、ダメっ」
『だ、だって、壱朗様はそのピンナップの女性を見て、大人になった訳だから、絶対に性癖の基になったハズだって日巫女様は言うし。それに日巫女様みたいな、綺麗な黒髪だったって自慢されたし。体形や肌の張りや艶では絶対負けてはいないけど、髪だけはどうにもできないし。染めたりしても、壱朗様は身体弄るのとか嫌いなハズだから意味ないし。日巫女様は壱朗様の反応を見て、一番興奮してた下着だけを買って来て、夜だけはそれをつけてるって言うし。後は肌襦袢ぐらいしか、真似出来るところはないし……』
壱朗は思う。
『この一瞬で一体どれだけ愚痴る気だ？　しかも、恥ずかしいなら考えるなよ……』と。

「し、仕方ないじゃないですかっ！　羨ましいモノは羨ましいんですっ！」
言い切るティアは顔が真っ赤だった……
「話、しなくてもいいかな……」
壱与は心底疲れていた。精神的な攻撃かと思うくらいには。
「いやいや、続けて貰おうか。で、必ず助けてもらう為に何だって？」
真面目に切り返す壱朗。ティアを引き寄せ、抱き締めてやりながら、続きを聞く。ティアは数分役立たずだと確信しながら。
「彼方様の曾祖父さんと仲良くなった。そのピンナップとかも、彼方様がそういう性癖になれば、日巫女様を好きになると思って、祖母のだとか言っていっぱい渡したし。曾祖父さんは毎朝必ず、神社の境内にもジョギングに来てたから」
「それで、ピンナップが俺に渡ったのか……同じ様なの貰った

な、確かに。
まぁ、お世話になったけどよ……『っ！』……痛っ。怒るなよ……」
太腿を抓られた壱朗は、心の中で講義する。
『元はと言えば、ティアが日巫女のとこに行ったせいだろ？』
『そうですけどっ……嫌なんですっ！……あっ、壱朗様、ダメ、今はっ……』
壱与（いよ）には見えない様に、抓られた場所と同じ太腿を、後ろから襲う壱朗。
「曾祖父さんは彼方様の事を、沢山話してくれた。『お陰で初めて付き合った彼女も綺麗な黒髪だった』とか、『次の彼女は弓道してる和装の似合う女』だとか……」
「話がそれてる、本題を話せ。お喋りだった事は、よく知ってるからな」
と言うよりも、ティアの抓る指が、爪が、『怪力』で強化され大変な事になっており、この話題は危険だと判断した壱朗だった。
『後で、ちゃんと、聞かせて、下さい、ねっ！』
『そんな余裕があったらな……』
心の中でそんな会話をし、『お前、散々出発前に問いただしたじゃねぇか』と、思いながら、ティアが使い物にならなくなるのを承知の上で、指を使って攻める。
『ですがっ、あっ、そんなっ、ダメっ。そこはっ……』
『符』で結界を張り、外に声も音も漏れる事の無い様に、気をつけるのを忘れない壱朗。コレだけで、壱朗がティアとの三千年の間に、どんな事をして来たのかが分かりそうなものだった。決して真面目では無かっただろう。
「で、曾祖父さんを使って、何をしようとした？」
「特には何も。ただ、引っ越しとかで、あの街からいなくならない様にとか。後は独り身の方がいいから、猫かぶってた奥さんの本性を教えたりとか……」

「あの頃、嫁が曾祖父さんとの仲が悪くなったのは、お前のせいか……」（離婚直前）

『そこはっ、褒めて上げますっ……あぁうぁっ……ゃうんっ』

『大人しくしてろ……』

壱与（いよ）の地味な妨害工作に、心の中で賛同するティア。二重に、頭の痛くなる壱朗だった……

「結果的に、ずっと彼方様は実家に居てくれたからね。困ったのは、去年の年末になってからだった。ティアさんは周辺付近に吸血鬼が入ってくると、追い返し始めたんだ。聞かない奴は無理矢理追い出してた。コレじゃ、確実に生まれるのか分からない。最悪、目の前に吸血鬼が現れれば一気に覚醒するかと思ってたんだけどね……」

「成る程な、吸血鬼を見たショックで覚醒させる、か。悪くはない。だが、それならなんでコイツは（犯人の四世）……」

「ラマルティーヌ卿に教えたのさ。もしかしたら、真祖が生まれるかもって。確実じゃないけどって言ったら、中途半端に三世を送り出して来てね。結局、傍観してやがって、役に立ちそうになかった。だから、近々死ぬ未来を持った、自分のトコの『蝙蝠化』ができる奴を拾いに行ったのさ。そしたら、いざ彼方様の目の間で『蝙蝠男（バットメン）』姿で正体を表すって時になって、蝙蝠男（犯人の四世）がティアさんの力に気付いてね。腐ってもあたしのトコの血族だったんだね。本気のティアさんの力を見抜いて、出るのを嫌がりやがった。どうせ死ぬのにね。そこにちょうど曾祖父さんが来ちゃったのさ。それで、蝙蝠男（犯人の四世）に襲われた。そして、蝙蝠男（犯人の四世）は京都に逃げ帰り、無事に彼方様は生まれ、日巫女様は救われた」

そして、壱朗達から反らしていた顔を、壱朗に向け、言う。

「本当なら、あたしは死んでるハズだったのに。何故か、蝙蝠男（犯人の四世）迄生きてるし。殺しとこうと思ったんだけど、ね」

悲しそうに言う、壱与（いよ）。恐らく自分も死ぬ事で、責任を果たすつもりだったのだろう。

「日巫女が助けろって言ったからな。助けてやった。それだけだ」

壱朗は、苦々しい雰囲気を隠せずに言った。

「……だが、その程度の事は予測済みだ。蝙蝠男（犯人の四世）の話も聞いた後だからな」

床に転がる四世（犯人）を、壱朗が蹴飛ばしながら言う事の、意図が分からない壹与（いよ）。

「何が聞きたいのさ。今迄の事は予測がついてたって事だろ？」

そう、たいして壱朗やティアが知り得なかった、貴重な話はなかった。

壱朗の嗜好の生まれた（ピンナップ）理由や過去（女）の話、妨害工作（本性暴露）の事以外は。

「壹与（いよ）さん、話して下さい。その為にこんな場を設けているのです」

壹与（いよ）に顔を向けられた時に、止まった壱朗の指技から逃れ、態勢を立て直したティアが冷たく言い放つ。

「何の話？」

シラを切るつもりなのか、思い当たらないのか……

「曾祖父様が、ご家族にお伝えになった経緯です」

「……やっぱりなんかあるのか、ティア……」

「はぃ……壱朗様の予想通りでした。間違いなく、壹与（いよ）さんが関わっています。壹与（いよ）さん、自分で話しますか？　それとも、私が言いましょうか？」

壹与（いよ）は動じた様子はなかった。つまり、彼女からすれば、壱朗にとって大事な事でも無いと思った内容なのだろう。

「聞きたいなら言うけどさ。……聞かれたのさ、『壱朗の嫁にこないか？』って」

「は！？　なんで！？」

壱朗は驚きのあまり、素で叫びながら、割と本気で頭が痛くなった……

第１６話　納め時（前書き）

プロローグの第０１話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第16話　納め時

意味がわからなかった。

何故、曾祖父さんが俺に嫁をあてがう？

「あたしを気にいってくれたらしい。離婚されて一年くらいだったからかもね。……彼方様、ティアさんが怖いんだけど……」

ティアの人が殺せそうな視線を受け、真剣に怯える壱与。

「ティア、来い。邪魔するな、俺の右側はお前だけだって言ってるだろ？」

そう言われ、いそいそと嬉しそうに壱朗の右腕の中へと、収まりに行くティア。

壱朗は、ミーシャの安眠が妨害されている気がしたが、気にしない事にした。

「結婚の事を言い出したのは、別に本気だった訳じゃ無いと思う。ただ、曾祖父さんに教えたからだと思うんだ。真祖になっちゃう事。もう時期も迫ってたし、家族にも理解してもらってる方が、後の始末がいいから伝えちゃったんだ。日巫女様を救ってもらいたい事も、全部伝えたからだと思う」

「曾祖父さんは何て言ってた？」

「『吸血鬼を見たのは始めてじゃないが、色々大変じゃのぉ。壱朗はそんな中に飛び込むのか。元気でやってくれればいいが……』って、言ってた。それで、年末に家族にも話をしておくって。説得は任せて、連れて行っていいぞって……」

壱朗は気付く、確かにティアがいなければ、一人でいきなり吸血鬼になっていたら、どうなるのか。少なくとも『帰属の儀式』のお

かげで、ティアから多少の知識を得て、何とか旅立った。
だが、何もなければ？　どうなっていただろう。だから、壱朗に吸血鬼の嫁を。曾祖父さんは、それに近い事を考えたのかもしれない。

「で、家族に伝えたハズの曾祖父さんは、死んじまった、か……どおりで親父達の物分りがいいハズだ。知ってやがったんだな……しかも、姉弟にも言うつもりだったのか。……初詣なんざ大晦日から行くのは、十年ぶりぐらいだって、姉貴も隆弐も愚痴ってたな。俺も同じだったが……
二人を無理矢理年末に、里帰りさせた理由もそれが原因か。帰って来るのが遅かったから、二人はまだ話を聞いてなかったみたいだが……」

壱朗は独り、頭の中で整理していた。それを考えれば、如何に家族に守られ、気を使われ、壱朗が去る前に家族全員が会える様にと、手配されていた事も理解した。

「気ぃ使いすぎだ。バカ親父め……曾祖父さん死んだ直後だってのに、息子の事ばっかり心配してんじゃねぇよ……」

壱朗は情け無い自分に腹が立っていた。家族の皆に気を使って挨拶に行ったつもりが、逆に気を使われていた。恐らく、八千歳になって変わってしまった雰囲気にも、何らしか気付かれていたのだろう。家族がそこ迄してくれる程、曾祖父が家族を説得していたであろう事実。単なる社会人だった壱朗は、それに気が付かず、寝正月を満喫しようとしていた。

壱朗は過去の自分の姿が、本気で情けなかった。

「曾祖父さん言ってた。『なんの取り柄もない平凡な家系から、やっと名前に相応しい男が生まれた。これで黒歴史にも意味が付くというもんじゃ』って。あたしはごめんって謝ったんだけど、気にするなって……」

吸血鬼としては可笑しいのかもしれない。人間に謝罪など。しかしそれは、壱朗の曾祖父さんと仲良くなっていた、壱与だからこそだったのだろう。

「あぁ、曾祖父さんなら、そう言うだろうよ。……普通は信じねぇだろ？　曾孫が吸血鬼になるとか。曾祖父さんファンタジー好きだったもんなぁ……コレは変えられる過去か？　無理だろうなぁ……散々試したもんなぁ……」

壱与は何とか謝罪し、怒りを鎮めようと言葉を選ぶが……

「ごめんなさい。あたしが蝙蝠男を連れてこ……『黙れよ……』……ひっ……」

壱与は見るべきでは無かったのに、見てしまった。壱朗の目を。

壱朗の瞳はもう、悲しみも悔しさも他のものは何も、映し出してはいなかった。

ただ、ひたすらに怒っていた。冥く、重く、目に光は宿っていなかった。

「……なんで真っすぐウチに行かなかった。ウチの家族に伝えなかった？」

壱与は必死になって、納得できそうな説明を、自分の中から探す。

「そ、それは……『黙れって言ってるだろ？　捻り殺すぞ？』……っ」

壱与の言い訳も、説明も既に全て伝わっている。ティアによって壱朗に。壱朗は誰にも回答を求めていなかった。ただ、理不尽にぶつけていただけだ。

「……『事故です、殺すつもりじゃ無かったんです』そう言って、蝙蝠男を突き出す。たったそれだけで、ウチの家族は安心したハズだ。

俺が人殺しの渦巻く世界に飛び込むって、知らずに済んだかも知れないのに。

……あぁ。分かってる、そんな事も幻想だと。調べりゃ、吸血鬼の世界がどんなモノなのかなんて、分かるに決まってる……だけどな……それでも！　家族には安心しといて欲しかったんだよ！　俺は！」

ティアは壱朗を慰める訳でもなく、諭す訳でもなく、首に腕をまわした。

壱朗の痛みは、ティアのモノでもある。あるがままを受け入れる。今の壱朗の存在感は、周辺地域にいる全ての吸血鬼を震え上がらせた。

間近にいるティアは、壱朗への想いがなければ逃げ出していただろう。

だが。ティアは此処にいた。何も言わず、ただ、そっと抱きついている。

「許さねぇ。絶対ぇに許さねぇ！　蝙蝠男（犯人の四世）は殺すぞ。文句はないな？」

壱朗は見ているハズの日巫女と、ティアに聞いている。二人は肯定するかの様に、何も行動に起こさない。壱与（いよ）は理解している。自分はもう、何もする事は許されないと。

壱与（いよ）は、勝手に気絶できる蝙蝠男（犯人の四世）が羨ましかった。自殺陣病（アポトーシス）の時の怖さとは違う。触れれば地獄に引きずりこまれそうな、怒り。ただそれだけの感情。

それは一体誰に向けられたモノなのか。壱朗にも分からなかった。

「三世の嬢ちゃん、てめぇはそんなもんじゃすまさねぇ。覚悟はい

いな？」
壱与（いよ）は覚悟を決める。願わくば、蝙蝠男（犯人の四世）と自分の命で済み、日巫女や他の眷属には及ばない事を祈って。

――そんな、壱朗を止めたのは、ティアでも日巫女でもなかった……

「パパ、怖い顔しちゃイヤ。ミーシャ、何かしちゃった？」
何時の間にか、壱朗の傍にはミーシャが居て、壱朗のお札のスラックスを握っていた。顔はもう既に、泣きそうになっている。
「ミーシャちゃん、邪魔したらあきまへんぇ。旦那はんは、今、ほんまに大事なお話をしとるんどすぇ」
ミーシャがいない事に気付き、追いかけて来た日巫女に肩を掴まれると、
「イヤ！　パパと一緒にいるの。パパが笑ってくれるまで一緒にいるの！」
そう言って、壱朗の足にしがみつき、離そうとしないミーシャ。

「……日巫女様、貴女は左手なのではなかったのですか？」
ティアは右側から首に手を回し、抱きついたままの姿勢で日巫女を見た。
「ティアはん……」
日巫女は、歩み寄ろうとして、一歩踏み出すが、立ち止まる。
ティアの瞳は日巫女を試していた、女として何をしているのかと。

「私は壱朗様と共にあります。苦しみも悲しみも、全て背負います。御覚悟がお有りで無いなら、左も任せられません。ミーシャは背負うつもりの様ですよ？」
ティアは壱朗の首から手を離し、左手を壱朗の背中に回す。そして、右手でミーシャの頭を撫で、ミーシャをも試すように視線を向

ける。

するとミーシャは上を向き、『んっ！』と言って壱朗に向かって両手を広げる。

「……あきまへん。あきまへんぇ！　ミーシャちゃん。旦那はんの左は、ウチのもんですぇ。誰にも譲りまへん。絶対に！」

日巫女はそう言って、ミーシャを後ろから抱え上げ、左手だけで支える。そして、ティアとは対称的に、右手を壱朗の背中に回し、二人で抱きしめる。

怒りで身動きすらせず、その存在感と威圧感だけが強まっていく壱朗に、壹与（いよ）は押し潰されないだけで精一杯だった。

しかし、壱朗に抱きつく三人は、そんな事は関係無いかの様に幸せそうだった。

「パパはね、ミーシャのやさしいパパじゃなきゃ、ダメなの。ね？」

そう言って、日巫女の左腕とティアの右腕に支えてもらいながら、壱朗の頭に腕を回し、頬に唇を触れさせる。

「恐（こわ）くなっちゃイヤ。ミーシャが悪い子なら、ゴメンなさいするから。笑って？」

「旦那はん、ウチもゴメンなさいしますさかい、笑っておくれやす」

「壱朗様、ご自分へのお怒りは、それぐらいに。全て、私と日巫女様が受け止めますので……ミーシャちゃんは、もうちょっと大きくなってからね？」

不満そうなミーシャにも納得してもらいつつ、諫（いさ）めるティア。

壱朗は三人がいてくれる事が嬉しくもあり、苦しくもあった。

曾祖父さんを死なせる原因になった自分が、幸せでいいのかと。

――壱朗の中に想いが渦巻く。

怒りは消えない。
曾祖父さんを殺した蝙蝠男（犯人の四世）。
独断専行し、事態を招いた壹与（いよ）。
知っていて何もしなかった日巫女。
未来を変える力を持てなかった自分とティア。

殺してもいいだろう。
いや、殺す。少なくとも蝙蝠男（犯人の四世）は殺す。
壹与（いよ）にも責任を取らせよう。
だが日巫女は？
ティアは？
俺は？

――そして、自分の生き方を覚悟した事を思い出した。

そう。壱朗は覚悟したはずだった。何を取り乱していたのか。
「ミーシャ。もういいぞ。お前の優しいパパだぞ？」
ミーシャがしがみつき、頼っていられる存在でいると。
「旦那はん……」
日巫女に、二千年を生きる強さを与えると。
「壱朗様。手つきが少しエロいです。自重してください」
この、少し生意気なティアと死んでやると。それまでは生き足掻くと。

「パパ、もう恐（こわ）くないよ？」
そう言って、もう一度頬にキスをするミーシャ。
「ミーシャ、ありがとよ。・・・・・・・・……・・・・日巫女」
ミーシャに礼を言い、日巫女に顔を向け、唇を重ねる壱朗。

「……んっ、っふぁ……あきまへんぇ？　旦那はんが怒ってええのは、ウチらが揃ってる時だけですぇ？」
「これからは、気をつけるよ……ティア」
「はぃ。これからも、変わる事はありません。壱朗様……『んぅっ』……」

ミーシャに笑いかけ、日巫女に苦笑し、ティアに頷く。
そう、これでいい。このまま生きれるところまで生きる。
そう心に再度強く刻む。
そうすると、少しだけ許された気がする壱朗だった。

四人は寝室へと向かっていた。
「で？　何でミーシャがあの場にいたんだ？」
眠ったミーシャを抱え上げ、頭を撫でながら、聞く。
「気ぃ付いたら、部屋から出て行ってたんですぇ。はしこいわぁ」
「嘘ですね。壱朗様が、私に『唯一無二の永遠たる右』だって仰って下さった時に、悪寒を感じました。その時に誤って起こしたんですよね？　八つ当たりで」
勝ち誇りつつ、右側後ろからついてくるティア。
「旦那はんは、そこまで言うてまへんぇ。なぁ？　旦那はん」
左側を確保しながら、否定させようとする日巫女。
「ミーシャちゃんでもわかってる事に、気付けなかった日巫女様には、聞こえなかったんですよ。ねぇ、壱朗様？」
そんな二人に、視線で怒っていると伝えながら、小声で話す。
「ミーシャが起きたらどうする。起きたら、お前ら二人で寝かしつ

けろよ？」
「だって、日巫女様が誤魔化そうとするから……」
「ティアはんが嘘吐かはるから……」
全く同じ様に膨れる二人。

「素直じゃない奴とは、今日は一緒に寝れんな」

「つぃ嫉妬して、目ぇ離してしもうてん。かんにんぇ」
「少しだけ、誇張が混ざってた気が、しないでもないです」
急に素直……になる二人が、とても可愛いと思える壱朗だった。
「受け止める、そう言ったよな。覚悟しとけ？　今日は収まりそうにない」
二人が喜んでいる様な気がしたが、前を歩く壱朗には、本当のところは分からなかった。その後、翌日の夜に本殿から人が戻るまで、ミーシャは符で夢を見させたまま眠らせ、壱朗と二人は寝室から、一歩も外に出なかった。

――因みに、壹与（いよ）は蝙蝠男（犯人の四世）と同じく『縛符』で簀巻き状態にされているのを、翌日の夜に同僚が発見するが、残念ながら誰にも解呪できなかった。
また、食事係を兼ねる巫女は、夜中から十人前以上の料理を作らされ、御代りを次から次へと要求する四人に、泣きを見る事になった。
別の掃除係を兼ねる巫女は、壱朗の寝室を掃除しようとして篭った匂いに当てられ、別の眷属と共に部屋に篭ってしまった。壱朗は寝室が使えなくなった為、ミーシャの寝室と化していた、元日巫女の寝室で、四人並んで寝る事になる。
いや、並んでではなく二人が左右に、ミーシャは壱朗の上で寝ていた……

◇　◇　◇　◇

いろいろと不都合を生んだ騒動は、壹与の処分で一旦、落ち着く事になる。

「それでは日巫女様。お身体にはお気をつけ下さい」

間延びした話し方はやめたのか、壹与は日巫女に別れの挨拶を告げる。

「ウチの心配は要りまへんぇ。それより壹与、旦那はんの符や、一日しか寝てない感覚で起きれますぇ。起きた時に寝ぼけんように、おきばりやす」

日巫女は相変わらずな調子で、軽口をたたく。

この場には、日巫女と壹与しかいない。

壱朗は面倒だと言って、近くにあるという坂本龍馬の墓へと散歩に行っていた。ティアとミーシャは壱朗の実家へ行ったまま、帰ってきていない。

ミーシャには深くは説明しないという壱朗の方針で、二人が実家から帰って来ない内に、眠らせる事になった。

「はい。彼方様に、御迷惑をお掛けしました。と、お伝え下さい」

壹与は神社の地下深くで、地脈から少量ずつ力を吸い上げて眠る。死ぬ事もなく、ただ五百年ずっと。その間は壱朗の符術で、延々と夢を見続ける事になる。

柩は壱朗の封印が施され、一度閉めるとティアか壱朗にしか開けれない。

「旦那はんにも、屋敷のみんなにもあんじょう伝えときますよって。

弟分やったかいな？　必要なら、旦那はんが鍛えたるて言うてはったさかい、安心してお眠りやす」

「はい。では、日巫女様。またお会いできる日を、お待ちしております」

そして、壹与は棺桶に入り、日巫女の手で符で封じられ、眠りについた。

簡素な別れだった。

壱朗が下した決定は、曾祖父さんの為に、人間としての処分も加える事だった。

蝙蝠男は、死を選べない様に蝙蝠男自身の魔力で封じる『自縛符』で封じられ、動けない様にして警察機関に引き渡す事になった。

壱朗の符が人間に破れるとは思わないが、その時は直ぐに分かる様にはしてある。

蝙蝠男は、自分の血の力が符に吸い尽くされて途絶え、効力を失うまで生き続けるだろう。動けないまま。

壹与は壱朗の家族に謝罪した後、五百年程眠らせる事に決まった。眠っている間は、ずっと曾祖父さんとの記憶が流れ続ける符で、縛られた状態で。犠牲になった曾祖父を忘れさせない。それが壱朗の決めた罰だった。

家族への謝罪は、壹与の我が儘だった。独り善がりのケジメだろう。

壹与は蝙蝠男を連れ、壱朗の実家へと向かった。壹与のせいで手違いが起きた事も、蝙蝠男を警察に引き渡す事も全て伝え、土下座して詫びた。そして、そのまま壹与は壱朗の父親と共に、蝙蝠男を警察機関に引き渡しに行った。

後にティアは壱朗に語った。壱朗の家族はみんな笑っていてくれたし、壱朗が復讐で手を汚す事がなかった事に、ホッとしている様

子だったと。

何故、ティアだったのかと言うと、いきなり行っても理解されないだろうと、嫁と認識されているティアが付き添いで行くと、張り切って付いて行ったからだ。

壱朗の家族に『嫁』と認識されている話で、日巫女を悔しがらせる為という理由が、大きな割合を占めていそうだったが。

壱朗は、出て数ヶ月で戻るなど恥ずかしいと、一緒には行かなかった。

ティアはミーシャを連れて行き、壱朗の家族に養子に引き取ったと説明した。血は繋がっていなくても、壱朗をパパと呼び、壱朗のアルバムを見て喜ぶミーシャの可愛さに、家族一同はミーシャを可愛がった。祖母の民子と母の美津子など、着物を引っ張り出してはミーシャとティアに着せ、持って帰れと押し付けた。

一日の予定が三日になり、最終的にミーシャが『パパに会いたい。抱っこして欲しい』と言い出すまで帰らせてもらえず、結局一週間滞在した。

世間の狭い田舎の恐ろしさを、壱朗が知るのは次の大晦日の事になる。ミーシャとティアを壱朗の父が連れて歩き、商店街の面々に散々自慢した。二人が帰る迄、会社を仮病で休み、商店街にたむろしている子供すら帰って来ない淋しい中高年に、見せびらかし続けた。その淋しい中高年の暴挙によって、次の大晦日が大変な事になるのだが。

そんな事になっている事は露程も知らず、壱朗は坂本龍馬の墓を見た後、いつかの宴会の茶屋で茶を飲んでいたのだった……

第１７話　御用聞き（前書き）

プロローグの第０１話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。
諸事情により、『門』（ゲート）を『隧道』（トンネル）に変更しました。漢字の読みは「ずいどう」です。ご注意ください。

第17話　御用聞き

「終わった、か。曾祖父さん。これでいいよな……？」
壱朗も答えてくれるとは思っていないが、何となく呟いた。

あれから四日、ティア達はまだ帰っていない。日巫女は、陰陽師の爺さんとの会合らしい。桜は散り、五月に入って、世間ではゴールデンウィークも終りを迎えている。
京都の街も、連休最後の観光客で騒がしくなっているだろう。
この街の美しさに心奪われながら、桜餅を齧り、茶を啜る。

そんな年寄り臭い事を好む壱朗だったが、着ている作務衣の前を正しながら、先程からずっと動かない人の気配に、背中を向けたまま声をかける。
「何か用事かい？　人間の女刑事さん？」
視線を送って来る者からの返事はない。
「そこでずっと立ってたいなら良いが、そうでないならこっちに来いよ。話相手ぐらいならするぜ？」
警戒しているのか、それとも決心がつかないのか。一向に返事はない。
「彼方様、どうされますか？」
先程、『恐らく刑事だと思いますが、女性が覗いています。如何なさいますか？』と聞きにきてくれた、茶屋で店員をしている四世が再度、対応を聞いてくる。
「俺に用事なんだろうがな。ほっといてやれ。もし、こっちに来るようなら、御茶と御茶請けを出してやってくれ」
今のこの茶屋は、中にいるのが吸血鬼と知っていて、その上で会

う意思がなければ、入れなくなっている。
「わかりました。失礼しました」
お辞儀をし、店内に下がる店員の四世。あの和服は可愛いな、ミーシャ用とかは無いかな、等と壱朗は考えていた。

そのまま、三十分くらい時間が流れ、壱朗は面倒になり行動する。
相手は刑事だろうから、張り込みなどで動かずにいる事には慣れているだろうが、壱朗はそうではない。
「来ないのなら、帰るぞ？　あんたらの追いかけられない方法で。良いならそのままジッとしてろ」
そう言うと立ち上がり、移動するフリをする。
「お待ち……下さい」
ようやく立木の影から声がかけられ、女性が出てくる。
「……はぁ。やっとかよ。アンタが茶屋の見える位置に来た時点で、来るのは分かってんだよ。さっさと用件言ってくれ……ぉーい、持ってきてやってくれ」
やっとの事に、疲れながら店員の四世を呼ぶ。

壱朗の前に姿を表したのは、黒髪はショートカットに整えられ、銀色の縁の眼鏡をかけた、ビジネススーツを上手に着こなしている女性だった。年は三十はいってないだろう。顔立ちは整っている。当たり前だろうが。

「あの……『まず座れ、な。お嬢さん』……いぇ、私はもうお嬢さんなんて、呼ばれるような歳では……」
「俺に言わせりゃ、日巫女でもお嬢さんだよ」
彼女はそれを聞き、そういう事を言う人なのだと理解した。そして、座る。壱朗とは正反対の端っこに。

壱朗の傍には、妻折の野点傘が立っており、緋色の毛氈を掛けた

床几台の端に、壱朗は座っていた。

「……まぁいいけどよ。で、何の……『彼方様、お持ちしました』……おぅ。まずは茶だな。ん、ありがとよ」

「彼方様は、御代りは如何ですか？」

「貰おうか。お嬢さん、御茶請けを選びな。御茶は玉露だぜ？　緑茶や玉露が嫌い、とか変わった好みはねぇよな？」

四世の店員が持った大きなお盆には、海苔煎餅、牡丹餅、芋金鍔、蕨餅、椿餅など、様々な和菓子が十種類ほど乗っている。

「いえ、私は職務中ですので……『いいから選びなって』……はい……」

「ったく。聞き込みで家に上げてもらえば、茶を出される事もあるだろうに……」

女性刑事が芋金鍔の皿を手に取ったのを確認し、壱朗は海苔煎餅が数枚入った木製の菓子器を取る。

「……此処は自宅ではないですよね？」

「あぁ？　自宅みたいなもんだ。なぁ？」

そう言って、お茶を注いでいる四世の店員に声をかける。

「フフッ。そうですね。彼方様ならば、京都の三割は自宅と言えますよね？」

「えっ？　京都の三割って……あの？」

流石に広すぎると、冗談にしか思えない話に、女性刑事は首を傾げる。

「ノリが良過ぎるのも問題だな。信じてもらえやしねぇ」

壱朗が不貞腐れてそう言うと、女性店員は言い返す。

「それはお互い様です。こんな接し方して、文句を言わない真祖の方など、彼方様ぐらいです。日巫女様も基本は無視でしたよ？　彼方様が来られるまでは」

店員の四世は、『他の同僚に言っても、信じて貰えませんでした』と言って、店内へと引っ込んだ。

壱朗は御茶を飲みつつ、話しかける。
「で、何のお話かな。お嬢さん」
「何と、取り立ててあるのではないのですが……」
「……？　じゃ、何しに来たんだ？」
「顔を見に、でしょうか……はい」
女性刑事は芋金鍔（いもきんつば）を丁寧な仕草で食べ、『あ……美味しい……』と呟き、景色を見る。
「綺麗だろ。この京都で一番の場所かもしれねぇな。どんなに住処を変えても、此処だけは死守させてるって、日巫女が言ってたからな」
「『ヒミコ』とお呼びになっているのは、日本唯一の真祖のお方で、吸血鬼世界最高齢と言われる日巫女様の事ですか？」
「他に誰か日巫女っているのか？」

壱朗は何を当然の事を、と思っているが実はそういう問題ではない。世界中の大富豪や政治家の後ろには、吸血鬼の恩恵が多々あった事が、既に周知の事実だ。あくまで政府関係者や警察などの、それなりの人間の中では、であるが。そういう意味でも吸血鬼の真祖とは、無視できない存在なのである。

「あぁ、忘れてたな。名乗っとこう。俺は彼方、彼方壱朗だ。認めた吸血鬼以外には、名前を呼ばせねぇつもりだが、人間は別だよな。どうせ戸籍も残ってるしな」
そう。壱朗はこの時代では、まだ二十八歳の戸籍があるのである。
「あ、はい、私は京都府警、……吸血鬼対策室室長補佐管理官……の神凪（かみなぎ）美沙緒（みさお）です」
長いと言い難いのか、一生懸命という感じに言いきって、美沙緒は警察手帳を取り出して見せた。警視らしい。
「はぁ、で？」

壱朗はさっさと本題に入って欲しいのだ。本当に本題がないなら、二人はお茶しているだけになってしまう。
「えっと、『で？』と言われましても……」
「……ナンパ？　『血の十字架（ブラッディクロス）』はつけてないみたいだけど？」
「あ、いえ、……そう言う訳でもないです。ただ……」
美沙緒は語彙が少なく、会話のテンポが悪い。話がなかなか進まないが、時間はたっぷりある壱朗は、仕方ないので気にせず待つ事にした。
「ただ？」
「……その、壱与（いよ）様が、普通じゃ考えられない、『符』で捕まえられた吸血鬼を出頭させられてから……それから、直ぐに反応がなくなりまして……」
「それで？」
何となく、美沙緒の事が分かり始めた壱朗は、この話を楽しむ事にした。
「……調べた結果、真祖の方が二名程、日巫女様の元においでだと言う事で、……私がその方の担当になりそうです……」
「担当って、何をするんだ？」
「特には無いのですが、なんと言いますか、御用聞（パシリ）きみたいなものです。と言えと言われてます」
「『そう言え』って言われてますって言っちゃって良いのか？」
「……あ。え、と。……嘘です」
「もう遅い。まぁ、聞かなかった事にしてやるが」
「……あ、お願いします……優しいんですね……」
何となく、ゆったりと進む会話も、嫌いではない壱朗だった。
「ま、こっからは俺の独り言な？
恐らく警察は真祖が生まれた事で対外的な、勿論対国家の問題も含め、優位になる場合が出てきた。しかも、幼い真祖が二人も。ところが困った事に、今まで友好的だったはずの日巫女が、何故か急に勝手な行動に出た。日本にイキナリ、吸血鬼を集めての会合をし

てみたりな。さらにおかしな事に、過去に会合のあった場所は、一時的に治安が悪化するのに、今回はそれがない。何が起こってるのか知りたいが、何故か四世達の口も硬い。仕方が無いからいつも通り人を派遣して、何があったのか聞いて来させよう。と、お偉方は考えた。って感じかな？」

美沙緒は、少し嬉しそうに、小さめに手を叩いている。

「で、美沙緒ちゃんは、吸血鬼に付くのは何人目？」

少し考える風にして、答える美沙緒。

「……二人目です」

「……で、何人殺した？」

壱朗は何でも無い事のようにアッサリと聞く。

「……え、と。……え？」

気付くのは遅いが、数を口に出さないあたりは、褒めるべきかもしれない。

「とりあえず、殺した事があるのはわかった。おーぃ。お姉ちゃーん」

店員の四世は、着物姿で器用に走って来た。

「はいっ。何でしょう。彼方様」

「『お姉ちゃん』って好い加減呼びにくいな。名前なんだっけ？」

この店員は会合の後、御馴染みになった。前は他にも居たはずだが、最近はこの娘しか居ない。ミーシャが珍しく懐いているようなので、別に問題は無いのだが。

「一応、初めての時に名乗りましたよ、彼方様……水無月（みなづき）です」

水無月（店員の四世）は、壱朗を睨（にら）みながらそう言った。

「ごめん。ど忘れだよ。ところで……

ちょっとした、お手伝いを頼みたいんだが……えっと『魔血晶』背負ってたっけ？」

壱朗は知りたい事があったので、この状況はちょうど良い機会だ

と思っていた。
「はいっ、一応、『黄蘗の Ｙｅｌｌｏｗ 二角魔血晶 Ｄｉｇｏｎ』を背負わせてもらってます」
「……今から結界発動するから、本気出して見せてくれな。わかった？」
壱朗は懐から符を取り出し、床に円を書き数枚貼ると、その中に入らせる。
「は、はぃ。でも、彼方様が見る様なものでも、ないと思いますが……」
いきなりな話に焦る、水無月店員の四世。
「んにゃ。見るのは美沙緒ちゃん。俺のも見せるしね」
水無月店員の四世はその意味を理解し、頭を振って返事をする。要は、真面目に力を見せるという事。壱朗が真剣になった事を理解し、邪魔しないようにと言葉数を減らす。

「え、と。あの……」
美沙緒は、何が始まるの分からず、戸惑うばかりだった。
「美沙緒ちゃん。今から彼女に本気を出してもらうから、ちゃんと見ててな？
よぉーし、良いぞ。やって」
「はいっ！」

そう返事をした瞬間に、水無月店員の四世の周辺には魔力が溢れ、人間でも見えるレベルの揺らめきが起こる。
「……ふぅーーー。りゃっ！」
水無月店員の四世は空気を少し吐くと、魔力を維持したまま、壱朗の声を待っていた。
着物で見えないが『黄蘗の Ｙｅｌｌｏｗ 二角魔血晶 Ｄｉｇｏｎ』の魔方陣が、恐らく浮かんでいるのだろう。背中側が特に揺らめきが大きい。

やはり四世という血の濃さでは、砂漠で陽炎が揺らめいているような雰囲気が、限界だった。しかし、壱朗の思った通りだ。日巫女の眷属は血の力が強い。

もしかすると、眷属の数に関係してるのかもしれない。

「……ありがと。もう良いよ。きっと、四世でも、優秀な方なんじゃないか？」

壱朗がそう声をかけると、水無月（店員の四世）は『ふぅ』と息を吐き、円から出て壱朗の方に寄って来る。

「えっと、分かりません。日巫女の元にいると、闘う事があまり無いので……」

「……そか、良い事だな……さってと。それじゃ、俺もやるかな」

空気になっている美沙緒は放って置いて、首を鳴らし、準備を始める壱朗。

美沙緒の事もあったが、水無月（店員の四世）に自分の実験に付き合って貰った事に、少し罪悪感を持っていた為、御礼をしておく事にした。

「あ、そうだ、口止め料とご褒美あげよう」

そう言って壱朗は、自分の爪で手の甲を切ると、滲（にじ）む血を玉露の入った湯飲み茶碗に垂らす。

「……ほれ。……他の眷属には内緒だぜ？」

差し出された湯飲み茶碗を受け取りながらも、水無月（店員の四世）は内心ではかなり驚いていて、念の為に聞いてみる。

「良いんですか？」

「あぁ、ついでに、コレ持っててくれ」

壱朗は作務衣（さむえ）を脱ぎ、肌着も脱いで、背中を晒す。

「……美沙緒ちゃん。初めてだから半分でいくぜ？　気をしっかり持てよ？」

「……え、あの？　う。はぁ。はい」

しどろもどろに返事しながら、下腹に力を入れた様だ。
そして壱朗は、床に貼った符の結界の力を最大にし、ゆっくりと自身の力を半分まで開放を始める。

「フゥーー。……ハッ。クゥーー」
少し不思議な呼吸で、重ねて掛けてある、魔力を抑える結界を解除する。

すると、陽炎のような揺らめきなどではなく、ハッキリと壱朗の周辺に、魔力の竜巻の様なモノが見える。
『フィィィィン』という、何かの風切り音のような音が、鳴り続けている。

壱朗の背中には、正八角形を内包する黒い魔方陣が、徐々に描かれ始めていた。それに合わせ、周囲への圧力が増大する。
そして『魔血晶』は八個しか外に出ていなかった。

「『漆黒の店員の四世Ｂｌａｃｋ八角魔血晶Ｏｃｔａｇｏｎ』……初めて見た……綺麗……」
水無月は、会合の時は三世との衝突を考慮し、留守番だったのだろう。
「……っ……」
美沙緒は水無月がいる事でなんとか正気を保っているが、独りで耐えられるかは判らなかった。圧力に必死に耐え、ただ黙って、壱朗の背中に描かれている『漆黒の店員の四世Ｂｌａｃｋ八角魔血晶Ｏｃｔａｇｏｎ』の黒い魔方陣を見つめていた。

そして壱朗はゆっくりと元に戻す。一気に戻すと、気圧や魔力濃度の変化で、竜巻が本当に起こりかねないのだ。すぐに消えるが。

茶屋の備品を壊す訳にはいけないので、そうしている。

「どうだい？　見れた？」

「……ぁ……は……い……」

美沙緒は、顔は真っ青で、肩は震えており、その場で失禁しなかった自分を、褒めてあげたいと思っていた。

「ふむ、御手洗い行って、顔見てきな」

美沙緒は勧められるとおりにする、しかできなかった。

――――美沙緒の頭の中は混乱していた

あり得ない。あんなの、見た事ない。『Ｙｅｌｌｏｗ　Ｄｉｇ（黄蘗の二角魔）ｏｎ（血晶）』を持っていると言っていた女性の方は、まだ戦った事のあるレベルだった。でも、彼方壱朗と名乗っていた男性のは違う。『ＢｌａｃｋＯｃｔａｇｏｎ（漆黒の八角魔血晶）』と言っていた。アレは戦うとか言っていいレベルじゃない。アレは象と蟻のレベルだ。間違っても怒らせちゃいけない。それだけは絶対に伝えないと……

少し時間を置いて、美沙緒が戻ると、水無月（店員の四世）が正座させられていた。

「……うぇ～ん。すぃませぇ～ん。だって、あんなの始めてだったんです～」

あんなの、我慢できません。ずるいですよぉ～」

「ったく。気をつけろよ？」

壱朗は軽く、許してやる。

「はい。戻って良いですか」

水無月（店員の四世）は、自分が割ってしまった湯飲み茶碗を、持ったままだった。

「あぁ。この茶屋、ちょくちょく来るつもりだから、よろしくな」

「はいっ！　だから、たまにお願いしますっ！」

水無月（店員の四世）の要望は、他の者に聞かれたら怒られるどころか、避けら

れるだろう。それ程、真祖から血をもらえるというのは、珍しい事なのだ。

「美味しいお茶請けが、出てきた時にって事にしようか」

「……約束ですよ？」

そう言って、水無月（店員の四世）は店内に戻って行った。

「さ、て、理解したかい？　美沙緒ちゃん。首輪、着けれそう？」

壱朗は先程の独り言では言わなかった、美沙緒がここに来た理由が、可能かどうかの感想を聞いてみる。

「……無理……どうして？」

美沙緒は首を左右に振りながら言う。

「見せた理由？」

「それも、だけど……生（重積）りたてって聞いた（八角魔血晶）……」

壱朗の『Ｂａｃｋ（漆黒の）Ｔｗｉｃｅｏｃｔａｇｏｎ（八角魔血晶）』はまだ見せていない。美沙緒には『Ｂｌａｃｋ（漆黒の）ｏｃｔａｇｏｎ（八角魔血晶）』でも十分だったはずだ。

「美沙緒ちゃん。ここ迄はサービス。こっからは代価が要るよ？」

「……血？　それは困ります……」

美沙緒は眉を顰（ひそ）め、壱朗もやっぱり唯の吸血鬼かと、思った。

「ははっ。未だに処女ってのは良い覚悟だけど、『神凪（かみなぎ）』……『巫（かんなぎ）』の家系って事だろ？　巫術を扱う巫女が、吸血鬼に血をやっちゃいかんわな。それに血なんて要らんよ。吸血鬼の血で、満足してるからな」

「……？　どうして？」

恐らく、美沙緒が巫術を扱うのがわかった事と、血が要らない事だろうが、教えてはやらない。

「対価。用意したら教えてあげるよ？」

壱朗が言うと、今度は指を眉間に当て、困った顔になる美沙緒。

「何も、ないです……でも、知りたい、です……」

壱朗は楽しんでいた。内心の冷静な判断とは別に。

恐らく美沙緒の家は、警察と巫術師の家を結ぶ、パイプ役だろう。どちらにしろ監視モドキが送られて来るのなら、面白い方がいい。

この娘を傍に置いておけば、ティアの血技で情報も手に入る。悪い事ではない。秩序の維持の為、ルールを守れない吸血鬼を捕縛し、引き渡すつもりだったのだ。誰かがパイプ役になってくれれば、楽に事が進みそうだった。

「で、いつから御用聞(パシリ)きになるの？」

「着任、するのは、明後日の予定でした。……けど、弟が……」

「弟？　ふむ。と言う事は、着任前に顔を見に来たって事？」

「はい。失礼、かも、知れないけど、大した事ないなら……犯罪者、吸血鬼を、狩る方に、戻して貰おうと……」

美沙緒は隠す事は諦めた様だ。壱朗は感心していた。壱朗の力を見て、化け物と怖がるでもなく冷静に判断し、理解して接している。どうやらこの世界に関わって、長い様だった。

「でも、美沙緒ちゃん。その情報が対価だって、言えばよかったのに。じゃあ、もうちょっとだけ聞きたい事、聞けたのに」

「……あ……じゃあ、教えて下さい……」

無表情に見えるが、微かな違いがあり、物怖(ものお)じしないところも気に入っていた。

「どうしようかな？」

「……ずるい……」

拗ねる美沙緒に、昔のティアを思い出し、教えてやる事にした。

「何が知りたい？　よく考えて、一つだけ教えてあげよう」

これはテストみたいなモノだった。壱朗の中での、美沙緒の立ち位置を決めるテスト。落第すれば、どうでもいい一般人扱いをするだろう。

「……えと。……」

美沙緒は考える。壱朗の顔は笑っているのに、不思議な雰囲気を感じる。失敗できない。美沙緒が弟に、筆頭巫術師の座を奪われた試験の時のように、雰囲気を重く感じていた。

「……何故、吸血鬼は血を吸うのですか？」

第１８話　事情（前書き）

プロローグの第０１話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第18話　事情

この茶屋はその立地条件のせいもあり、街の喧騒は聞こえず、静かなものだった。吸血鬼の聴覚であえて聴こうとしなければ。

そんな静かな雰囲気の中、壱朗は驚いていた。この娘（美沙緒）は掘り出し物だった。

『何故、吸血鬼は吸血するのか』いい質問だ。若い真祖が知らなくて当然の答え。どこ迄知っているかで知識の深さを、どう思っているかで、その性格や気性を。壱朗を試すにはもってこいだった。

そして何より、人間が知り得ない事を聞ける可能性があった。壱朗が『黙約であろうと必ず約束は守る』、そう言われる高位の吸血鬼であれば。

嘘を吐く、知らないフリをするのは簡単だった。が、それでは真祖のプライドが許さない。通常は。壱朗にはそんなモノはないが、嘘を吐くのが嫌いだった。

だから答える。

「合格。だな、美沙緒ちゃん。いい御用（パシリ）聞きになるよ。嬉しいかは別にして、な」

「……よかった。また失敗かと思いました」

何故か、御用（パシリ）聞きになりたいと言っている事には、気付かない美沙緒だった。

「それはまた、気になる発言だな。だが今は、約束を守ろうか」

壱朗はそう言って、質問に答えた。

――壱朗は答えた。

吸血鬼は直接生きている者から吸血する事で、血液以外に気、エーテル、プラーナ、魔力など様々な名で呼ばれる、不可視のエネルギーを取り込む事が可能だ。それ故に少ない吸血量でも高エネルギーを得られる、人間の吸血を好む者が多い。

生物なら全ての者が持つ、幽星神体（アストラルボディ）。その幽星神体（アストラルボディ）のエネルギー変換効率と発揮する結果が、吸血鬼と人間とでは違う為に、高エネルギーを含む食事を欲する。故に高級嗜好品として、吸血を好むのである。通常の食事でも生活はできるのだが。四世以下の者の多くはそういう理由だ。

しかし、高位の者は違う。

かなりの確率で普通の人間には、自分の意思では活用できないエネルギー。気や魔力、生命力、精神力などと呼ばれる力を、吸血鬼は何種類も視認し、理解し、使用できる。

それを使って行われる代表的なモノが『能力』と『血技』だ。

その行使には多大なエネルギーが必要で、吸血でのエネルギー補充が最も効率が良い、というのが高位の吸血鬼の理由だ。その結果が化け物と呼ばれる力、『魔血晶』を背負った、本来の吸血鬼という存在だ。

吸血鬼の大半を占める、四世以下の者や『魔血晶』を背負わぬ者は、『血技』が使えない者が多く、前者の様な理由で吸血しているのだろう、と。

壱朗は当たり前の部分を省き、重要な点だけで答えてやった。

「ってとこかな？」

「……彼方様は、高位の吸血鬼、ですよね？」

「んー、言い方が硬いな。様づけは普段は禁止。吸血鬼はみんなそう呼ぶしな」

美沙緒は、目を少し泳がせ人差し指を立てた後、敬称を変える。

「……じゃあ、彼方さん。は、高位？」
いちいち反応が可愛いと、人間だった頃の好みを思い出しそうになる壱朗。
「……イイ事教えてやろうか？……コレだけは、誰にも秘密に出来る？」
美沙緒が聞いた事は、真祖なのだから当然だ。しかし、二つ目の質問に答えるあたり、何時の間にか美沙緒を甘やかす壱朗だった。
「約束、します。秘密」
美沙緒は『ぐっ』と握り拳を作り、頷き返す。

「俺が吸血鬼の中で最高齢。日巫女程度なら、近所のいたずら小娘と変わらない」
壱朗が掌を口に添え、こっそり言う。態度は巫山戯（ふざけ）ていたが、美沙緒は直感で理解した。この吸血鬼は嘘を言っていない。
そう、見た目通りの年齢ではないのだと、理解した。

「……彼方さんは、私が御用聞（パシリ）きになったら、傍に置いてくれますか？」
「知りたい事は、対価を払って知る覚悟をする事と、命を懸ける覚悟があるなら。それなら許可しよう」
命を懸ける。美沙緒はその意味を考えるが、無駄だと思い出して、答える。
「明後日から、よろしくお願いします」

壱朗は犬歯を出して笑うと、美沙緒の頭を撫でながら言う。
「ヨロシク。美沙緒警視殿」
美沙緒は少し嬉しそうに、コクンと顎を少し引く事で答えた。

「ちなみにな、美沙緒ちゃん」
ショートヘアーに銀縁眼鏡、更にスーツという姿のわりに、いちいち可愛い仕草の多い美沙緒を苛めたくなった壱朗は、ワザと勿体ぶって言う。
「……？」
『何だろう？』と不思議そうに首を傾げる美沙緒に、壱朗は事実を告げる。
「その御茶と御茶請けで、値段は五桁だ。もちろん一人分な？」
あまりの値段に驚き、御茶を取り落としそうになる美沙緒に、更に言う。
「その湯飲み茶碗、秀吉の頃の物らしくてな。一個で国宝級だと」
秀吉の頃というと利休のいた頃だ。湯飲み茶碗であろうが、とんでもない値段がついていてもおかしく無かった。
「～～～～っ！！」
熱い湯飲み茶碗から手を離せなくなり、涙目になりながら意味もなく左右を見ている。そして考えが浮かばないのか、必死に湯飲み茶碗を両手で持つ美沙緒。
「大丈夫。さっきの店員も割ってたろ？　何個もあるんだよ。気にするな。作った陶芸家もまだ生きてる、割れたら作ってもらえばいい。」
慌てて割らない様に、置く場所を選ぼうとする美沙緒に、教えてやる壱朗。
「あ……」
美沙緒は気付く。作った陶芸家も、秀吉の時代から生きている吸血鬼なのだと。しかも、何個も作って渡すと言う事は、眷属か何かだろう。やっと安心し、それでもゆっくりと湯飲み茶碗を床几台（長椅子）に置く。
「……もっと、最初に言って下さい……」
「怒ったか？」
そう言う壱朗の顔は、無邪気な少年のようで、美沙緒は怒るに怒

れなかった。
「……騙されました……」
「おいおい、人聞きの悪い事言うなよ。俺は黙ってただけだ。美味かったろ？　伝統本玉露の茶と紫芋の芋金鍔（100g数千円　二切れ数千円）は」
「……美味しかった……けど、教えておいて欲しかった……」
その事実に、『なんて勿体無い……もっと味わって食べればよかった……』と美沙緒は後悔しながら、壱朗を睨むのだった。
「そうそう、そういう普通の顔で御用（パシリ）聞きを務めてくれよ？」
「……ハイ……頑張ります」

まだ少し拗ねた様な目をしながら、壱朗の気配りに感謝し、壱朗と共に日が暮れるまで景色を眺め、御茶を楽しみ続けていた……

◇　◇　◇　◇

日巫女の住む神社の最奥の一室、その使用目的からも、一般人が入室を許可される事は、まず無い部屋。その部屋で段上となる上座には壱朗が、その横には日巫女が腕に抱きつき、寄り添っていた。
壱朗は日巫女の用意した、あちこちに波の模様をあしらった作務衣（さむえ）。日巫女は相変わらず、豪華な季節柄の振袖を着崩して、胸元を開けて着ている。先日までは桜模様が多かったが、今日は牡丹だった。桜が散ったせいだろう。
その正面、一段低い位置に宮司の様な服装の老人が、更に老人の斜め後ろには、黒いスーツ姿の男性が座っている。この部屋に入れるのは代々の御用（パシリ）聞きを務める神凪家の当主か、御用（パシリ）聞きに指定された人物だけだ。先日までは、壱与（いよ）が日巫女の代役を務め、御用聞（パシリ）きは美沙緒の役目だった。

「彼方様、日巫女様にお目通りが叶い、嬉しい事この上ないですな」
宮司姿の老人がそう言うと、日巫女が面倒臭そうに言う。
「ウチは旦那はんとの逢瀬を邪魔されて、全然嬉しゅうないどすぇ？　神凪の爺、とっととお話しやし」
「日巫女。その言い方はやめ。可愛くないぞ？　……『気ぃつけますぇ？』……」
壱朗はそう言って窘める。日巫女は口調だけ媚びる様に言っていたが、表情は変わっていなかった。壱朗からは見えないからだろう。
壱朗は年寄り好きな為、高齢者には結構礼儀正しかった。自分の家族以外の高齢者には、だが。

「先日、家の者から、御用聞きを置いて下さると聞きましてな。気の変わらぬ内にと、連れて来させて頂いた次第でしてな」
そう、恐らく先日の美沙緒との約束通り、御用聞きをしに美沙緒が来たと思っていたので通させ、日巫女に理由を説明するつもりだったのだが、何故か来たのは老人と成人男性だった。
「爺さん。俺は年寄りは嫌いじゃないが、名前ぐらいは名乗ったらどうだ？」
壱朗は目の前の老人について、全く何も知らなかった。
「これは失礼しました。神凪家当主、『神凪陣太郎』と申します。これが倅の……『いや、いい』……はて？　面識がおありですかな？」
老人は自分の息子を紹介しようとするが、止められる。
「いや、知らん。だが、知る気もない。半人前には、名前は要らんだろ」
そこで男性が眉を上げたが、壱朗は無視する。
「爺さん、『陣爺さん』って呼んで良いかい？」
「お好きなようにお呼び下され。ワシは何とお呼びすれば？」
何が不満なのかは判らないが、呼び方にも気を付けようとする陣爺。

「好きにしてもらって構わんぜ。爺さんは解ってそうだしな。ただ、こっち側（裏社会）として接するなら、それなりの礼節は守ってくれ。人として、というなら『壱朗』と名前でも構わないさ」

日巫女は驚いて、壱朗の肩に乗せていた顔を上げ、壱朗の顔を見た。しかし、何やら楽しそうだったので、元の様に肩に乗せて傍観する事にした。

きっと何か、面白くなるのだろうと思って。

「では壱朗殿、と。しかし剛毅ですな。日巫女様を呼び捨てされる胆力も去る事ながら、日巫女様が絶対に嫌がられた、御用聞き（お側役）も置いて頂けるとは……『その事なんだがなぁ』……は？」

陣爺は関係を良好にする為か、壱朗の提案に乗り、人として壱朗殿と呼んだ。そして、壱朗に遮られた事の意図が分からず、その開いているのか分からない細い目を歪ませ、壱朗の言葉を待つ。

「御用聞き（お側役）が来ないんだが、どうなってる？　別に来れないなら来れないで良いが、一言連絡ぐらいは欲しくてな。基本だろ？　社会人としても」

壱朗も人として話を続ける。

「その為に、ワシが連れて来させて頂いたのですよ」

「陣爺さん。冗談はやめてくれ。美沙緒ちゃんは、まだ来てないぜ？」

陣爺は、意味が分からないと顔を歪ませ、何故、美沙緒なのかを考えた。壱朗の隣では日巫女が眉を上げ、壱朗の脇腹を抓る準備をしているが、壱朗は気にせずに言う。

「おいおい、約束しただろう？　今日から美沙緒ちゃんが御用聞き（御用聞き）に来ると」

「彼方様、それは美沙緒と約束なされたので？」

陣爺は念の為に確認を取る。彼の知っている話と、全く違うが故に。

「あぁ。『御用聞きとなったら置いてくれるか？』って言うから、テストしてやって、合格したからそう約束した」

陣爺は少し迷った様だったが、思い当たった様で、斜め後ろに座る息子の方を向こうとした瞬間、男性が機先を制す様に発言した。

「壱朗殿、お話の途中で申しわけありませんが、姉は来れないのです。別件の担当が決まりまして……」

壱朗は内心、『あぁ、やっぱりな。恐らくコイツが弟だろう』そう思っていたが、気にする事なく拒絶を叩きつける。

「うるせぇ。勝手に口を開くな。俺がお前に発言を許したか？　お前に名を呼んでいいと言ったか？　殺すぞ」

日巫女は壱朗を諭す様に、作務衣（さむえ）の重ねの隙間から手を入れ、『落ち着きやす』と囁く様に言葉をかける。勿論、本気ではない。唯の振りだ。

「陣じ……いや、神凪の。約束も守れねぇのか？」

その壱朗の言葉は、陣爺の知るどの人間（人格者）よりも、力に溢れていた。

「申し訳ありません。彼方様、手違いかとは思いますが、直ぐに守らせます」

陣爺は息子への追求は後回しにし、謝罪すべきと判断し、頭を下げる。

陣爺は気付いたのだ。壱朗の言葉の重みに。

人間が約束を守らないのなら、吸血鬼が守る必要も無いと言っている事に。

それを事前に断りも、謝りもせずに違う人間を連れて来たのだ。

怒って当然だ。

「おい、そこの半人前。自分が上等な生き物だと、勘違いしている

様だな。場を弁えろ。下らない自尊心（プライド）なんざ抱えてるテメェに、話に割って入る権利はねぇ。そんなんだから、姉に劣るんだよ。お前じゃ、テストする価値すらない」

壱朗の言葉には容赦が無かった。

陣爺はこの言葉によって気付いた。壱朗はこの行き違いの原因が、息子にあると気付いていると。しかし、陣爺も自信に溢れた老獪な人間らしく、起死回生の一手を狙おうとしていた。

「彼方様、お約束はもちろん守らせて頂きます。手配させています間に、この老骨にもテストとやらを受けさせては頂けませんかな？出来れば、この愚息にも。これでも目をかけたつもりでございまして、その結果を見てみたいのです」

ただの時間稼ぎの戯れ言（ざれごと）だった、老人好きの壱朗の性格も捉えた、冗談でもあった。だが、壱朗はその上を行く。その事に、陣爺は気付けなかった。

「いいぜ。但し、対価は払って貰うぞ？」

壱朗は少し楽しくなって来た声を抑え、前提を作る。

「それは、どの様な？」

時間が稼げる事に安堵しながらも、陣爺は美沙緒が一体どんな対価を払い、約束を取り付けたのかを急いで知りたかったが、今の状況では不可能だった。

日巫女は思ったよりも詰まらないやり取りに、飽きていた。だが、壱朗の視線が日巫女に向けられ、意地悪そうににやけているのを見て、『ティアはんのおらへん内に、少しでも旦那はんと楽しめるんなら、それもよろしおす』と、更にきつく壱朗に抱きついた。

そんな日巫女の耳に口を寄せ、甘噛みしてから囁く。

「日巫女。昨日のアレ、下に着て来い。テストを手伝って貰う」

壱朗の言うアレとは、閨（ねや）で見せた……壱朗が言うのだからと、日巫女は従う。

「ほな、少々お待ちやす」

そう言って日巫女が出ていくと、壱朗は陣爺に話す。

「今から、茶屋に向かえと美沙緒ちゃんに言え。代価は全て彼女から貰う」

壱朗はわざとイヤらしく笑い、陣爺とその息子の脳裏に、吸血鬼らしい欲求を思い浮かばせる事に成功する。

「……わかりました。それでよろしいのなら。義之、すぐに連絡を」

陣爺は本当に対価が何なのかが気になったが、受けさせろと言った手前、処女の血と言われても断れない。少なくとも美沙緒は合格したのだ、息子に出来無くとも、陣爺にそれが出来無い筈がない。そう考え、何かを覚悟するように、体に力を入れる。義之と呼ばれた息子は、美沙緒に電話してその旨を伝えた。

「あぁ、俺達の移動は気にせんでいいぞ。すぐに着く」

壱朗は既にこの部屋の壁に符を放っており、茶屋へと『隧道（トンネル）』が開く寸前だった。後は日巫女が着替えてくれれば出発できる。

「茶屋とは、稲荷山の茶屋ですかな？」

「あぁ、そうだ。行った事あるよな？」

行った事があろうが無かろうが連れて行くのだが。

「ワシはありますが、愚息は無いかもしれませんな」

「はい、初めてお供させて頂きます」

義之は内心喜んでいた。姉がどんなテストに合格したのか知らないが、それを自分も受けられる上に、その代価は姉が払うのだ。自分にとっての不利益など欠片も無いと思っていた。

美沙緒（姉）から聞いた話と壱朗の戸籍がある事から、義之は勘違いを

していた。彼の中では、『壱朗は生りたてであり、簡単に御用聞きを受け入れた』と思っていた。故に自分が代わる事も可能だと判断し、他の事件の担当を押し付け、陣爺には御用聞きを受け入れるそうだとしか言っていない。しかも、美沙緒(姉)の話では、壱朗の本気の半分を見たと聞いている。生りたて真祖の力など、大した事はないと知識としては知っている。機嫌は少し損ねた様だが、本当にそれが試験なのなら、自分でも余裕だと考えていた。

真祖の御用聞きなど、過去に存在しなかった。なりたくてもなれる物ではない。募集するなどと言えば、恐らく日本中の裏社会関係者が声を上げるだろう。

今までどこの名家も神凪家に、役を代われと言わなかったのは、日本には日巫女しか真祖は居なかった事、

日巫女が御用聞きなど要らぬという人柄だった事、

他の眷属にも御用聞きが付いており、規則(ルール)があった事、

代理の壱与(いよ)が人間の意見など全く聞かない人物だった事。

この四つが、神凪家が壱与(いよ)の御用聞きの職を保っていられた理由だった。

壱朗には大した力は無いだろう、だが日巫女は違う。日巫女があれだけベッタリなのだ、影響力はある筈だった。義之はそう考えて日本では初となる役に就き、他家に対する自尊心を満たす事しか、頭の中になかった。

「あそこは、それなりなら誰でも入れるはずだが。美沙緒ちゃんも、あそこまで俺を追いかけて来たしな」

陣爺はこの言葉に、壱朗を見ながら、その存在を掴みかねていた。

逆に壱朗は陣爺の顔を見逃していた。

壱朗には分からなかったが、陣爺は人間の感覚として知っていた。あそこに至る道は結界であり、普通の人間はよっぽど迷わなければ、

辿り着く事はない。しかも結界だと認識できていれば、逃げたくなる様な禍々しい結界なのだ。

陣爺が、自力で侵入できる様になったのは、四十を超えてからだった筈だった。

「美沙緒は、かなり優秀なのかも知れませんな……」

陣爺のその呟きは、義之の自尊心（プライド）にとっては幸いな事に聞こえず、壱朗にはしっかりと聞こえていた。

「お待たせしましたぇ、旦那はん、いきまひょか？」

「あぁ。開くぞ？」

壱朗は部屋に入ってきた日巫女の腰を抱き、『隧道（トンネル）』を発動させる。

「ついて来いよ？」

陣爺に視線を投げてそう言うと、部屋に突如現れた円形の光の輪の向こうには、茶屋が見えた。壱朗と日巫女はそのままくぐり抜け、さっさと茶屋へと向かう。術の技術の高さに驚きながらも陣爺は、目を見開いて放心している義之の腕を掴み、急いでくぐり抜けた。

「早く来いよ。危うく閉じそうだったぞ？」

日巫女の住処の屋敷（神社）から、ここまで最低で１０ｋｍ以上は離れている。少なくとも陣爺の修め、代々引き継いでいる巫術ではこうはいかない。あり得ない程に高度な術を見せられ、壱朗に対する危機感が今更ながらに心を占める二人だった。二人は少しの間立ち尽くしていた様で、既に壱朗は日巫女と共に、茶屋の店員に茶を用意させており、呼ばれて初めて茶席へと向かうのだった。

「陣爺、御茶請けは何がいい？」

呼び名を戻してそう聞く壱朗は既に、色とりどりの煎餅の入った鉢物の菓子器を傍に置き、醤油煎餅を齧っている。

日巫女は、上品なのに何処か色気の抜けない仕草で、鶯餅の載った皿から、――汚れるのを嫌ったのか――竹楊枝を器用に使い、少しずつ口へと運んでいた。

いつもの店員の四世が持つ御盆には、落雁、水羊羹、葛饅頭、椿餅、菱葩餅など、様々な和菓子が十種類ほど乗っている。

壱朗は――水無月は和菓子屋の娘さんだろうか？などと――疑問はあるが、いつも美味い御茶と御茶請けを用意してくれるので、それでいいと納得している。

「流石は真祖様、と言うところですかな、壱朗殿？」

陣爺は落雁を取り、義之は金鍔を取っている。

「何がだ？　御茶請けか？　コレはあの水無月ちゃんがどっからともなく用意する最高級和菓子だぞ？」

やはり姉弟らしく、同じ様なモノを取るのかと思いながら、茶化して言う。

「御戯れを、先程の術ですよ。あれ程の転移術は、大陸の方でもなかなか見られぬでしょうな」

本当に感心しているらしい陣爺には悪く思いながら、『日本の技術ってここまで劣化してたのか？』と壱朗は思っていた。そこに日巫女が補足する。

「旦那はん。日本じゃ昔から、ウチらが力貸してたんどす。せやから、大陸ほどの発展がないんどすぇ」

「あぁ、そう言う事か。式としても、活躍してたって言ってたな。壱与が」

壱朗はそれで納得した。

西洋や大陸では吸血鬼は完全に悪で、協力体制になったのも、1

８００年以降が主流だったはずだ。だからこそ、吸血鬼と闘い続けてきた協会などの技術は、その長い年月での成果であり、目を見張るモノが多くあるが日本には少ない。その代わり、地脈を利用しての大規模な陣術などの範囲と効果は、世界でも類を見ない。

「ま、あんな『隧道（トンネル）』ごときでいいなら教えてやるさ。しかし、大陸（アジア）はともかく、西洋（ヨーロッパ）辺りと交流はあるんだろう？　あっちじゃ多分、大東南した事ないぞ？」

外交上の建前を除いて言えば、日本と中国の辺りの関係は、今も良くない。裏社会など、それどころではない。だから、会合にも来なかった真祖がいるのだ。

「ぬぬ。魔術協会の奴等め、出し惜しみしておるな。今度の定例会で一泡吹かせてくれる……」

陣爺は何やら物騒な企みをしている様だ。

と、そこに。

「皆様、御茶が入りました。それと彼方様、美沙緒さんがお見えになりました」

水無月（店員の四世）がそう言って、御茶を配ってまわる。

「おまたせ……しました」

美沙緒は急いできたのか、汗をかいていた。

「じゃ、水無月（店員の四世）ちゃん、美沙緒ちゃんにお絞り持って来てあげて。あと奥に着替えあったっけ？　出来れば全員分。出さなくてもいいから、見といてくれる？」

「わっかりました。お絞り、持って来ます」

水無月（店員の四世）は元気良く返事すると、店内へと戻って行く。

「……あ、どうも。あり……がとうございます」

美沙緒は相変わらずの抑揚で話している。

「美沙緒。後ほど話があるので、義之と本堂に来なさい。いいな？」

陣爺がこういう風に二人を呼ぶ時は、大抵は義之が褒められ、美

沙緒が怒られる。説明しようにも、美沙緒は全部言い切れず、黙ってしまう事が多いので当然だった。いつも通りなら。

「は、分かりました」

「……はい。お父様」

壱朗はそんな事は知らないので、義之は、何故か自信満々に、美沙緒はショボくれているようにしか見えなかったが、この後の事を考えれば、どうでもいいなと思っていた。

第１８話　事情（後書き）

感想や評価を頂けますと作者が大変喜びます。
何卒よろしくお願いします。

実はこちらの執筆は『義賊と貴族がメイドと主』
という作品の合間のお遊びとして書き始めました。
お怒りはあるかもしれませんが、あちらにも一読の価値が……
ないかもしれません。
それでもよろしければあちらもご一読下さい。

第１９話　集合（前書き）

プロローグの第０１話の前書き、後書きを理解された上でお読みください。

第19話　集合

いつもの茶屋の外には、緋色の毛氈を掛けた床几台が、けいがまえの形に三脚置かれていた。それぞれの床几台の傍には、妻折の野点傘が立っており、左側は誰も座っていない。

右側には奥から、陣爺、義之、美沙緒の順に、そして奥の床几台には壱朗が座っていた。勿論、腕には日巫女が抱きついている。右腕だったが。

「で、旦那はん。『てすと』て言うてはったけど……？」

日巫女は、ティアという対抗馬が居ない為か、今日は比較的大人しかった。

「ん。一昨日、美沙緒ちゃんにしたのとほぼ同じ。まずは日巫女の全力を見せて、今迄の日本の真祖の力を理解してもらう。次に俺の力を半分見せて、聞きたい事に答えてあげる。一つだけ。どんな事でもな」

「それで？　失格やったら？」

「ただの失格なら、無視。阿保過ぎれば抹殺。合格なら御用聞きに採用」

楽しそうな壱朗に日巫女は、腕を抓りながら聞く。

「そないに女を増やしたいんどすか？」

そんな無理難題が合格できる筈がない。美沙緒を傍に置きたいのだと、判断した日巫女は詰問しながら、腕を抓る強さを上げていく。顔は笑っているが、背中には蛇が見え隠れしている姿は、本当に似合いすぎていて、怖いと思う壱朗だった。

「違うって。冗談だよ。本当はミーシャの事。添い寝して貰う人、

欲しくないか？　どうせ夜は日巫女も来るだろ？」
　日巫女は少し目を見開いた後、二、三度大きく瞬きした。実は壱朗達には、ミーシャの事で困っていた事があるのだ。

　日巫女がティアと初めて二人で、壱朗の閨（ねや）へと押しかけた時、壱与（よ）にミーシャを預けた。だがミーシャは、床に就いて一時間もしない内に起きて泣き喚き、壱朗達は中断し、ミーシャと共に床に就いた。ミーシャはラマルティーヌ卿の元で軟禁されていた時に、吸血対象扱い（ワィン）されていたせいで、三人（壱朗達）以外の吸血鬼と一緒に寝る事を強く拒んだ。それ以降、ティアと日巫女の間には、閨を共にしない方がミーシャと一緒に眠る約束（ルール）ができたのである。
　だが人間ならどうだろう。吸血鬼特有の匂いもない。吸血衝動を抑える訓練にもなる。問題は何も無かった。本当に『ミーシャが気に入るのか』という不安があるが、壱朗が選んだのだから、大丈夫だろう。

　納得した日巫女は、急に色気のある笑顔に戻り、美沙緒を擁護し始める。
「美沙緒はん、言いはりましたなぁ？」
「は、はい……そうです」
「なんや、とろこぃ娘（こ）やけど、何処（どっか）か壱与（いよ）に似てますなぁ。よろしおす。御用聞（パシリ）きとして、ウチらの傍に置いてあげますさかい、おきばりやす」
「は、はい。……ぇ？　いいんですか？　あの……」
　美沙緒を始め、神凪の三人には意図がわかるはずもなく、混乱していた。
「かましまへんぇ。ウチの旦那はんが、他の女（おなご）に手ぇ出さはる訳やおまへんし。これも、えぇ女（おなご）の甲斐性どすぇ」
　そう言いながら、水無月（店員の四世）の置いた御茶に、手を伸ばす日巫女。
　内心では多少の葛藤があるが、要は事前に釘をさせばいいと判断

した。

既に日巫女の中では、義之の事はあり得なくなった。ミーシャの添い寝を男に任すなど、あり得ない。それに寝所のある建物に、壱朗以外の男を入れるつもりも無かった。……そういう意味では、初めからあり得ない事だったのではあるが。

決定事項の様に進む話に、義之が発言しようとしたが、陣爺に止められる。

「義之、お前は認められとらん。口出すんは、自分の胆力証明してからにせい」

「は、分かりました」

「すみませんな、若さゆえ、という事にしてやってください。壱朗殿」

陣爺は、おおよその決着が見えてしまったのだろう。壱朗に、わかっておりますぞとばかりに眼光を向け、理解を求める。

「ま、いいさ。美沙緒ちゃんも。もう一回、一緒にテストな？」

陣爺に笑顔を返し、美沙緒の頭を撫でながら言う。

「は、はぁ……？」

全然判らない美沙緒を放ったまま、話は進むのだった。

とにかく壱朗は、茶席の中央に符を数枚、投げ広げて陣を張る。

「日巫女、アレで背中の『魔血晶』が見える様にして、全力を出して見せろ。あぁ、背中以外は隠せよ？　透けるからな」

「ほな、旦那はんが、前で着物押さえておくれやす。ずれたらかなわんさかい」

そう言って壱朗に甘えるのも、美沙緒に対する牽制（見せつけている）なだけだった。

壱朗は、日巫女と抱き合う様にして立ち、着物の上を背中が見える様に脱がせる。すると素肌が透けて見えるような長襦袢が現れ、

見方によっては裸よりも煽情的な姿になる。この長襦袢は、完全には透けないが、閨の中で蝋燭の明かりなどで見ると、透ける部分と透けない部分が衣擦れで変わり、壱朗を何とももどかしい気分にさせ、日巫女に襲い掛からせた。日巫女渾身の壱朗誘惑専用長襦袢だった。

日巫女の背中は、もう枯れた筈の陣爺はもちろん、女の美沙緒ですら美しいと欲情しそうになる。若い男である義之は、その劣情を抑えるのに必死であった。

「さて、これから日巫女の全力を見せて貰う。気をしっかり持てよ？　特にそこの半人前。欲情してる場合じゃねぇぞ、いいか？」

恐らく、そうやって挑発させる為に着せたのだろう。直接肌を見せたくなかった、というのもない訳ではないのだろうが。

「だ、大丈夫に決まっています。どうぞ」

「壱朗殿、どうぞ」

「……はい……」

義之、陣爺、美沙緒は覚悟を決めたようだ。

壱朗は周辺を巻き込んだ結界を構築する。そのまま日巫女の腰を抱いて、更に密着し『いいぞ』と耳元囁いてやり、始めさせる。

そこからゆっくりと侵食が始まった。

地鳴りのような、それでいて蛇の這いずる音の様にも聞こえる、感覚を揺さぶる音が、足元から段々と上がってくる。

それは、底なし沼に引きずり込まれる様に、音から逃げる事もできず、音を生み出す空気に包まれもがく事すらできない。

そんな感覚に全身が沈み、嫌悪感に包まれたかと思った瞬間。

ソレが来た。日巫女の顔は見えていない。背中には『Ｂｌａｃｋ（漆黒の）Ｔｅｔｒａｇｏｎ（四角魔血晶）』の魔方陣が長襦袢越しに薄っすらと、見えている。

それだけの筈なのに、三人は全身が大蛇に巻きつかれ、締め上げられている様に感じる。

どれぐらい時間が立ったのだろうか、壱朗が日巫女に再度耳打ちし、その言葉に日巫女が力を抑える。壱朗が感謝を行動で示してから、着物を戻してやる。

「どうだ？　これが一回目。俺の半分の半分、つまり四分の一だな」

「……大丈夫、ずっとまし……」

美沙緒は壱朗の半分を見ているのだ、これで潰れられたら、どうしようも無い。

「美沙緒、よく耐えたな。お前がここ迄とは……義之！　しっかりせい！」

陣爺は、さすがは老獪さを持ち合わせているだけはある、と言ったところか。

「……大丈夫ですとも、『はぐれ』狩りにも行きますからね、我々は」

義之は気丈にそう言うが、顔はかなり青い。

この三人は巫術師の家系で、耐性があるにも関わらずこれである。一般人ならどうなるのか。

「……励まし合ってるとこ悪いが、本番だぜ？」

何時の間にか、壱朗は上半身裸で日巫女に作務衣（さむえ）を預けており、既に背中を向けていた。そして前回とは違い、一瞬にして半分まで

力を出し切る。

そこには殺意はないのにも関わらず、

……殺される……

三人がそう認識してしまう程に、あっさりと命を奪う感覚（イメージ）が、そこにあった。

そんな三人の目の前の『Ｂｌａｃｋ（漆黒の）Ｏｃｔａｇｏｎ（八角魔血晶）』の魔方陣が殺気を発した瞬間――――

――――死んだ。

殺された感覚が、指先から髪の毛一本に至る迄、全てを突き抜け、通り過ぎる。

そして、壱朗が殺気と力を抑えた時、起きていたのは美沙緒だけだった。

「質問は……必要ねぇな、二人とも失格だ」

美沙緒は一昨日ですら、ゆっくり力を入れ、手加減してくれていたと知る。

もっと短時間で、一瞬にして当てられていたら、心臓麻痺で死にかねない。

目の前で、日巫女が壱朗の作務衣（さむえ）に顔を埋（うず）め、頬ずりしている光景も。

あの二人の殺気の後では、笑う事もできない。
檻の無い狭い部屋で、自分と肉食のライオンがボールで遊んでいる様な、そんな危険を感じるモノでしかなかった。
壱朗も日巫女も人間ではない、そう認識させられるには十分だった。

「……あ……お父様……」
隣で気を失って、美沙緒にもたれている陣爺を起こす。
「ん、あぁ……あ、そうか、ワシらは……美沙緒お前は耐えたのか……？」
何となく気まずく、返事しにくい空気なので、美沙緒が首を縦に振る事で答えると、陣爺は美沙緒の頭を撫でた。
「警察の方は最悪、辞めても構わん、何が何でもしがみついて、鍛えてもらえ。今の神凪にはその強さと、術が必要だ。わかるな？」
美沙緒と陣爺は初めて知った真祖の本当の怖さに、『対等ではなくとも、相手にするのは面倒』そう思わせる力がいると、感じ取っていた。その使命の前には、警察上層部から頼まれた、現状の把握と真祖の情報の開示など、どうでもいい事だった。

「……彼方さん……ぁの」
「何だ、美沙緒ちゃん。陣爺さんにも言ったが、人としてなら『壱朗』って読んでもいいぜ？　その方が使い分けし易いだろ？」
日巫女からやっと服を取り返し、着る壱朗。
「……では、い、壱朗さん……き、鍛えて下さいっ。お願いします」
しかし壱朗は首を左右に振り、あっさりと断る。
「んー。俺は無理。たぶん、途中で殺しちゃうし、襲っちゃうと俺が殺されるし」
『おそっちゃうと』の『そ』辺りで、日巫女からの攻撃が始まっていた。
「何とかなりませぬかな、壱朗殿。巫術も進歩がいるのです。外（ぐれの）か

らくる吸血鬼（クズ）に対抗する為にも」
陣爺の言い方はともかく、込められた想いは鬼気迫っていた。
「大丈夫、もうすぐ先生と、美沙緒ちゃんの姉弟子が帰って来るから」
日巫女はそれを聞いた瞬間、壱朗の右腕に抱き付き、堪能し始める。
「それよか、陣爺。そこの馬鹿息子抱えてやって。水無月ちゃーん（店員の四世）。着替えとお風呂用意してー！　こら、日巫女。俺達じゃない。もう散々入ったろ」
お風呂と聞き、ティアのいない極楽な日々の締めとして、壱朗とお風呂に入ろうとする日巫女を止める。
「はいっ！　用意はとっくに完了済です。で、どなたが？」
「すみませんな、バカ息子が気絶して……」
「あちゃ、お漏らしですね。まぁ、日巫女様の時にならなかっただけ、すごいですよ。私が生りたての時は、涙とか涎とかも流して、川に放り込まれましたからね」
何とも現実味あふれる水無月（店員の四世）の言葉に、陣爺はホッとしながらも、情けない息子をこれからどう鍛えるかを考えていた。
「水無月ちゃん（店員の四世）、その床几台（しょうぎだい）は燃やすから、奥から新しく持って来て、足りないだろうし。あと、ティアとミーシャの御茶の用意、よろしく」
「分かりました、彼方様」
そう言うと、義之を抱えた陣爺を連れて、奥へと入って行った。

「さて。その間に、ちょっとだけ教えようか」
「旦那はん、あぁーーん」
日巫女は、どうにか時間を目一杯堪能しようと、椿餅（つばきもち）を切って食べさせ始めた。
「まず……ぁむ……巫術も悪くはないが、力を借りるべき大地やら何やらが汚染されすぎてる。発動に時間のかかる方法なら、強いの

もあるみたいだが、即効性がない。という訳で符術も併用して貰う。
……ぁむ……はい、これ」
日巫女からの『あーん攻撃』を受け止めながら符を渡す。
「……これは……？」
「今から、あの床几台（しょうぎだい）……ぁむ……を浮かすから、その符に燃えろと念じながら、巫力を込めて、カードを投げるみたいにして、……ぁむ……投げ当てる。って、喉乾くだろうが！」
そう言った瞬間に、待ってましたと日巫女はぬるくなった御茶を口に含み、壱朗に口移しで飲ませる。
「……んはぁっ。ったく。コレがしたかっただけかよ……で、わかった？」
「……壱朗さん、エロスですね……」
「そういう事はスルーしなさい。美沙緒ちゃん」
「……はぃ……」
返事した後、美沙緒は渡された符を構える。
「いくよ～」

壱朗の力により、床几台（しょうぎだい）が持ち上がり、１０m先に停止する。

「……はっ！」
掛け声とともに、美沙緒が投げた符は床几台（しょうぎだい）に当たり、直径５m程の火の塊になり、燃え尽きる迄の三分程の間、その火球を維持していた。
「わかるか？　符は作る時に込めるタイプと飛ばす時に込めるタイプがある。今の火球みたいな前者は、とにかく作っておけば、後は少量の力で発動できる。後者は、使う時に沢山力を込めなきゃいけない。まぁ、特殊な例外もあるけどな」
「……ですので、符の作り方が重要となります。壱朗様考案の符は、他に類を見ない程高性能ですが、逆に奪われればこちらに火を吹きますので、ご注意を」

消し炭を見ながら聞いていると、いきなり説明が女性の声になった。顔を向けると、見知らぬ綺麗な女性が話してくれており、焦る美沙緒。ティアと美沙緒は初対面だった。

「……え、と。初めまして……ですよね？」

ティアの向こう側では、壱朗の顔にミーシャがしがみついており、『パパ』という単語を連呼している。

「初めまして、ティアと申します。壱朗様の唯一の眷属で、壱朗様のご両親からは『嫁』と。ミーシャちゃんにとっては、壱朗様が『パパ』私が『ママ』です」

「……はぁ、神凪美沙緒と申します……」

「えぇ、説明は不要です。血族間通話という携帯電話のような技術で、事情は聞いております。貴女には、若干の血を提供して頂きますが、『魔血晶』を持たない三世程度なら、余裕で倒せる様に鍛えて差し上げましょう。そのかわり、ミーシャちゃんと仲良くして下さい。彼女は真祖ですが、貴女にとっては姉弟子になりますので。よろしいですね？」

ティアに矢継ぎ早に言い切られ、何となく頷いてしまう美沙緒。

しかし、血をよこせと言われた事を思い出し、焦って聞こうとする。

「……あの、しゅ、しょ、処女じゃなくなると困るんですが……」

別に、血を吸われれば処女で無くなる訳ではないのだが、一般的にはそのまま処女も頂かれてしまう場合が多い。その事を知っている美沙緒は、赤くなりながら、必死に言った。

「何故です？」

別に頂かれてもいいではないか、と言わんばかりにあっさり言うティア。

「……え、と……巫女だから……」

そのティアの態度に、壱朗も頂いちゃう事があるのだと理解する。

そして壱朗に頂かれる想像をしてしまい、さらに赤くなる。

「巫女が処女でなければ、力を失うというのは正しいですが、失ったからと言って前より弱くなる訳ではありません」
「……え？……」
そこで、ようやく冷静になり、ティアの言葉で自分の信じている巫術の根底を覆され、信じられない気持ちの美沙緒。
「そんな事で力を失っていたら、どうやって子供を産んで、次の世代に伝えるのですか？」
確かにそうだが、美沙緒は答えを知らなかった。
「……そう、ですが。でも……」
「単純に、口伝が失われているだけです。壱与さんの修めていた巫術は強かったですよ？　彼女はあの体でしたが、処女ではありませんでした。吸血鬼だからでは無いのですよ。破瓜後の鍛え方、というのがあるのです。それも教えて差し上げます。まぁ、失った場合には、ですがね」
ティアの向こうではやっと落ち着いたのか、ミーシャと壱朗が仲良く煎餅を齧り御茶を飲んでいた。
「……はぁ」
「とにかく、貴女は今日から、強くなる事はあっても、弱くなる事はありません。こと戦闘に関しては」
陣爺にも聞いて許可がでればいいかと、覚悟を決める美沙緒。
「さて、それでは御茶にしましょう、準備も進んできた様ですし」
茶席では、壱朗と水無月が席を整えていた。ミーシャは綺麗に並んだ動物を模した和菓子を、日巫女のしてくれる種類の説明を聞きながら、眺めている。
「……あ、はぃ。……ティア様」
「ティアさん、で構いません。私は壱朗様と同じ呼ばれ方でいいのです。」
そう会話しながら二人で茶席に戻り、元々空いていた席に、ティアと美沙緒は並んで座る。
「……ティアさんは壱朗さんのお嫁さんで……壱朗さんとティ

アさんのお子さんがミーシャちゃんで……あれ？」
　日巫女様は？　と美沙緒が首を傾げる。
「あっていますよ。ミーシャちゃんの髪は私似なのです。美沙緒さん」
　平然と日巫女の存在を無視して、実の子供の様に言うティア。
「ミーシャはね、パパの子供なの。商店街のおじちゃん達がね、今度は、ママだけじゃなくってパパも一緒においでって言ってたの！」
　実の親には愛されなかったが故に、祝福されてご機嫌の、無邪気なミーシャ。
「……あの、日巫女様は……？」
「ウチも嫁、勿論ママでもありますぇ。当たり前やおへんか」
　あぁ。吸血鬼って一夫多妻制なんだ、と思い込む美沙緒。
「美沙緒さん、二号さんと言う言葉をご存知ですか？　ご存知なければ覚えておいて下さい。日巫女様の事です」
「ティアはん！　それは言い過ぎとちゃいますのん！」
「私達がいないのをいい事に、透ける長襦袢で誘惑する人には、それで十分です」
　感情的になり、単なる口喧嘩のようになっている、ティアと日巫女。
「それは帰ってこうへんのが悪いんどすぇ？　ウチのせいちゃいますぇ？」
「あぁ、そうでした。ご両親から、『結婚式はいつにする？』だの『せめて写真だけでも』と、言われていまして、えぇ。壱朗様と結婚記念撮影をしなければ。美沙緒さん。何処かに腕の良い写真屋さんはありませんか？　ドレスも白無垢もお母様のと、お祖母様のをお預かりして来ましたし」
　会話の早さについていけない美沙緒は、とりあえず写真屋は探しておこうと、心に刻んでおいた。
「あきまへんぇ！　そないな事一人だけやなんて、ズルぅおますぇ！」

「一人じゃないよ。ミーシャもって、ドレスと着物もらったの。みんな可愛いよって、褒めてくれたよ？　パパ、一緒に写真撮りに行ってくれるよね？」

行ってくれなきゃ泣くよ、と目が言っている。

「ん、うん。そうだな。行こうかな」

ティアや日巫女ならともかく、ミーシャには勝てない壱朗。

「壱朗様もこう言って下さってますので、準備しなければ……」

こうなる事も予想済みで、ミーシャに頼む様に言っていたティア。

「いやぁ！　ウチも旦那はんと写真撮るぅ！」

悔しいが、自分もしたいので我が儘を言う日巫女。

「……えっと、皆さん、吸血鬼ですよね。……壱朗さん？」

先ほど迄の怖さが、頭から完全に消え去ってしまった美沙緒。

「……一応な……内二人は真祖だしな……」

もう、哀愁しか壱朗の背中には残っていなかった。

「……いい家族を、お持ちになりましたね……」

美沙緒の慰めの言葉も、何処かおかしかったが、今の状況程ではなかった。

「今、この状況で言われてなきゃ、素直に喜ぶんだがな……」

取り敢えず、陣爺達が席に戻る迄は、三人については放っておく事にした二人だった……

そんな能天気な様子を、水無月（店員の四世）は複雑な心境で見ていた。

実際のところミーシャは、壱朗、ティア、日巫女の三人以外の吸血鬼とは、一緒に眠る事だけでなく、手を繋ぐ事もしなかった。屋敷の同僚（他の四世）が変な接し方をして、ミーシャが不機嫌になると、壱朗とティアはともかく、日巫女は怒る。

――――機嫌のいいミーシャに『ママと呼ばれたい』だけなのだが

―――――

最近、水無月（店員の四世）が毎回のように、見た目が綺麗で美味しい和菓子（兎や猫の形／超高級品）を出すので、気に入られたようで、たまに手を繋いだり、一緒に御茶を運んだりしている。

――――ミーシャは無理に与えられていた為、洋菓子類（クッキー類）が嫌いになっていたのと、壱朗に上手に御茶を出して、水無月（店員の四世）の様に褒められたいと思っていた――――

水無月（店員の四世）は、ミーシャに手を繋ぐらいは許されているせいで、日巫女のご機嫌を損ねぬようにと、茶屋の仕事を屋敷（他の四世）の同僚に押し付けられていた。水無月（店員の四世）も最初のうちは面倒に思っていたが、一昨日から事情は変わった。

壱朗にご褒美と称して、血を垂らした玉露を飲ませてもらったからだ。その美味さに水無月（店員の四世）は壱朗に抱きつき、怒られて正座させられた。

だが、水無月（店員の四世）は諦めていない。いつかまた、用意した和菓子を壱朗に美味しいと言わせ、あの極上の玉露（壱朗の血入り）を……と、燃えていた。勿論、屋敷（他の四世）の同僚には内緒だし、この茶屋は自分専用の仕事場だと、勝手に思っていた。

そして今、美沙緒がミーシャの世話を任されると、どうなるのかを考えていた。

壱朗との約束は問題ない。ミーシャ達には関係の無い物だからだ。しかし、職場は違う。屋敷（他の四世）の同僚達に、『代われ』と言わせない様にしなければいけない。その為には、美沙緒とは仲良くした方がいい。美沙緒は無愛想だから、仲良くなりにくい筈だ。ただでさえ、日巫女の眷属は古い者が多く、人間には冷めた態度を取る。

という事は、仲良くするだけで皆が勝手に譲ってくれるはず。

簡単に結論を出した水無月（店員の四世）は、義之（試しに買った安物）に出した物とは違う、壱朗（前回と）に出す予定だった芋金鍔（同じ高級品）を用意して、玉露と共にティアと美沙緒の元へと運ぶのだった……

第１９話　集合（後書き）

感想や評価を頂けますと作者が大変喜びます。
何卒よろしくお願いします。

実はこちらの執筆は『義賊と貴族がメイドと主』
という作品の合間のお遊びとして書き始めました。
お怒りはあるかもしれませんが、あちらにも一読の価値が……
ないかもしれません。
それでもよろしければあちらもご一読下さい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1259y/

吸血鬼にも愛は必要？(仮)

2011年12月7日01時57分発行